

久 部 愛 宕 塚 古 墳
谷 口 山 古 墳
御 蔵 山 古 墳

平成7年3月

宇都宮市教育委員会

序

本市に所在する古墳は、昭和53年から5年間かけて実施しました遺跡分布調査の結果、約230基が確認されております。これらの幾つかは、開発によりすでに消滅してしまったものもあります。このような中、今回、ここにご報告します久部愛宕塚古墳・谷口山古墳・御蔵山古墳の3つの古墳は、調査の結果いずれも貴重な古墳であることがわかり、地権者の方々のご理解、ご協力を頂き、開発されずに保存された古墳であります。

中でも、谷口山古墳は、未盗掘の横穴式石室であったため、人骨などの遺物の残りがよく、その石室も良好であることから、平成3年11月27日付けで宇都宮市指定文化財として保存することになりました。

近年、開発により多数の遺跡が消滅していく中、地権者の方々の文化財に対する深いご理解により保存することができましたこの3つの古墳は希有の例と言えます。

今後とも当教育委員会といたしましては、市民の方々の文化財行政に対するご理解、ご協力を得ながら文化財の保存・活用に努力して参りたいと存じます。

末文になりましたが、3つの古墳の発掘調査にあたりご指導を頂きました諸先生方並びに、調査さらには保存にもご理解、ご協力を頂きました地権者の皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

宇都宮市教育委員会

教育長 大塚 一之

例 言

1. 本書は、平成3年度に調査の行われた市内の古墳である久部愛宕塚古墳、谷口山古墳、御蔵山古墳の調査報告書である。尚、久部愛宕塚古墳は宇都宮市石井町3203-1に所在し、古墳整備のための発掘調査、谷口山古墳は宇都宮市長岡町に所在し、駐車場造成に伴う記録保存のための発掘調査、御蔵山古墳は宇都宮市埜田町535他に所在し、前方部墳頂上にある雷神社改築に伴う記録保存のための発掘調査である。
2. 各調査とも営利を目的とした開発ではないことから緊急調査費を使い、宇都宮市教育委員会が主体となり調査を行った。調査期間は、久部愛宕塚古墳が平成3年2月12日～同年3月31日、谷口山古墳が平成3年3月4日～同年7月8日、御蔵山古墳が平成4年3月6日～同年4月14日まで発掘調査を実施した。
3. 調査面積は、久部愛宕塚古墳が2,500㎡、谷口山古墳が約300㎡、御蔵山古墳が約200㎡である。
4. 遺跡地における測量、写真撮影等は横堀聡、賀来孝代、吉沢宣行の協力を得て、定岡明義、梁木誠、大塚雅之、神野安伸、今平利幸がこれにあたった。
5. 遺構、遺物の整理、実測等は、大森八重子、大野節子、福田貴久栄、樋口静子、鈴木芳子、鈴木道子、賀来孝代、横堀聡、大澤順子、君島朱美の協力を得て、梁木誠、今平利幸がこれにあたった。また、遺物の写真撮影は横堀聡、大澤順子、賀来孝代、岡田有紀子がこれにあたった。
6. 本書の執筆は、久部愛宕塚古墳を梁木が、谷口山古墳・御蔵山古墳を今平が担当した。尚、第2章Vの人骨鑑定は茂原信生獨協大学助教授(当時)、第3章Vは山ノ井清人作新学院教諭から玉稿を頂いた。
7. 本遺跡出土の遺物及び図面・写真は、宇都宮市教育委員会で保管している。
8. 発掘調査の関係者は次のとおりである。

〔指導助言〕 国土館大学教授 大川 清
宇都宮大学教授 石部正志
宇都宮市文化財保護審議委員会委員 埜 静夫
同 大金宣亮
同 橋本澄朗

〔事務局〕〈発掘調査時〉

教育長	藤田昌平	文化財保護係長	定岡明義	博物館建設推進班	白井義雄
教育次長	田辺雄三	文化財保護係	手塚英男	同	小松俊雄
文化課長	安達光政	同	梁木 誠	同	片山 繁
文化振興係長	藤田秀樹	同	大塚雅之	同	阿部邦男
文化振興係	湯沢孝夫	同	神野安伸	同	青木 徹
同	白井成志	同	今平利幸		
同	高栖良子	同 囑託	吉沢宣行		

〈報告書作成時〉

教育長	大塚一之	文化振興係	高栖良子	文化財保護係	大塚雅之
教育次長	近能忠良	同	小野敬子	同	富川 努
文化課長	横堀杉生	文化財保護係長	手塚英男	同	神野安伸
文化振興係長	桜井敬朔	文化財保護係	梁木 誠	同	今平利幸
文化振興係	白井成志	同	小松俊雄	国民文化祭推進班長	湯沢孝夫

国民文化祭推進班	小林修一	国民文化祭推進班	関口 淳
同	浜野 均	同	秋田 靖
同	吉沢秀和		

〔調査補助員〕

（久部愛宕塚古墳）大塚清，小松寅雄，吉沢良助，熊田 胖，菱沼喜裕，吉沢宣行，賀来孝代，横堀 聡
（谷口山古墳）山田 隆，山田謙嗣，大島美紀，奈良部和美，菊地正八，高岡宣子，安場達也，古川恵子，
山田紀子，矢内美雪，熊木澄夫，山田代志宣，田実武弥，毛塚康恵，山田勢津子，山田潤造，山田満雄，賀
来孝代，横堀 聡

（御蔵山古墳）阿部 昭，阿部はるみ，大垣ヤスヨ，木滑トミ，木滑一枝，賀来孝代，横堀 聡，斉藤京子，
鈴木銘一，阿久津博樹，入江ツヤ，大塚 清，小松寅雄，吉沢良助，熊田 胖，清水 豊，八百井トシ，矢
田部俊雄

9. 発掘調査及び報告書作成に関しては，次の諸機関，諸氏の御協力を賜った。記して感謝の意を表する次
第である。（敬称略）

栃木県教育委員会文化課，栃木県埋蔵文化財センター，二荒山神社，助川通泰，秋元陽光，阿部知己，石
橋知明，大橋泰夫，菊地重雄，後藤信祐，小森哲也，小森紀男，斉藤光利，篠原祐一，芹沢清八，田熊清彦，
田代 隆，塚原孝一，中村亨史，中山 晋，橋本博文，藤田典夫，安永真一，吉羽和郎

凡 例

1. 遺物実測図番号と図版の遺物番号とは一致する。
2. 断面図基準線は標高であり，平面図の方位は磁北を示す。
3. 遺構実測図の土層説明においては，次の略号を使用した。

ロームブロック…ロームB 今市パミス…IP 七本桜パミス…SP 鹿沼パミス…KP 炭化物…C

4. 久部愛宕塚古墳の略号はU.K.Y.A，御蔵山古墳の略号はU.M.Tである。

目 次

序・例言・凡例

第1章 久部愛宕塚古墳

I 調査の経過

- 1 調査に至る経過……………3
- 2 調査の方針……………3
- 3 調査の経過—発掘日誌抄—……………3

II 遺跡の環境

- 1 地理的環境……………4
- 2 歴史的環境……………4

III 調査結果

- 1 現況測量調査……………6
- 2 周溝調査……………8
- 3 出土遺物……………16

IV まとめ

- 1 墳形と規模……………18
- 2 築造年代……………20

第2章 谷口山古墳

I 調査の経過と方法

- 1 調査の経過……………23
- 2 調査の方法……………23

II 遺跡の環境

- 1 地理的環境……………25
- 2 歴史的環境……………25

III 調査結果

- 1 墳丘……………27
- 2 石室……………27
- 3 出土遺物……………34

IV まとめ

- 1 石室構造について……………40
- 2 出土遺物について……………41
- 3 横穴式石室と人骨との関係……………42

V 谷口山古墳出土の人骨について……………43

第3章 御蔵山古墳

I 調査の経過と方法

- 1 調査の経過……………49
- 2 調査の方法……………49

II 位置と環境

- 1 地理的環境……………49

2	歴史的環境	52
Ⅲ	調査結果	
1	墳丘	54
2	出土遺物	59
Ⅳ	まとめ	
1	埴輪について	69
2	出土土器について	70
3	墳形について	70
V	御蔵山古墳と古棺記	72

挿 図 目 次

第1図	久部愛宕塚古墳墳丘測量図	3	第24図	谷口山古墳E・G区人骨出土状況図	35
第2図	久部愛宕塚古墳周辺遺跡分布図	5	第25図	谷口山古墳遺物出土状況図	36
第3図	久部愛宕塚古墳現況測量図	7	第26図	谷口山古墳出土遺物実測図	37
第4図	久部愛宕塚古墳トレンチ配置図	8	第27図	谷口山古墳耳環・ガラス小玉実測図	38
第5図	後円部北東側トレンチ平面図	9	第28図	縄文時代の遺物	39
第6図	前方部西側トレンチ平面図	10	第29図	谷口山古墳復元図	41
第7図	前方部東側及び東くびれ部トレンチ平面図	11	第30図	古墳分布図	50
第8図	前方部前端部トレンチ平面図	13	第31図	御蔵山古墳位置図	53
第9図	久部愛宕塚古墳トレンチ断面図(1)	14	第32図	御蔵山古墳墳丘測量図	55
第10図	久部愛宕塚古墳トレンチ断面図(2)	15	第33図	T-1平・断面図	56
第11図	久部愛宕塚古墳出土円筒埴輪	16	第34図	各トレンチ平・断面図	57
第12図	久部愛宕塚古墳出土形象埴輪	17	第35図	T-1断ち割り部分遺物出土状況図	58
第13図	久部愛宕塚古墳墳丘復元図	19	第36図	御蔵山古墳出土土器実測図	60
第14図	壬生町・牛塚古墳墳丘測量図	20	第37図	御蔵山古墳埴輪実測図(1)	61
第15図	谷口山古墳周辺遺跡分布図	24	第38図	御蔵山古墳埴輪実測図(2)	62
第16図	瓦塚古墳群全体図	26	第39図	御蔵山古墳埴輪実測図(3)	63
第17図	谷口山古墳実測図	28	第40図	御蔵山古墳埴輪実測図(4)	64
第18図	谷口山古墳墳丘断面図	29	第41図	御蔵山古墳線刻埴輪実測図	67
第19図	谷口山古墳石室第一次埋葬面	30	第42図	御蔵山古墳表採埴輪実測図	68
第20図	谷口山古墳石室第二次埋葬面	31	第43図	縄文土器実測図	68
第21図	谷口山古墳石室断面図(1)	32	第44図	その他の遺物実測図	68
第22図	谷口山古墳石室断面図(2)	33	第45図	御蔵山古墳復元図	71
第23図	谷口山古墳I～L区人骨出土状況図	34	第46図	御蔵山古墳見取図	78

表 目 次

第1表	久部愛宕塚古墳周辺遺跡一覧表	6	第6表	御蔵山古墳周辺遺跡一覧表	52
第2表	谷口山古墳周辺遺跡一覧表	25	第7表	御蔵山古墳埴輪観察表(1)	66
第3表	谷口山古墳ガラス小玉計測表	40	第8表	御蔵山古墳埴輪観察表(2)	67
第4表	谷口山古墳出土の歯種一覧表	46	第9表	御蔵山古墳線刻埴輪観察表	67
第5表	御蔵山古墳周辺古墳一覧表	51	第10表	御蔵山古墳表採埴輪観察表	67

図版目次

- PL 1 (1) 久部愛宕塚古墳遠景 (西より)
(2) 全景 (南より)
(3) T-1 (周溝側より)
(4) T-1 礫群出土状況 (墳丘側より)
(5) T-1 遺物出土状況
(6) T-2 (南東より)
(7) T-4 前方部南東隅 (南より)
(8) T-6, T-7 (墳丘側より)
- PL 2 (1) T-9, T-10 (墳丘側より)
(2) T-11, T-12 (周溝側より)
(3) T-15 (東より)
(4) 東くびれ部 (東より)
(5) 線刻埴輪 (外面)
(6) 線刻埴輪 (内面)
(7) 円筒埴輪片
(8) 形象埴輪片
- PL 3 (1) 谷口山古墳全景 (南より)
(2) 玄室入口 (南より)
(3) 玄門 (北より)
(4) 墓道確認状況 (南より)
- PL 4 (1) 羨道部床面 (南西より)
(2) 羨道埋土状況 (南東より)
(3) 框石 (南より)
(4) 境石 (南より)
(5) 板石敷床面 (南より)
(6) 奥壁 (南より)
(7) 側壁 (西側)
(8) 側壁 (東側)
- PL 5 (1) 墓道確認状況 (北より)
(2) 墓道埋土状況 (南より)
(3) T-3 周溝部 (南より)
(4) T-1 周溝部 (北より)
(5) E・G区人骨出土状況①
(6) E・G区人骨出土状況②
- (7) E・G区人骨出土状況③
(8) E・G区完掘 (第1次埋葬面)
- PL 6 人骨写真1
- PL 7 人骨写真2
- PL 8 (1) I・L区遺物出土状況①
(2) I・L区遺物出土状況②
(3) 直刀 (第27図-1) 出土状況 (南東より)
(4) 直刀出土状況 (西より)
(5) 古墳出土遺物
- PL 9 (1) 耳環
(2) ガラス小玉 (No.4~72)
(3) ガラス小玉 (No.73~131)
(4) ガラス小玉 (No.132~148)
(5) 縄文時代遺物
(6) 調査風景
(7) 発掘調査関係者
- PL 10 (1) 御蔵山古墳全景 (北より)
(2) 祥雲寺境内古墳遠景
(3) T-1 (西より)
(4) T-1 セクション (北西より)
- PL 11 (1) T-1 断ち割り内遺物出土状況
(2) T-1 断ち割り内遺物出土状況 (北より)
(3) T-2 (西より)
(4) T-3 盛土状況 (西より)
(5) T-4 (北より)
(6) T-5 (南より)
- PL 12 (1) 出土土器
(2) 出土埴輪①
- PL 13 (1) 出土埴輪②
- PL 14 (1) 縄文土器
(2) その他の遺物
(3) 古棺記
(4) 発掘調査関係者

第 1 章

きゆう ぶ あた ご づか
久 部 愛 宕 塚 古 墳

I 調査の経過

1 調査に至る経過

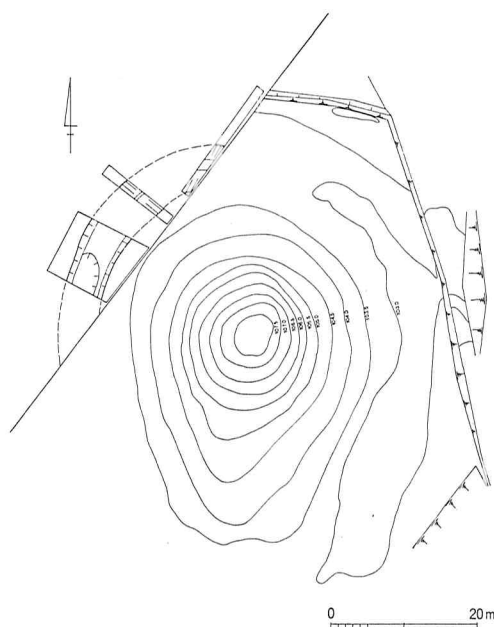
本墳は宇都宮市石井町3203-1に所在する。類例の少ない帆立貝式古墳の一つとして古くから知られる古墳で、昭和58年に発刊された宇都宮市詳細遺跡分布調査報告『宇都宮の遺跡』には「久部愛宕塚古墳群」（遺跡登録番号286）の主墳として登録されている。

本墳が初めて調査されたのは昭和50年である。新4号国道の建設に伴って、後円部北西側の周溝が掛かったものであり、周溝は発掘調査され記録保存となっている。この調査の際、墳丘の測量調査も実施され、昭和56年に発刊された報告書により、初めて帆立貝式とされる本墳の形状が図面的に周知されている。なお、この調査では、周辺から横穴式石室を主体部とする3基の小円墳が検出され、本墳を中心に古墳群を形成していたことも確認されている。

新4号国道が開通した昭和50年代後半以降、本墳は幹線道路沿いの古墳として、研究者のみならず一般にも注目されるものとなり、宇都宮市としては埋蔵文化財の保護・活用上も貴重な古墳の一つとして捉えるようになった。

平成4年1月、宇都宮市は、墳丘上の木の伐採が開始されたことを、一般からの通報で知った。早速、現地を訪れ、土地所有者に確認したところ、椎茸の原木を取るために雑木だけを伐採していること、さらにこれを機会に低木や下草を刈り取り山林を綺麗にしたいとのことであった。

宇都宮市としては、今後の保護・活用の上でも、この機会に古墳の形状・規模を確認するための調査を実施したい旨、申し入れたところ、土地所有者の快諾が得られたものである。



第1図 墳丘測量図（報告書より）

2 調査の方針

今回の調査は、今後本墳を保護していくための基礎的な資料を得るのが目的であった。そのため、まず現在の墳丘の遺存状況と古墳の範囲を確認するため、周辺部を含めた詳細な墳丘測量調査を実施することとした。次に、より正確な墳形と規模を確認するために、周溝部を中心にトレンチ調査を実施することとしたが、保護が目的であるためトレンチ数は必要最低限に止めることとした。

なお、築造年代の把握については、トレンチ調査によりある程度の埴輪の出土が予想されたため、これに依ることとし、埋葬主体部等の確認は特にしないこととした。

3 調査の経過 —発掘日誌抄—

発掘調査は、平成4年2月12日～3月31日までの28日間実施した。以下、主な経過を記す。

2月12～19日 古墳の清掃。伐採された雑木を整理して運び出した後に、低木や下草を刈る。東側周溝部に若干の浅い攪乱があったものの、墳丘の遺存状態は全体に極めて良好であることを確認する。

なお、この清掃作業中に、前方部周辺で若干の円筒埴輪片を採集する。

- 2月20～28日 墳丘測量調査。見かけ上の主軸を設定し、これを基準にして古墳全体に10mの方眼グリッドを掛ける。等高線の幅は周溝部の若干の窪みを出すために25cm間隔とし、平板で測量する。
- 3月2～9日 前方部の周溝調査。宅地が近接している東側を中心にトレンチを設定する。前端及び東西両側の周溝幅をほぼ確認する。なお、前端の周溝すぐ南外側から竪穴遺構を検出する。
- 3月10～13日 後円部の周溝調査。西側は新4号国道で調査されているため、北側及び東側にトレンチを設定し、ほぼ周溝幅を確認する。
- 3月16～19日 東くびれ部の調査。当初設定したトレンチでは後円部墳裾に止まったため、南に拡張して前方部へ移行する墳裾線を確認する。
- 3月21日 現地説明会。思いがけない春の雪にも関わらず熱心な市民が約50名参加する。
- 3月25～31日 遺構図面の作成とトレンチの埋め戻し。



現地説明会

(参考文献) 宇都宮市教育委員会 1983 『宇都宮の遺跡』

常川秀夫・川原由典 1981 『猿山遺跡 付 久部台古墳群』 栃木県教育委員会

II 遺跡の環境

1 地理的環境

本墳は、宇都宮市の中心部から南東約5kmに位置する。宇都宮市の地形は、大きく山地・丘陵地から成る北西部と台地・平地が広がる南東部とに分かれ、西から姿川・田川・鬼怒川という3本の川がそれぞれ南流して沿岸に沖積低地を形成している。本墳が立地するのは、このうち田川と鬼怒川に挟まれて細長く延びている宇都宮東部台地（岡本台地）の東縁部である。鬼怒川は本墳の東約2kmのところを南流し、この間には広々とした沖積低地が望める。本墳周辺の標高は102～103m前後で、鬼怒川の沖積低地から比高は4～5mを測る。

本墳周辺は、この鬼怒川の肥沃で広大な沖積低地を基盤にした水田経営が中心となっており、宇都宮市内でも有数の穀倉地帯とされている。しかし、一方では市の中心部寄りの西側から宅地化が進んでおり、新4号国道開通以降、この状況にさらに拍車がかかっている。

2 歴史的環境

遺跡の分布状況をみる限り、宇都宮東部台地（岡本台地）でも本墳周辺が本格的に開発されるのは、古墳時代以降と思われる。以下、大まかな時代を追って、その内容を概観してみたい。

古墳時代以前 縄文時代については、調査例はないものの追金仏遺跡（265）や柿木坂遺跡（272）など、中期を中心とした遺跡がいくつか挙げられる。しかし、弥生時代については、本墳の南南西約2.5kmにある瑞穂野団地遺跡で小規模な後期集落跡の調査例があるだけで、遺跡数はきわめて少ない。

古墳時代 本墳周辺は、宇都宮市内でも古墳が多く分布する地域の一つである。前記したように本墳の周囲



第2図 久部愛宕塚古墳周辺の遺跡分布図

番号	遺 跡 名	種 別	時 期	備 考
254	十ヶ屋敷遺跡	集 落 跡	古墳～平安	
265	追金仏遺跡	集 落 跡	縄文・古墳	平成6年調査
266	大久保台山遺跡	集 落 跡	古墳～平安	
267	天王山古墳群	古 墳	古墳	円墳3基
268	東原古墳群	古 墳	古墳	前方後円墳2基・円墳4基
269	さるやま城遺跡	古墳・城館	古墳・中世	前方後円墳1基（1基消滅）・円墳13基, 城館堀・土塁
272	柿木坂遺跡	集落・古墳	縄文・古墳	円墳2基
283	三日月神社古墳	古 墳	古墳	前方後円墳（前方部消滅）
284	三日月神社南古墳	古 墳	古墳	円墳9基
285	久部浅間山古墳	古 墳	古墳	前方後円墳
286	久部愛宕塚古墳群	古 墳	古墳	前方後円墳1基・円墳2基（3基消滅）
288	石井久保田古墳群	古 墳	古墳	前方後円墳1基・円墳5基

第1表 周辺遺跡一覧表

にも少なくとも5～6基の小円墳の存在が知られ（286）、新4国道建設に伴う調査によりこの内の3基は横穴式石室を主体部とするものであったことが確認されている。

本墳の北約500mには、三日月神社古墳（283）・三日月神社南古墳群（284）・久部浅間山古墳（285）が一群を構成している。この中で発掘された古墳はないが、全長32.5mの久部浅間山古墳は測量調査の結果、前方部が非常に低い前方後円墳であることが指摘されている。一方、本墳の南西約2kmには、天王山古墳群（267）・東原古墳群（268）・さるやま城遺跡（269）の古墳群が一群を構成している。合わせると前方後円墳4基・円墳20基から成る本地域では大規模な古墳群である。やはり発掘調査された古墳はないが、横穴式石室が開口する円墳がみられることや採集された円筒埴輪の形式等から後期を主体とした古墳群であるとされている。なお、本墳の南方、台地の東縁辺部には石井久保田古墳群（288）・柿木坂遺跡（272）等の小円墳群の点在もみられる。

奈良・平安時代 本墳の南南西約2.5kmでは、瑞穂野住宅団地造成や新4号国道建設に伴う発掘調査にり、この時代を中心とする大規模な集落跡が確認されている。この集落はさらに南西方向への伸びが確認されており、その広がりには2～3kmに及ぶものとみられる。なお、最近の発掘調査の状況から、この集落及び本墳周辺を抜けて、東山道が南北に走っていることが推定されている。

（参考文献） 宇都宮大学考古学研究会 1977 「宇都宮市久部浅間山古墳墳丘測量調査報告」『峰考古』第1号
 塙 静夫・山ノ井清人 1979 『宇都宮市史』第1巻原始・古代編 宇都宮市

Ⅲ 調査結果

1 現況測量調査

墳丘面に大きな攪乱はみられず、遺存状態は極めて良好と思われる。また、東側に宅地や道路が迫っているものの、北西の新4号国道で削平された以外は周溝部も良く残っているものとみられる。

現墳丘の裾線は標高103m前後に取ることができるが、くびれ部はほとんどみられず、前方部に向かって

緩やかにすぼまる楕形の平面形となる。後円部は高さ約4.5mを測るが、その斜度は中段（標高105m）以上が急激にきつくなっている。また、前方部は非常に低く、後円部との比高差は約3mを測る。

現況の周溝は深さ約50cm・幅10m前後を測るかなり広いもので、墳丘とほぼ相似形に巡るものとみられる。ただし、前方部前端側は周溝部の窪みが不明瞭で、等高線に表現することができなかった。

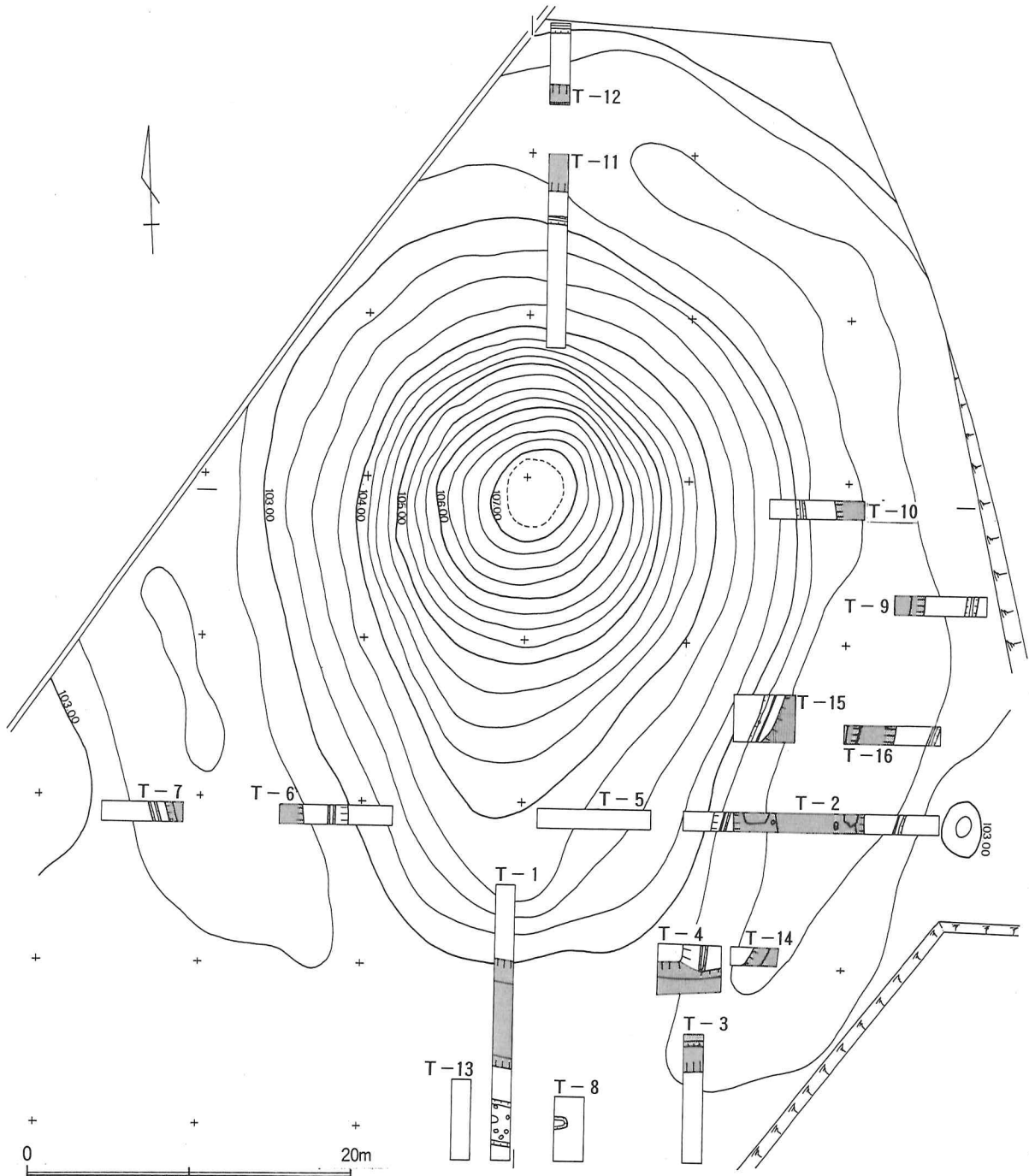


第3図 久部愛宕塚古墳現況測量図

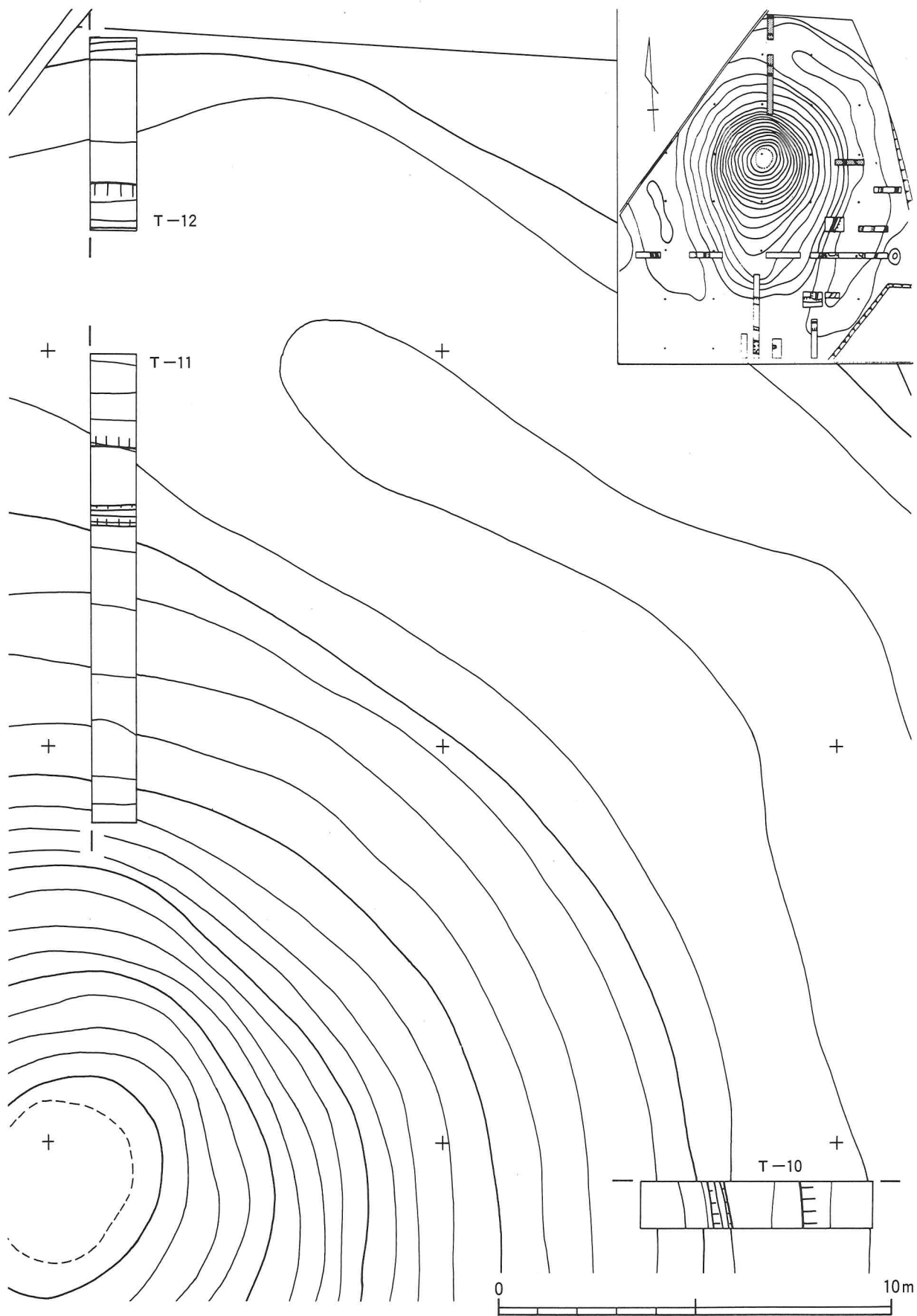
2 周溝調査

(1) 後円部

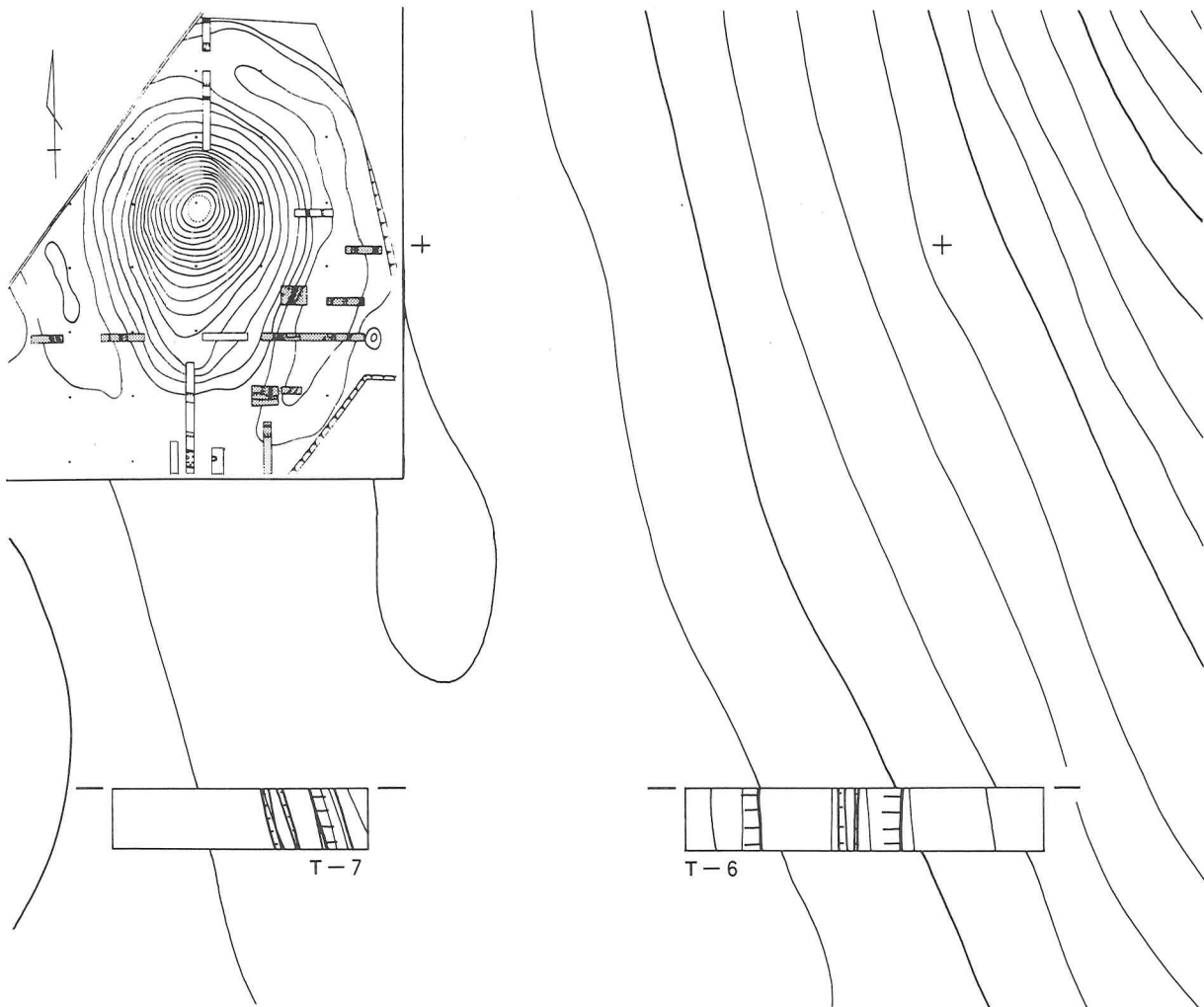
後円部北側には、古墳の全長をおさえるために、主軸方向に沿ってT-11とT-12トレンチを設定した。T-11で周溝内側の上端、T-12で周溝外側の上端が確認され、その幅は6.6mを測った。周溝の深さについては、中央部を発掘していないが、T-11の北端で地表から85cmであった。また、T-11では周溝内側の上端から墳丘側へ約1.5mのところ、T-12では周溝外側の上端からさらに外側3.2mのところ、それぞれ幅50cm前後で10~15cmほどローンを掘り込む小溝が検出された。なお、T-11では墳丘も一部断ち割った



第4図 久部愛宕塚古墳トレンチ配置図



第5図 後円部北東側トレンチ平面図



第6図 前方部西側トレンチ平面図

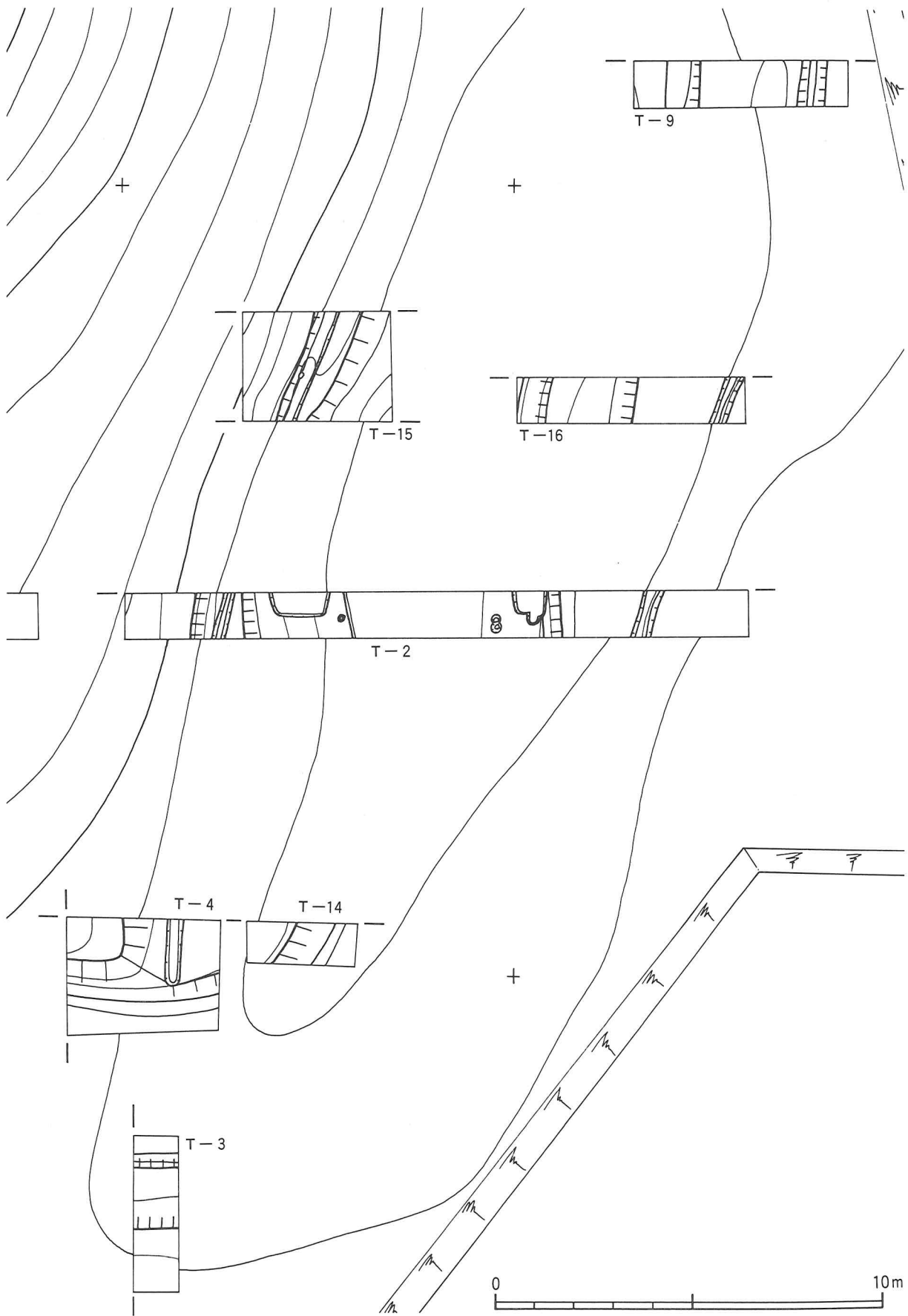
が、盛土は周溝内側の小溝から約3mほど内側から始まり、その間は黒色地山をテラス状に残していることが確認された。

後円部東側には後円部径をおさえるために主軸に直行してT-10を設定したが、周溝外側のおさえについては立木の関係から5m南にずらしてT-9を設定した。二つのトレンチから推定される周溝幅は約6mであったが、T-10では1.9m内側で、T-9では2.6m外側で、北側のT-11・T-12で検出されたものと同様な小溝が検出されている。

(2) くびれ部

T-15・T-16トレンチは東くびれ部の状況及び周溝幅確認のために設定したものであるが、結果的にはくびれ部のやや北側であった。墳丘側に設定したT-15では、北東から南西に向かって緩やかにカーブする周溝の内側が確認された。周溝の内側には、ほぼ同じ様なカーブを描く幅50cm・深さ5～6cmの小溝が確認されたが、両者の間隔は約50cmであり、他の部分に比べかなり接近していた。T-16では周溝外側の立ち上がりを確認するとともに、周溝上端から2.2m外側で他の部分とほぼ同様な小溝を検出した。なお、この部分の土層断面では、周溝から小溝までの平坦部はローム地山まで削り出されており、そこにロームのブロックや粒子を多量に含む土が外側から流れ込んでいる状況を観ることができた。

T-15・T-16の調査で確認された周溝幅は7～7.5mで、前方部に向かってその幅を増していた。また、



第7図 前方部東側及び東くびれ部平面図

深さは、T-16の西端部で105cmを測った。

(3) 前方部

前方部中程には、前方部幅及び両側の周溝幅をおさえるために、主軸に直行して東にはT-2・T-5トレンチ、西にはT-6・T-7トレンチを設定した。T-2では幅8.2m・深さ1.1mの周溝を通して確認することができた。底面はやや船底形で、内外とも立ち上がりは角度が緩やかであった。周溝内外の小溝がやはり検出されているが、内側のもが周溝上端から40～50cmの距離しかなく、周溝全体は前方部前端に向かって開き気味なのに対し、小溝はいずれもすぼまる方向に走っていた。一方、西側のT-6・T-7では、通しではないが幅8.3mの周溝を確認することができた。周溝の深さはT-7の東端で1.2mを測った。周溝内外の小溝はここでも検出されたが、東側のT-2とは逆に外側のもが周溝上端に接近していた。なお、T-2の周溝内には墓と思われる土坑や柱穴とみられる小穴も確認されている。

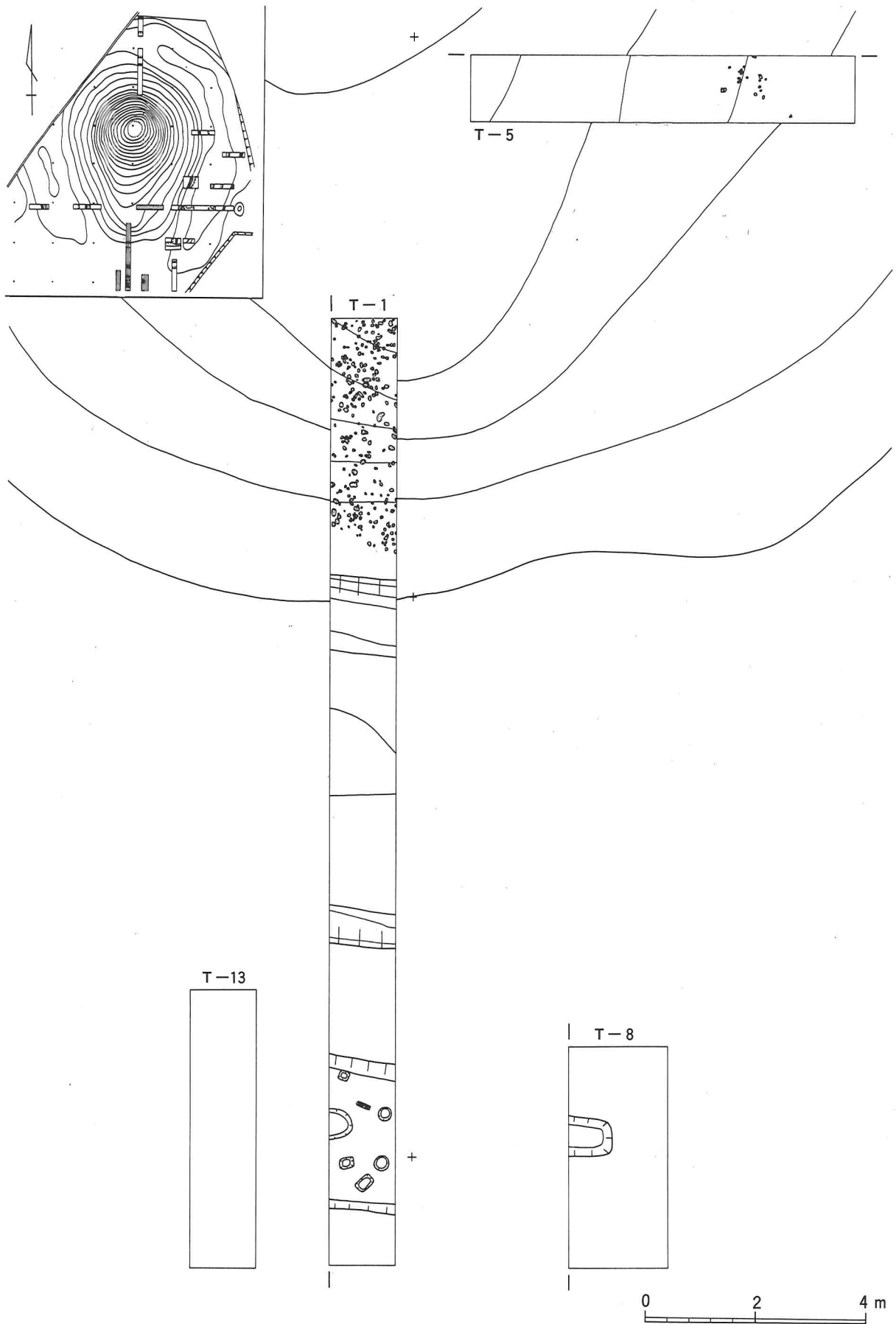
前方部前端には古墳の全長と周溝幅をおさえるために、主軸に沿ってT-1トレンチを設定した。T-1内で確認された周溝は、幅6.6m、深さ90cmを測った。他の部分の周溝に比べると、墳丘側の立ち上がりが明瞭であり、断面形もあまり船底形にならず平坦に近い底面に仕上げられている。さらに、この堀形の違いととも、他の部分で必ずといっていいほどにみられた周溝内外の小溝が確認されず、内側は立ち上がってそのまま墳丘斜面に移行していた。また、外側には小溝の代わりに竪穴遺構と思われるものが確認されたが、これについては後述する。

T-1トレンチでは、盛土の状況を一部確認する目的で、墳丘上まで延長した。しかし、表土を下げたところ拳大の礫がほぼ全面を覆っている状況が確認されたため、盛土観察のための断ち割りはしなかった。葎石の様なものとも考えられたが、すぐ北側に直行して設定したT-5では確認されていない。T-1のすぐ東側墳裾部には若干の抉れがあり、等高線にも僅かに表れている。あるいは、埋葬施設に関わる礫群であろうか。なお、礫群中には、川原石とともに凝灰岩の碎片も見られた。

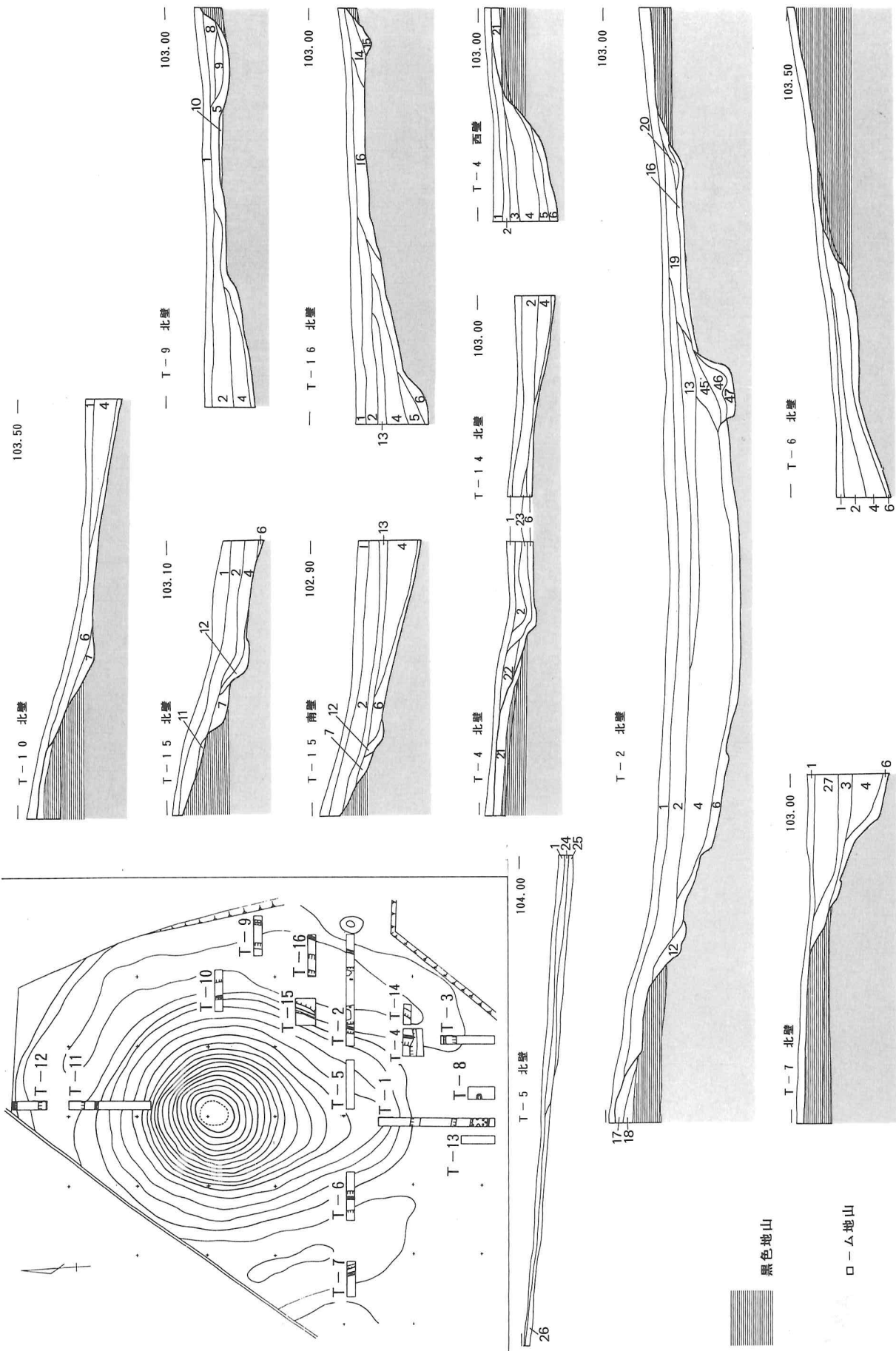
前方部コーナーの状況確認及び前方部前端幅の推定のために、南東コーナー付近にT-3・T-4・T-14トレンチを設定した。T-4及びT-14の調査により周溝内側を巡る小溝は前方部側面で途切れること、これと連動して周溝と小溝に挟まれたローム地山削り出しの平坦面（テラス部）も前端部には巡らないことが判明、T-1での所見との整合性が確認された。ところで、T-2及びT-4・T-14で確認された前方部東側面の形状は、線の取り方により二つに分かれる。すなわち、墳裾としてもおさえられる内側的小溝は主軸にほぼ平行しているのに対し、テラス部を挟んだ周溝は前端に向かって開いているのが明瞭である。なお、T-3とT-4で確認された前端の周溝幅は6.5mであり、T-1内でのそれとほぼ同じ長さであった。また、T-3内からは周溝外側的小溝も検出されなかった。

(4) 前方部南の竪穴遺構

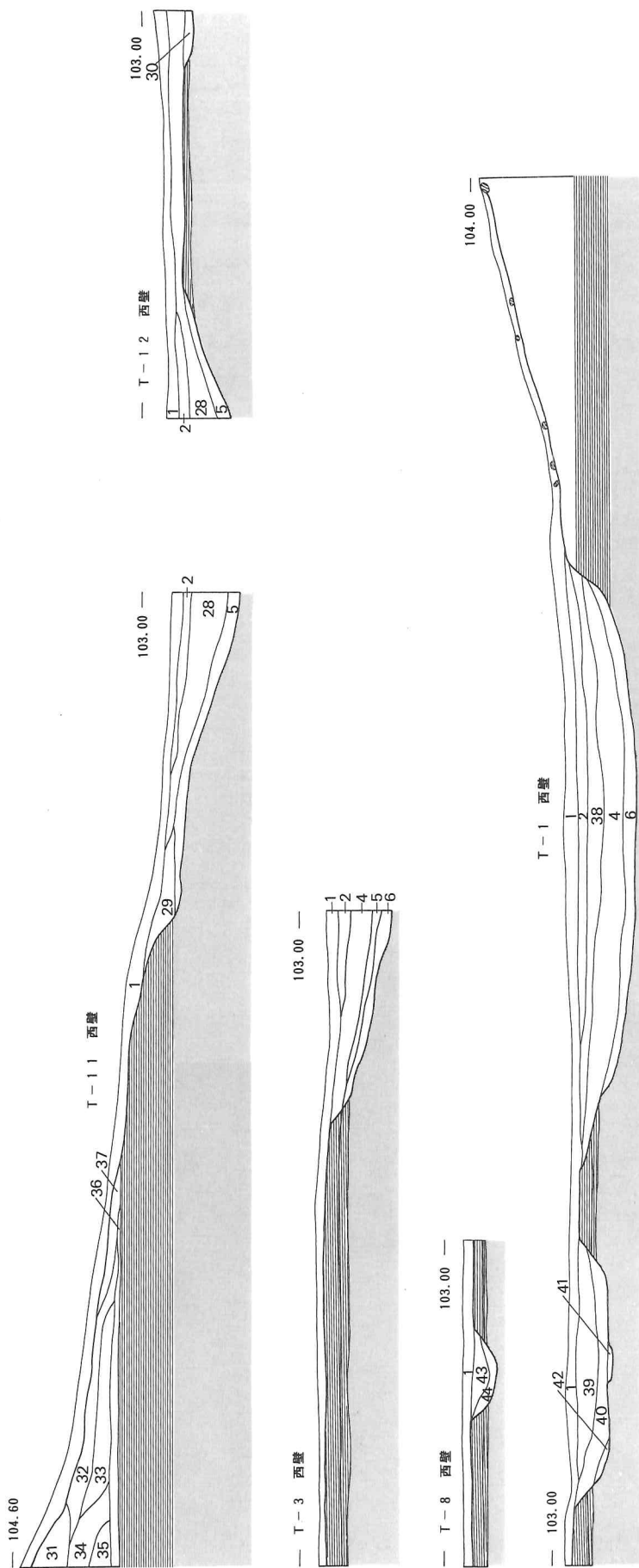
前方部前端に主軸に沿って設定したT-1トレンチにおいて、周溝の外側に並びを揃えた様な竪穴遺構が検出された。確認したのは周溝南側の上端から2m南の地点であり、南北長は2.7mを測った。東西長は確認しなかったが、東西にそれぞれ設定したT-8・T-13トレンチにおいて関連するものが検出されなかったことから、方形もしくは東西に長い長方形になるものと推定される。竪穴は地山を約40cm掘り込んでおり、床面の中央やや北寄りの地点からは径55cm・深さ5cmの地床炉が検出された。調査範囲内の床面からは5個の小穴が検出されたが、いずれも深さ10cm前後の浅いもので、並びにも規則性はみられなかった。また、床面は一般の竪穴住居跡と比べると固さがなく、あまり使いこまれた様子がみられなかった。なお、埋土下層には焼土・炭化物が多量に検出されたが、土器等の出土遺物は皆無であった。



第8図 前方部前端部トレンチ平面図



第9図 トレンチ断面図(1)



- | | | |
|---------------------|------------------------------|------------------------------|
| 1 表土 | 17 褐色土 (ローム粒多) | 33 暗褐色土 (ローム粒、小ローム) |
| 2 褐色土 (ローム粒) | 18 暗褐色土 (ローム粒多) | 34 黄褐色土 (ロームB多) |
| 3 暗褐色土 (ローム粒、しまりあり) | 19 暗褐色土 (ローム粒) | 35 黒褐色土 (ローム粒多) |
| 4 黒色土 (ローム粒少) | 20 黒褐色土 (ローム粒) | 36 黒色土 (ローム粒、小ローム) |
| 5 黄褐色土 (ローム粒、小ローム) | 21 黄褐色土 (ローム粒、小ロームB、ややしまりあり) | 37 褐色土 (ローム粒) |
| 6 黄褐色土 (ローム粒多) | 22 暗褐色土 (ローム粒、小ロームB少、やわらかい) | 38 褐色土 (ロームB多、しまりわり) |
| 7 暗褐色土 (ローム粒、小ローム) | 23 褐色土 (ローム粒、小ロームB、やわらかい) | 39 黒褐色土 (焼土、ローム粒多) |
| 8 褐色土 (ローム粒少) | 24 褐色土 (ローム粒、やわらかい) | 40 褐色土 (焼土、炭化特粒、小ローム) |
| 9 暗褐色土 (ローム粒、小ローム) | 25 黒褐色土 (ローム粒、小ローム) | 41 赤褐色土 (焼土) |
| 10 黄褐色土 (ロームB多) | 26 黄褐色土 (ロームB) | 42 黄褐色土 (ロームB多) |
| 11 黄褐色土 (ローム粒) | 27 黒色土 (ローム粒少、ねぼりあり) | 43 黒褐色土 (炭化物粒、IP、ローム粒) |
| 12 黄褐色土 (ローム粒多) | 28 暗褐色土 (ロームB多) | 44 褐色土 (ローム粒、小ロームBやや多、炭化物粒少) |
| 13 褐色土 (ローム) | 29 褐色土 (ローム粒) | 45 暗褐色土 (ローム) |
| 14 暗褐色土 (ローム) | 30 黄褐色土 (小ロームB多) | 46 褐色土 (ローム粒、ローム) |
| 15 黄褐色土 (ローム粒多) | 31 暗褐色土 (ローム) | 47 黄褐色土 (ロームB多) |
| 16 褐色土 (ローム粒、小ローム) | 32 褐色土 (ローム粒多) | |

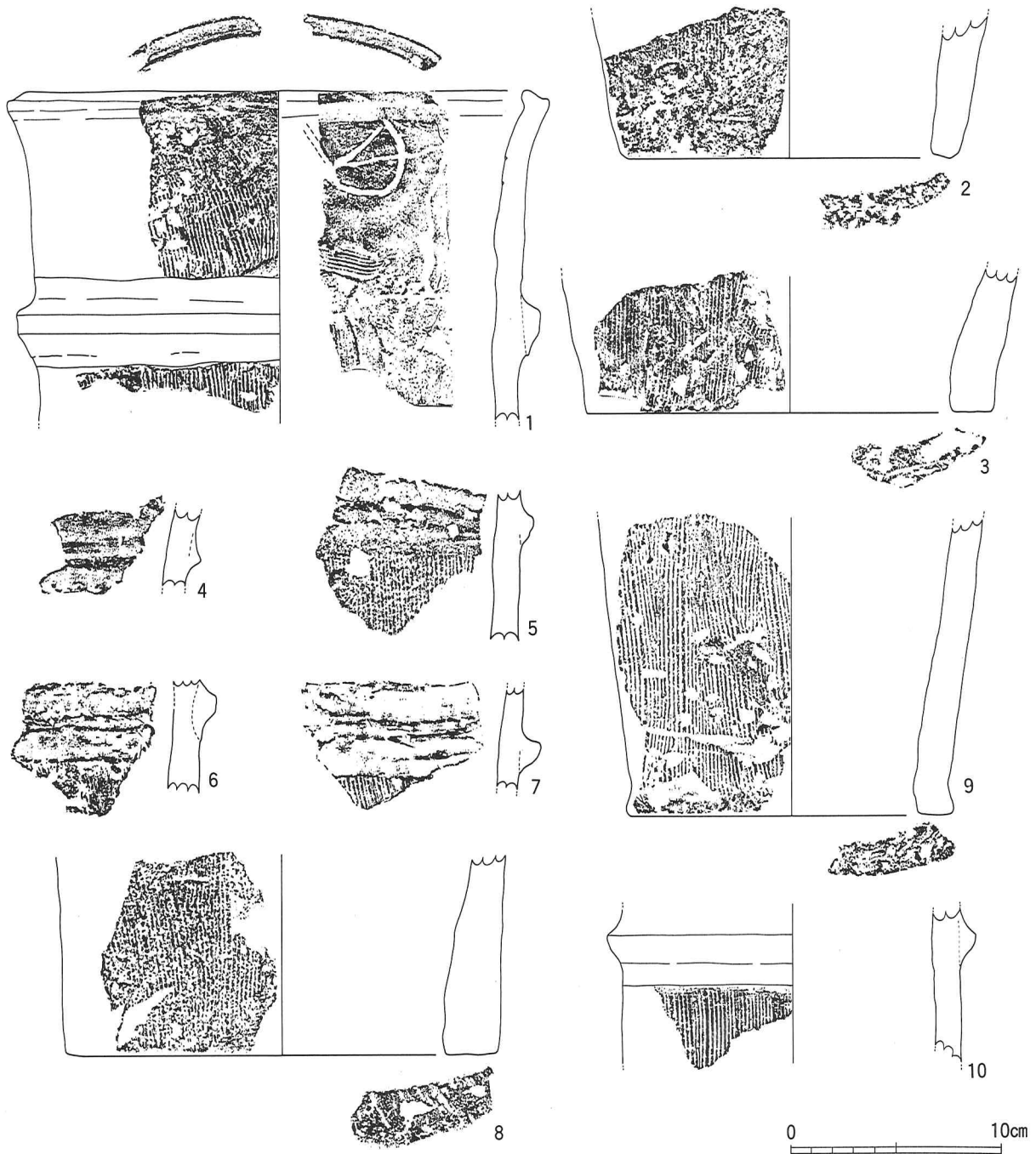
第10図 トレンチ断面図(2)

3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は埴輪片のみである。ほとんどが周溝覆土や墳丘表土からの出土であり、原位置を止めるものはない。出土位置は前方部に集中する傾向がみられたが、量的には非常に少ない。また、円筒埴輪の他に形象埴輪もみられるが、いずれも小破片であり、全体の形状をつかめるものはない。

円筒埴輪 (第11図 1~10)

1は口縁部片で、第1突帯の下3cmまで残る。口径25.6cm, 色調は淡褐色。胎土はやや密で、焼成良好。胴部はほぼ直立するが、口縁部はやや外反し、口唇内側がつまみ出される。突帯は断面台形であるが、下の



第11図 久部愛宕塚古墳出土円筒埴輪 (1~5はT-1, 6はT-4, 7・8はT-6, 9・10は前方部南西隅表採)

稜線はややあまい。外面はタテハケ調整（12本／幅2cm），内面はナデで一部にヨコハケ調整。なお，口縁部内面には半月形の線刻がみられるが，左端が欠損している。

2は底部片で，底径16.0cm。色調は淡褐色で，焼成は普通。外面はタテハケ調整（12本／幅2cm）で，下端部はその後ナデ調整。内面はナデ調整。内外面とも磨滅が著しい。

3は底部片で，底径19.4cm。色調はやや赤みのある淡褐色。胎土はやや密で，焼成良好。底部下端が，やや外へ出っ張る。外面はタテハケ調整（12本／幅2cm）で，内面は剝離している。

4は突帯部のみ。色調は褐色。胎土はやや密で，焼成良好。突帯は断面三角形で，やや下へ垂れぎみ。

5は胴部片。色調は淡褐色。胎土はやや密で，焼成は普通。突帯は断面台形であるが，下の稜線は低く，だれている。外面はタテハケ調整（12本／幅2cm）で，内面はナデ調整。内外面とも磨滅している。

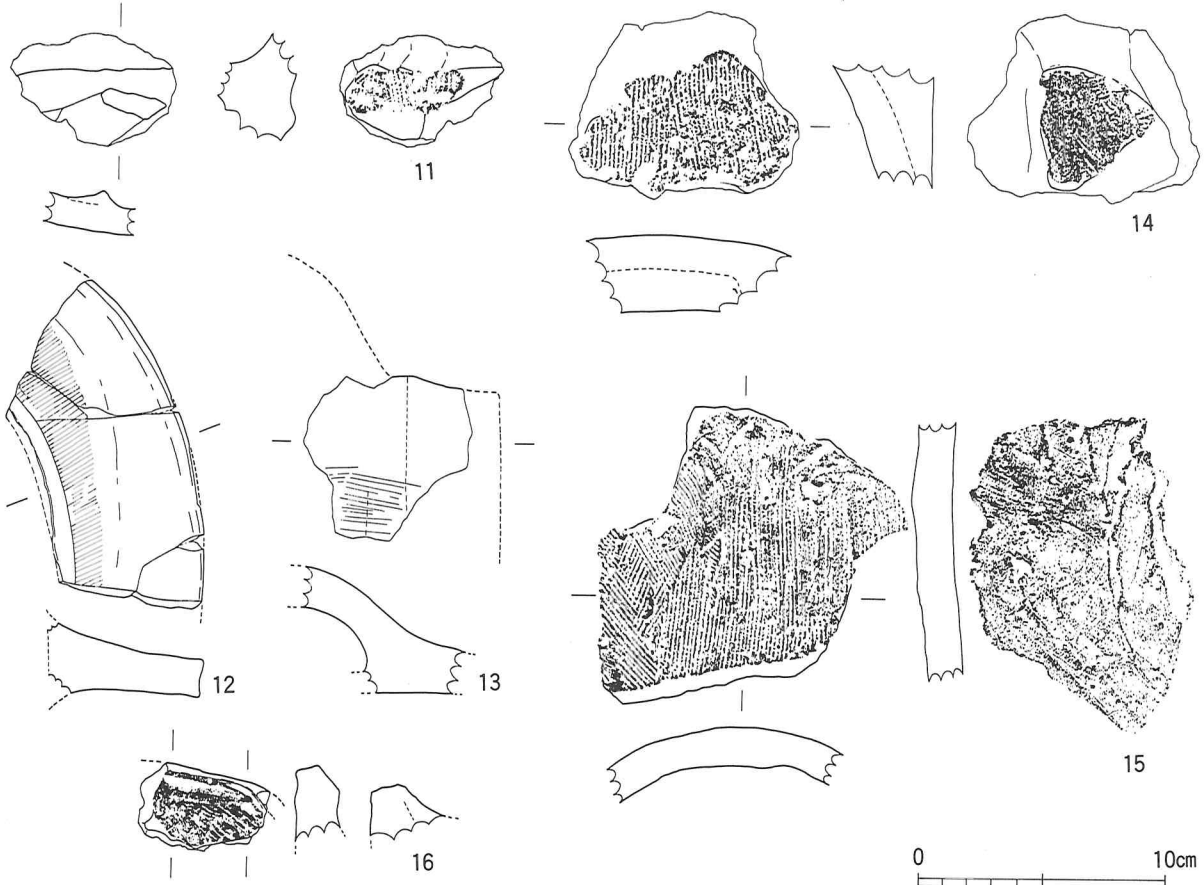
6は胴部片。色調は褐色。胎土はやや密で，焼成は良好。突帯は断面台形であるが，幅は狭く稜線もあまい。外面はタテハケ後，粗くナデ調整。内面はナデ調整とみられるが，剝離が著しい。

7は胴部片。色調は淡褐色。胎土は密で，焼成良好。突帯は断面台形であるが，稜線が崩れて三角形に近い。外面はタテハケ調整（12本／幅2cm）で，内面はナデ調整。

8は底部片。底径20.4cmで，ほぼ直立する。色調は橙褐色。胎土は密で，焼成は普通。外面はタテハケ調整（11本／幅2cm）で，内面はナデ調整。

9は底部片で，底部15.6cm。下端がやや外へ出っ張り，開き気味に立ち上がる。色調は褐色。胎土は密で，焼成良好。

10は胴部片で，径17.5cm。色調は褐色。胎土は密で，焼成良好。突帯は断面がほぼ三角形。外面はタテハケ調整（11本／幅2cm）で，内面はナデ調整。



第12図 久部愛宕塚古墳出土形象埴輪（11・12はT-1，13・14はT-4，15はT-5，16はT-15）

形象埴輪（第12図11～16）

11は器形不明。色調は赤褐色。胎土はやや密で、焼成普通。

12は人物の帽子のつばと思われる。色調は橙みをおびた淡褐色。胎土はやや密で、焼成普通。一部にハケ目（12本／幅2cm）を残し、全体にナデ調整。たいへん丁寧なつくり。

13は楕形の一部と思われる。色調は淡褐色。胎土はやや密で、焼成普通。外面はハケ（12本／幅2cm）とナデ調整。粘土の貼り合わせ部分が2か所観察できる。

14は器形不明。色調は橙褐色。胎土は密で、焼成普通。2枚の粘土板の貼り合わせが観察できる。外面はハケ調整（12本／幅2cm）。

15は人物の背中側から脇の下へはいる部分かと思われる。色調は赤褐色。胎土は密で、焼成良好。外面はハケ調整で、内面には指によるナデつけ跡が残る。

16は器形不明。突帯状に張り出す部分。色調は橙褐色。胎土は密で、焼成良好。表面はナデ調整。

IV ま と め

1 墳形と規模

前述したように、今回の調査は今後の本古墳保存のためにおおよその規模と範囲を確かめることが目的であった。従って、墳形や墳丘構築の詳細を確かめるまでの調査は実施しなかったが、これらについても部分的ながら、以下に挙げるような特徴を確認することができた。

① 墳丘は現況の測量調査でも明らかになったように、大きく2段階に築造されたものとみられる。墳丘盛土1段目は、後円部北に設定したT-11トレンチの断ち割りにより、周溝内側から約10°前後の緩斜面として残ることが確認されている。この幅は6～7mであり、盛土2段目の始まるあたりで約1mの盛土高を測る。これに対し、墳丘盛土2段目は35～40°の急斜面であり、その規模は後円部で径20m、盛土高約3mを測る。後世の崩れを考慮すれば、盛土1段目は高さ約1mの平坦面として築かれた可能性も十分に考えられ、この基壇状の部分（盛土1段目）に一回り小さい古墳（盛土2段目）がのるような形状であったものとも想定される。ただし、前方部前端にはこの基壇状の部分が認められない。

② 周溝についても2段階に渡って掘られた可能性が指摘できる。この決め手となったのは、前方部前端を除く周溝の内外から確認された幅50cm程度の小溝で、11～12mの幅を持って墳丘を二重に巡っている。これは恐らく古墳築造に先立つ割り付け溝と考えられ、この小溝間をローム面まで掘削するのが1段階目の作業だったものと思われる。2段階目はこの2本の溝のさらに内側に深さ約1m前後の本格的な周溝を掘削したもので、その幅はくびれ部付近がやや広がるものの6～7mを測る。結果的には周溝内外に幅2～3m前後でローム削り出しの平坦面を持つような形状となっている。なお、前方部前端だけは、この1段階目の掘削がなされていない。

③ T-2・T-16トレンチ内で確認された周溝外側の小溝では、さらに外側からロームブロックが混じる層の流入がみられ、それは小溝を越えて平坦部まで及んでいた。今回は周溝の範囲確認を一つの目的としたため必要以上に外への調査は延ばさなかったが、この小溝を境として外側に堤（周堤帯）が巡っていた可能性も考えられる。

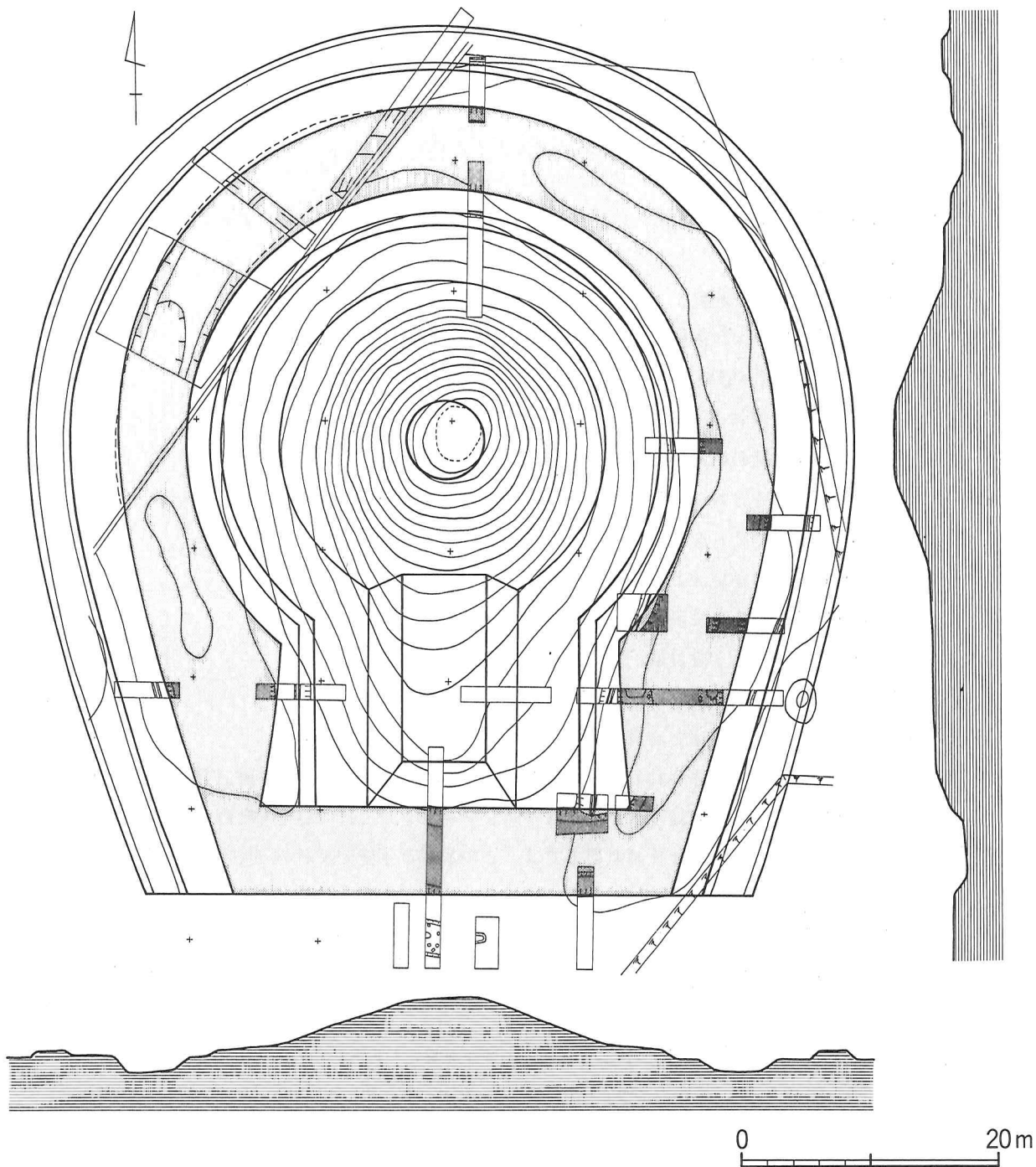
④ 外部施設としては埴輪が確認されている。ただし出土量は極めて少なく前方部側を中心に僅かな破片が

確認されたにすぎない。種類としては円筒埴輪の他に人物と器財の形象埴輪がみられる。また、前方部前端斜面部には礫群が確認されたが、これは部分的なもので、葺石とは考え難いものである。

以上、今回の調査を通して得られた本古墳の諸特徴を列挙したが、これらを踏まえて本古墳の形状を推定復元したものが第13図である。なお、前方部コーナーの周溝外側については確認していないため、墳丘と相似形に開く可能性もある。

最後に本古墳の規模を整理すると次のようになる。

墳丘全長—50.5m, 後円部径—41.0m, 後円部高—4.5m, 前方部長—14.0m (推定), くびれ部幅—26.0m (推定), 前方部前端幅—30.0m (推定), 前方部高—1.5m, 周溝を含めた総長—南北64m, 東西57m (推定)。



第13図 久部愛宕塚古墳復元図

2 築造年代

本県の帆立貝式古墳については小森紀男氏の集成があり、所謂造りだし付きの円墳も含めて約30基の類例が挙げられている。また、この集成の中でも指摘されているとおり、分布の中心は本古墳を含む県中央部（田川水系及び姿川・思川水系）にあるが、この地域の帆立貝式古墳については墳形や出土埴輪等の検討による変遷案が秋元陽光氏によって提示されている。

さて、今回の調査の性格上、本墳の築造年代を知る手がかりは非常に少なく、僅かに出土した埴輪片と部分的に確認された墳形的な特徴があるだけである。

まず、埴輪についてであるが、一定量出土している円筒埴輪もすべて破片資料である。従って、外面がタテハケの1次調整であることや突帯が偏平化していること等の部分的な特徴は窺えるものの、全体の形状や突帯の条数等は知ることができない。ただし、あえて注目するならば、伴出した形象埴輪片のなかに人物と楕形の破片がみられることで、秋元氏の変遷案によれば、これらは新しい段階（具体的な年代は示されていないが、6世紀中葉以降と読み取れる）の要素として挙げられている。

次に墳形的な特徴では、墳丘盛土1段目の形状に注目したい。第14図は本県の代表的な帆立貝式古墳の一つである壬生町牛塚古墳の墳丘測量図であるが、本墳を位置付ける上で非常に参考になる古墳である。この壬生町牛塚古墳の墳形の大きな特徴は、測量図にも良く現れているとおり、墳丘第1段目の幅広い平坦面（後円部で約7mを測る）の存在である。これは、所謂基壇状の平坦面と言われるものであり、本県の後期か終末期の首長墓に特有の形態とされている。本墳の墳丘盛土1段目は、前記したとおり後円部で幅6～7mの緩斜面として残るものであるが、おそらく壬生町牛塚古墳と同様な基壇状の平坦面として捉えていいものと思われる。さらに付



第14図 壬生町・牛塚古墳墳丘測量図

け加えれば、本墳と壬生牛塚古墳は墳丘規模がほぼ同じであること、共に周堤帯を持つとみられることなど共通点が多い。なお、前記した秋元氏の変遷案では、この基壇の存在を後半から終末段階における帆立貝式古墳の一指標に挙げている。

以上、数少ない資料からではあるが、本墳の築造年代は6世紀後半段階と思われる。

(参考文献) 小森紀男 1987 「旧国府村34号墳々丘測量調査報告」『栃木県しもつけ風土記の丘資料館年報』第1号 栃木県教育委員会

石部正志・秋元陽光ほか 1995 『上神主狐塚古墳』 上三川町教育委員会

君島利行 1993 「牛塚古墳」『栃木県埋蔵文化財行政年報〔平成3年度〕』 栃木県教育委員会

第 2 章

^や谷 ^{ぐち}口 ^{やま}山 古 墳

I 調査の経過と方法

1 調査の経過

平成3年2月下旬に、インマヌエル教会山田隆氏から、宇都宮市長岡町に所在する谷口山古墳の墳丘を削平し駐車場造成を行うとの連絡が文化課に入る。このため、当教育委員会文化課と山田氏との協議の結果、墳丘の一部及び石室の調査を行うことを決定する。25日より墳丘測量を開始し、すでに削平されている墳丘断面の清掃を行い盛土の状況を確認するとともに、石室が未開口であることも確認。以下調査の経過については次の通りである。

(発掘日誌抄)

- 2月25日 横堀、賀来、梁木、今平の4名で墳丘測量を行う。
- 3月4日 墳丘削平部分の清掃。
 - 5日 墳丘削平部分の清掃、セクション図作成。
 - 6日 羨道部分の閉塞石清掃後写真撮影。
 - 7・8日 羨道部分の閉塞石を測量後除去。
- 12～15日 石室内土砂の除去。
- 22～29日 石室内をA～Kの12区に分け、Aから床面検出を行う。E区の掘り下げにおいて人骨を確認。
- 4月5日 K区において直刀を確認、周辺に骨片が散乱している。
- 8・9日 納骨堂を造るために墳丘の一部を削る。その部分のセクション図を作成する。
 - 10日 F・H区の掘り下げ、骨片を確認。
- 4月12日～5月15日まで市内の別の遺跡の調査のため一時中断。
- 5月17日 調査再開。
- 18～31日 石室内の測量を行う。
- 6月1日 現地説明会を行う。
- 3～15日 床面精査の結果、その下に第1次埋葬の床面のあることを確認。第2次床面の玉石を測量しながら除去し第1次床面を出す。
 - 17日 墓道部分及び墳丘規模確認のためのトレンチを3本設定。
- 18～21日 T-1の掘り下げ及び測量。
- 24～28日 T-2の掘り下げ及び測量。
- 7月1～5日 T-3の掘り下げ及び測量。
 - 8日 調査終了。

2 調査の方法

調査に当たっての墳丘測量は、等高線間隔を25cmとし、縮尺1/60で作成した。尚、測量に際しての基準坑は、かなり墳丘が削平されていることから、墳丘頂点から磁北を基準に5m間隔で設定した。また、標高は水準点までの距離が遠いことから、『宇都宮の遺跡』中の隣接団地内標高点(147.2m)から導いた。トレンチは、すでに駐車場となっている部分に3本(T-1～T-3)設定した。石室内は奥壁の中心点と羨道部分の



第15图 谷口山古墳周辺遺跡分布图

中心点を結んだラインを中軸線とし、さらに玄室内は1 mごとに区画しA～Kの12区に区画し、掘り下げを行った。

基本層序は、Ⅰ暗褐色土（腐植土）－Ⅱ黒色土（約60cm）－Ⅲソフトローム層（約20cm）－Ⅳハードローム層の順である。石室はこのⅡ黒色土から掘り込まれた半地下式である。また、この古墳は丘陵の先端部分に造られた古墳らしく、T-1において地山が15°～20°と緩やかに傾斜していることが観察できた。

Ⅱ 位置と環境

1 地理的環境

谷口山古墳は宇都宮中心街から北方へ約4 kmに所在する。本古墳は宇都宮丘陵上に立地し、眼下には田川が南流し、広大な水田面が広がる。水田面との比高は約24mを測る。もう少し広範囲に地形を見てみると、この宇都宮丘陵の両脇には、東に田川、西に釜川が南流するが、田川は横山付近で宇都宮丘陵を横断し、これより以北は丘陵西側を流れる。この横断部分を境に宇都宮丘陵を北部と南部に分けることができ、宇都宮丘陵北部、宇都宮丘陵南部とそれぞれ呼ばれている。本古墳は、この宇都宮丘陵南部の北東端に位置する。言い方を変えれば、宇都宮丘陵が田川によって北部と南部に分断され、田川が狭隘な丘陵部から広大な沖積地に流れ出る開口部のような場所の丘陵突端に本古墳が位置するともいえる。この付近の丘陵部分は、近年大規模な住宅造成が行われ、地形の改変がかなり行われている。

2 歴史的環境

本墳の所在する宇都宮丘陵上には多数の後期古墳が存在する。

その中で北山古墳群（44）は、本地域で最初に横穴式石室を採用した権現山古墳を含む。この古墳は、玄室長5.05m、玄室幅1.25mの狭長な石室で群馬県前橋市前二子古墳の石室に類似し、初源期のもと考えられる。その後この古墳群は、宮下古墳、雷電山古墳と前方後円墳が3代にわたって築造され、その周辺にも

番号	遺 跡 名	種 別	時 期	備 考
40	瓦塚日満北久保遺跡	集 落 跡	縄文・古墳	S 55年調査
41	立野高塚群	高 塚	江戸	円形高塚 6 基, 方形高塚 1 基
42	曾理部羅遺跡	集 落 跡	縄文・古墳	縄文中期
43	上の台遺跡	集 落 跡	古墳	古墳後期
44	北山古墳群	古 墳	〃	前方後円墳 3 基, 円墳群, 横穴式石室
45	関堀土地遺跡	集 落 跡	〃	古墳後期
52	百穴裏遺跡	集 落 跡	縄文・古墳	
53	長岡百穴	横 穴	古墳	52基
54	瓦塚古墳群	古 墳	古墳	前方後円墳 1 基, 円墳30基, 横穴式石室
55	谷口山古墳群	〃	〃	円墳 5 基, 横穴式石室
60	長山供養塚群	供 養 塚	江戸	4 基, 「文政 7 年」銘の庚申塔あり
61	前坂供養塚群	〃	〃	4 基 一列に並ぶ
62	姥ヶ入供養塚群	〃	〃	4 基
63	田向遺跡	散 布 地	縄文・古墳	縄文後期～晩期
128	北ノ館跡	城 館 跡	鎌倉	土塁と堀の一部が残る
342	谷口山権現南供養塚群	供 養 塚	江戸	12基が一列に並ぶ

第 2 表 谷口山古墳周辺遺跡 一覧表

多数の円墳が造られ、本地域の古墳時代後期の中心的位置を占めている。

これと1つ谷を挟んだ丘陵上の南端部分に、谷口山古墳を中心とする谷口山古墳群(55)、全長50mの前方後円墳である瓦塚古墳を中心とした瓦塚古墳群(54)が存在する。瓦塚古墳については平成3年度に作新学院高等部社会研究部の調査により6世紀後半の年代的位置づけがなされており、本墳とほぼ同時期と考えられる。尚、古墳群の規模・構成等に大きな違いがあり、このことは両古墳群の性格を考える上で重要な点である。もちろん、両者は1つの古墳群で谷口山古墳群はその中の1支群とみる考え方もあるかもしれない。

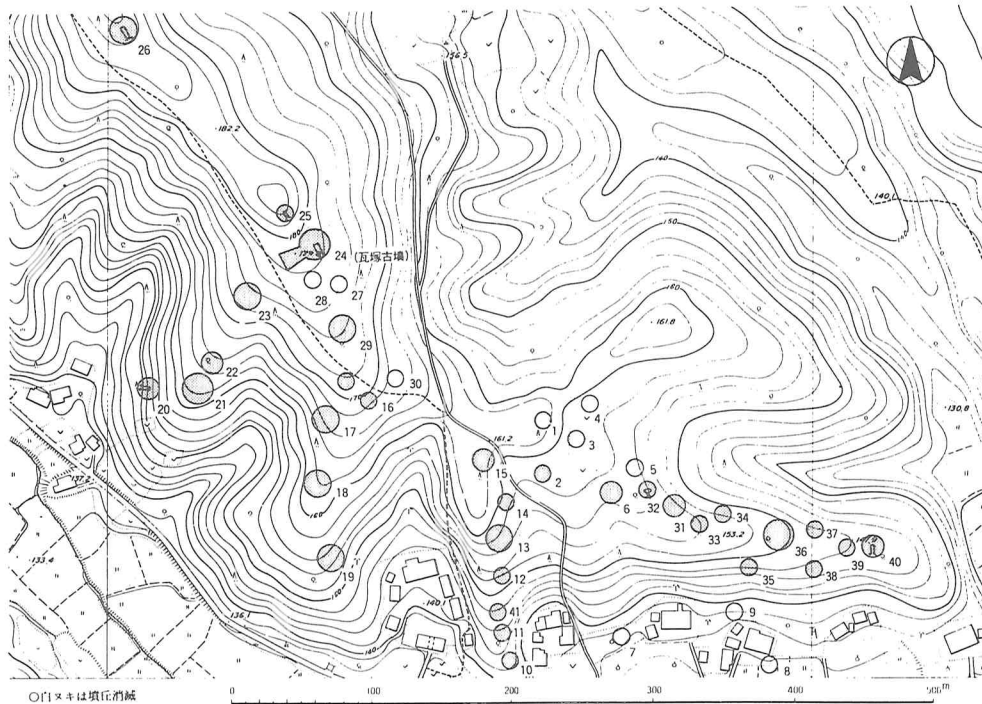
本古墳の見下ろす谷間を奥に進むと、瓦塚古墳群の対岸に長岡百穴(53)がある。7世紀代を中心に築造されたものと考えられる。これらの横穴は集団家族墓であるとの考えがある。本墳の場合も後で述べるが、集団家族墓の位置づけができ、同様の性格が窺えることから、この墓形態の違いは時期差なのか系譜(出自)の差なのか、今後検討を要する。

この他、第30図5(大ジノ古墳群)、6(戸祭大塚古墳)などがあり、特に戸祭大塚古墳は直径53.4mを測り本地域最大の大型円墳である。

これらの古墳群に対する集落跡は、瓦塚日満北久保遺跡(40)、曾理部羅遺跡(42)、上の台遺跡(43)、関堀土用地遺跡(45)、百穴裏遺跡(52)、田向遺跡(63)が挙げられるがほとんど調査が行われておらずその実態は良く分かっていない。

その他の時代について見てみると、縄文中期から晩期にかけての遺跡が古墳時代後期の集落と同様の位置で確認されている。こちらほとんど未調査であるが、日満遺跡において縄文時代中期後半の土坑115基が確認されている。但し、調査範囲内には同時期の住居跡は存在せず、近接した他の場所に集落がある可能性が考えられる。

また、丘陵上には江戸時代の高塚あるいは供養塚が多数存在する。これらは丘陵頂上部に整然と並び、長山供養塚のように「文政7年」の庚申塔の建つものもある。



第16図 瓦塚古墳群全体図

Ⅲ 調査結果

1 墳 丘 (第17・18・21図参照)

第17図からわかるように古墳の周辺は道路などの削平によりかなり改変されているが、周辺の状況や地権者の話などから円墳と考えられる。また、3本のトレンチ調査からも第29図のような推定線が描け、直径が約29m、高さが3.6mと推定できる。

周溝は、T-1とT-3で確認できた。周溝の幅のわかるのはT-1だけで、その規模は上幅1.1m、下幅0.5m、深さ60cmと細くて浅い溝である。これが全周していたかどうか不明であるが、T-2、T-3からわかるように、墓道前面で周溝は途切れる。

墓道は、南側に開口する横穴式石室に続き、羨門から直線的に6mほど延びる。断面は逆台形で、最大上幅は1.3m、下幅0.5mで、底面は地形に沿って南側に緩く傾斜する。また、セクション観察の結果、3回の使用面が確認できた。これは、第21図10・15と4と5の間の層が人為的な層であることから判断できる。また、石室内では埋葬面が2面あることが確認できた。

墳丘の積み方は、第18図からもわかるように、旧地表面の平坦部中央に石室を造るのではなく、やや傾斜しはじめの部分を選地している。まず、その場所をローム層まで掘り下げて、床面、側壁第1段及び奥壁を設置し、裏込めを詰める。次に、14・21層で整地面を造る。その際、石室西側に土坑を掘り、また埋めている。その中から土師器坏片が出土している。また、11層のように凝灰岩片を多量に含む層も見られることから、この整地面で石室石材の加工をした可能性が高い。その後側壁上段を積み上げ裏込め後、石室周辺部を盛土(7~13層, 18~20層)しスロープ状にしておいて、最後に天井石を乗せ、盛土をして完成となる。

2 石 室 (第19~21図参照)

本墳の埋葬施設は、砂質凝灰岩の割石積みによる片袖型の横穴式石室である。石室は南側に開口し、その中軸線はN-3°-Eとほぼ磁北に沿う。

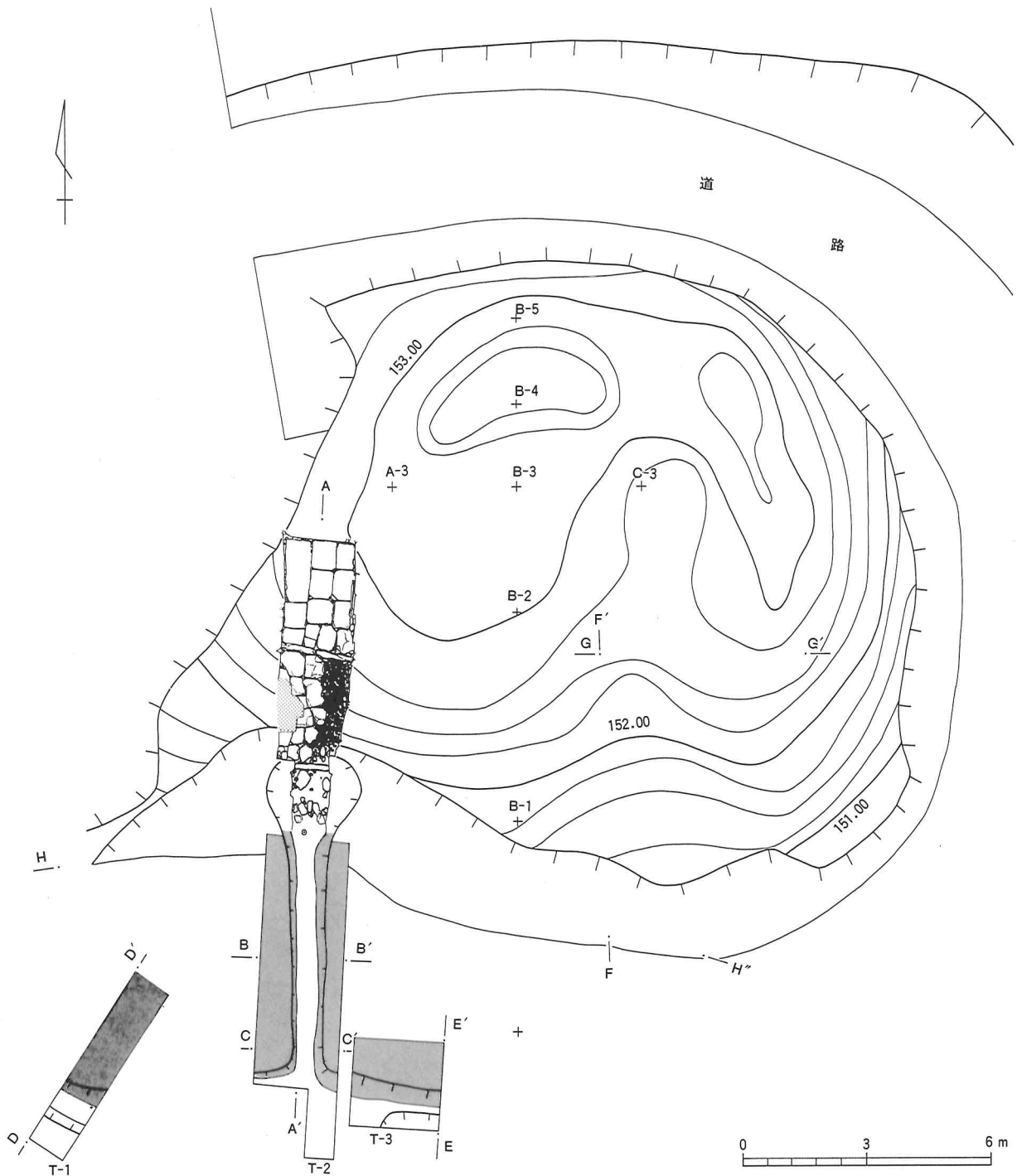
調査開始前は、羨道部の天井石が抜き取られていたが、玄門は砂質凝灰岩の割石で閉塞され、未開口の石室であることがわかった。玄門の閉塞石を取り除き、玄室内の状況を観察したところ、側壁の一部が崩落している外、側壁及び天井石の隙間から流入したものが土砂で床が埋まっていることがわかった。奥壁側は浅く10cm程であるが、手前は25cmも土砂が溜まっていた。

玄室

玄室は、玄室長5.5m、玄室幅は奥壁から玄室2/3までは1.7mであるが、その先玄門手前では1.4mと狭くなる。

奥壁は、表面上の規模が最大幅1.58m、高さ1.57mのほぼ正方形の1枚岩の凝灰岩である。

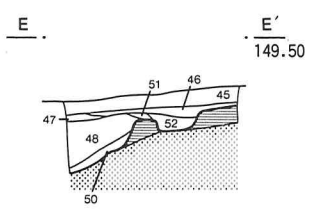
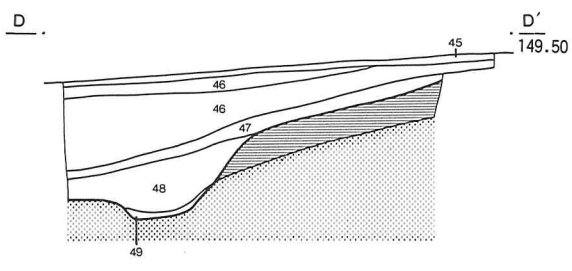
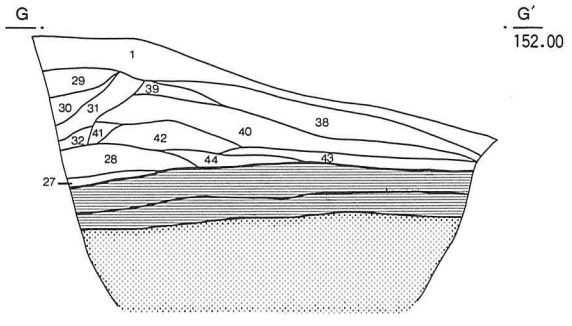
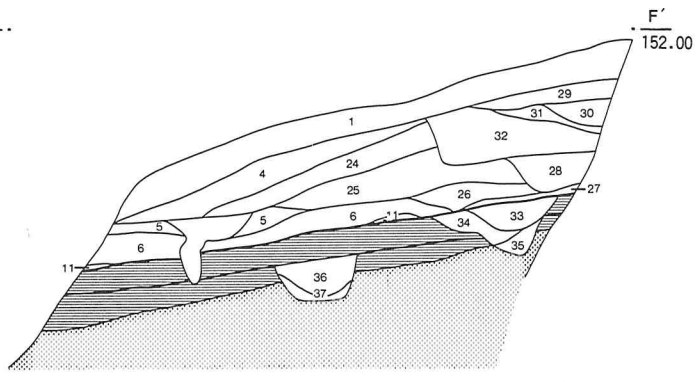
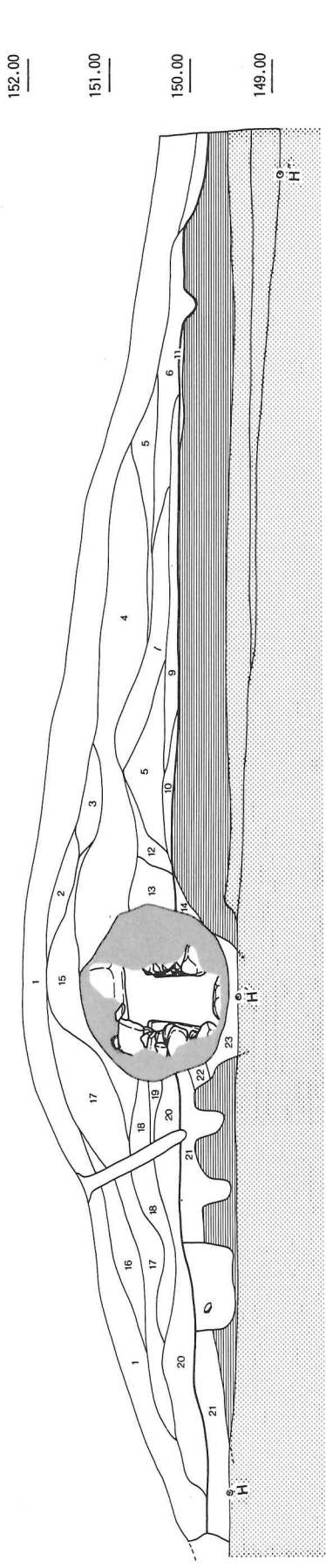
側壁は、基本的に大きめの石を要所に使い、その間を中小の割石で積み上げていくという積み方をしている。具体的に見てみると、西壁は、奥壁に接する部分には奥壁にも匹敵するような大形の石を使い、中間と羨道寄りの部分に大きめの石を使って、その間は長さ30~50cm、幅20~40cmの長方形の石を使用し6段に積み上げている。また、大形の石の上にも中小の石を1~3段積み上げている。東壁もほぼ同様であるが、4か所に大形の石を使い、その間を中小の石で6~7段に積み上げている。





第17図 谷口山古墳実測図

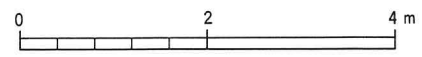
玄門は、高さが1.2mの大きめの1枚石を使用し、東袖が東壁と面を合わせているのに対し、西袖は西壁に対し直行するように置かれ、片袖にすることを意識していることがわかる。

天井石は、4枚の大形の砂質凝灰岩である。やはり奥壁上が一番大きく長さ1.8mを測り、中の2枚は長さ1.3mのものを使用し、玄門手前は、その長さ調整のためか短めの長さ0.8mのものを使用している。また、玄門上には約100cm×40cm×20cmの直方体の楣石を架けていたものと考えられる。

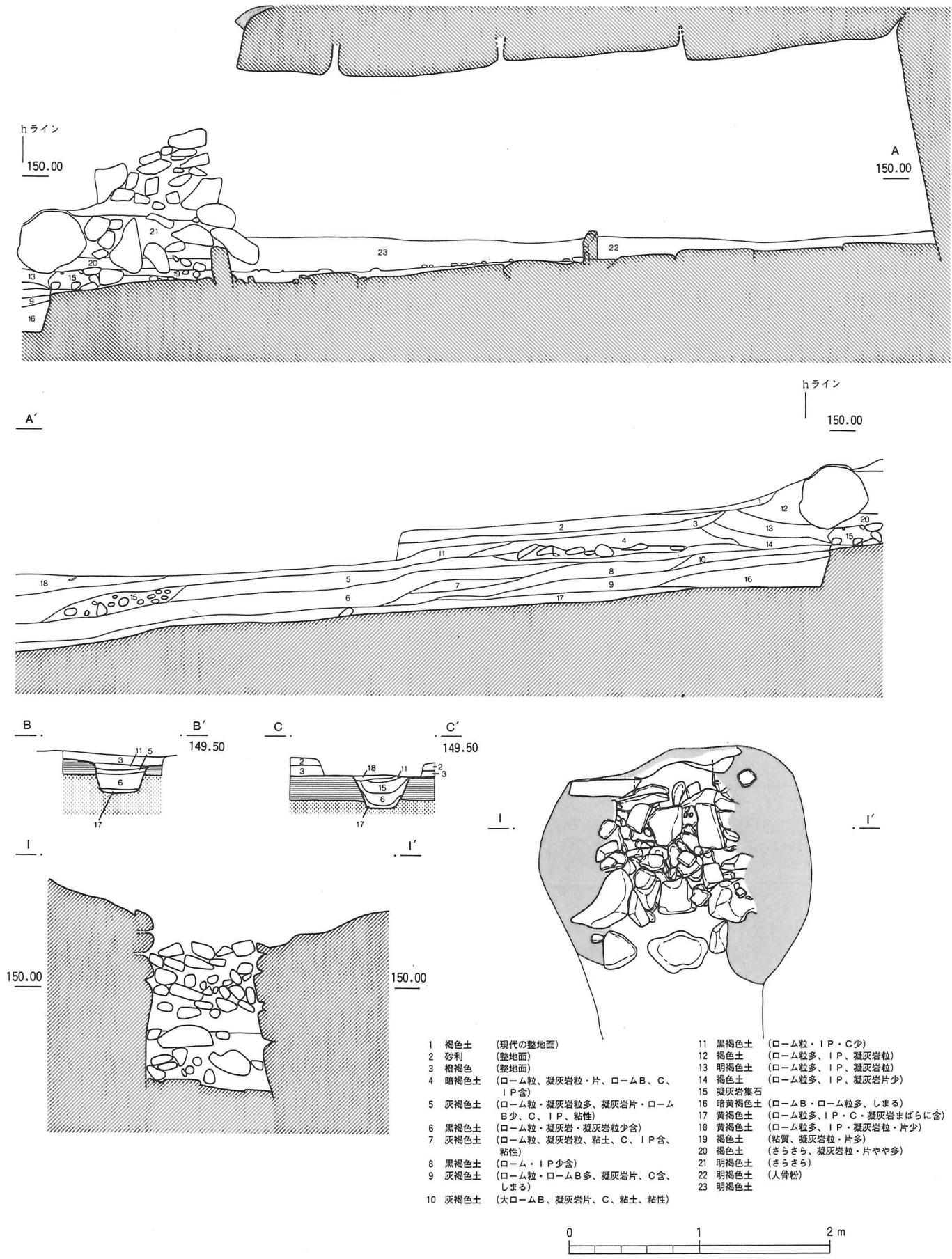


 黑色地山
 ローム地山

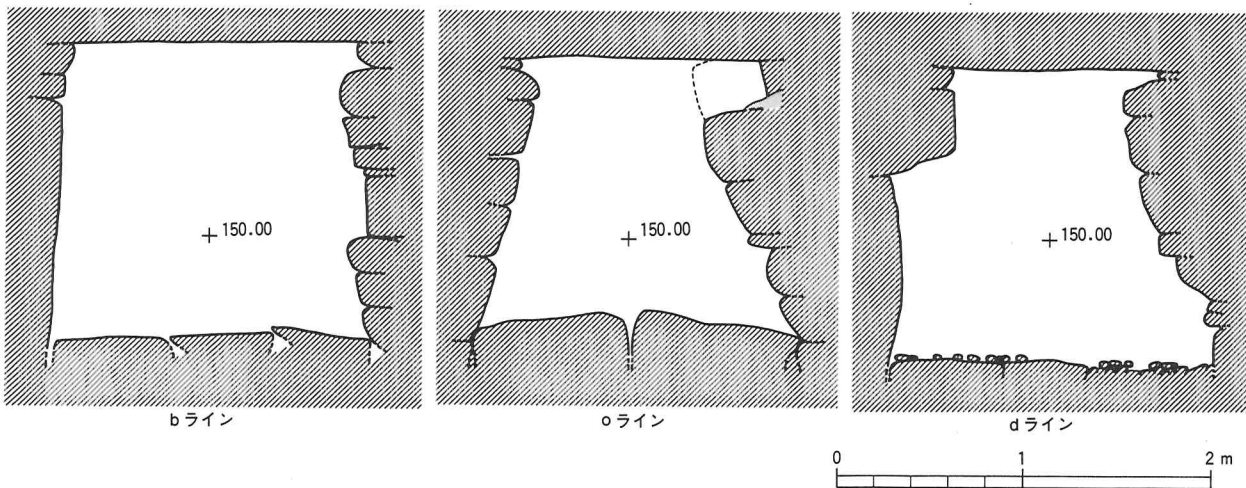
- | | |
|---------------------------------------|---|
| 1 表土 (茶褐色) | 27 暗黄褐色土 (ローム粒・ロームB多、IP、C微) |
| 2 暗褐色土 (ローム粒・小ロームB微) | 28 暗褐色土 (ローム粒・IP・SP少、C目立つ、硬くしまる) |
| 3 暗褐色土 (ローム粒・凝灰岩粒) | 29 褐色土 (IP・ロームB・C少) |
| 4 黒褐色土 (ローム粒・C・凝灰岩粒) | 30 暗黄褐色土 (ローム粒多、ロームB、IP、C) |
| 5 黒色土 (ローム粒・凝灰岩粒少量) | 31 暗褐色土 (ローム粒少、IP、C) |
| 6 褐色土 (小ロームB・凝灰岩粒少量) | 32 暗黄褐色土 (ローム粒多、ロームB・IPB・IP微、C底の部分にやや多) |
| 7 茶褐色土 (ローム粒・小ロームB) | 33 明褐色土 (ローム粒多、C・IP柔らかい) |
| 8 茶褐色土 (小ロームB、凝灰岩粒・C) | 34 褐色土 (ローム粒・IP・Cやや硬い) |
| 9 黄褐色土 (小ロームB、凝灰岩粒・C) | 35 明褐色土 (ローム粒多、IP、柔らかい) |
| 10 黄褐色土 (ロームB多量、C少量) | 36 褐色土 (IP・SP・KP・C少) |
| 11 黄褐色土 (ロームB・凝灰岩粒少量) | 37 黄色土 (ローム粒超多、IP・SP・KP微) |
| 12 黄褐色土 (ローム粒・小ロームB少量) | 38 明褐色土 (ロームB塊が斑点状に入る) |
| 13 黄色土 (ロームB、凝灰岩片) | 39 暗褐色土 (ローム粒やや多) |
| 14 黒褐色土 (ローム粒・C) | 40 褐色土 (ローム粒・IP・SP・C少) |
| 15 黒褐色土 (ロームB・ローム粒少量) | 41 黒色土 (IP・C少) |
| 16 褐色土 (ロームB、ローム粒) | 42 暗褐色土 (ローム粒・IP・凝灰岩粒少) |
| 17 暗褐色土 (ローム粒・小ロームB) | 43 黒褐色土 (ローム粒微、IP粒・C・凝灰岩粒少) |
| 18 暗褐色土 (ローム粒・小ロームB、凝灰岩粒) | 44 黄褐色土 (ローム粒・ロームB多、KP・IP・C) |
| 19 褐色土 (ローム粒・凝灰岩粒) | 45 砂利層 |
| 20 黒褐色土 (ローム粒・凝灰岩粒多量) | 46 整地層 |
| 21 黄褐色土 (ローム粒・小ロームB、凝灰岩粒・片) | 47 明褐色土 (ローム粒・凝灰岩粒少) |
| 22 暗褐色土 (ローム粒・凝灰岩片) | 48 暗褐色土 (ローム粒・IP・凝灰岩粒少) |
| 23 褐色土 (ローム粒・C・凝灰岩粒・片多量) | 49 暗黄褐色土 (ローム粒多、C・IP) |
| 24 褐色土 (ローム粒やや多、小ロームB微、IP、SP、C、凝灰岩粒少) | 50 暗黄褐色土 (ローム粒やや多、ロームB、IP) |
| 25 暗褐色土 (ローム粒やや多、ロームB少、IP、SP、C、凝灰岩粒少) | 51 明褐色土 (ローム粒やや多) |
| 26 明褐色土 (ローム粒・ロームBやや多、IP・Cあまり目立たない) | 52 褐色土 (ローム粒やや多、IP、SP) |



第18図 谷口山古墳墳丘断面図



第21図 谷口山古墳石室断面図(1)



第22図 谷口山古墳石室断面図(2)

床面は、幅15cm、長さ85cmと95cmの2本の境石により、玄室内は二分されている。奥壁側は、長方形あるいは正方形の板石が13枚（正確には12枚で1枚は敷く途中に割れたものか、いずれにしても元々は1枚の石として加工されたものと考えられる）が整然と敷かれている。これに対し玄門側は、拳大の大きさの玉石を敷きつめている。但し、この玉石を1層捲ると、西寄り2/3は板石が、残り1/3は玉石が敷かれていた。この板石は、奥壁側のものに比べると、やや不揃いの感じを受ける。また、玉石は、上層に敷かれたものに比べ下層のものの方がやや大きめのものを使用している。尚、下層が最初の埋葬面と考えられ、以後第1次埋葬面と称し、上層の玉石だけの面を第2次埋葬面と称する。

羨道

羨道は、羨道長1.5m、羨道幅0.8mで、天井石及び側壁の上部は調査前に消失していた。

側壁は、玄門袖部に接する部分には大きめの砂質凝灰岩を使用するが、それ以外は中小の割石を使用し、玄室内ほどきちんと積んでいない。

床面は、閉塞石を除去していく段階で、ほぼ偏平な石（この時点では表面上しか見えなかった）を墓道と羨道部の境及び玄門部に残した以外、ほとんど閉塞石がなくなり、ローム粒を多く含むやや硬めの層が確認できたためこれを第2次埋葬面に対応する羨道部の床面と考えた。尚、玄門部に横たわる細長い石の下に斜めに立て掛けるように3つの石が並んで置かれていた（第20図参照）。後に、この層を掘り下げた結果、大小の砂質凝灰岩の割石が出土し、それを除去した結果、玄室床面とほぼ同レベルで、幅15cm、長さ83cm、高さ17cmの框石と2枚の板石及び少量の玉石を確認したため、第1次埋葬面に対応する床面がこれであると判断した。尚、墓道と羨道との境に砂質凝灰岩の割石が折り重なるようにややまとまって出土したが（第21図15層）、これは一番最初の閉塞時の石と考えられる。

墓道

墓道は、墓道長6m、確認面での最大上幅1.3m、底面は40～50cm、確認面からの深さ60cmの断面逆台形状で、ローム地山を掘り込んで造られている。

残念なことにすでにこの部分の墳丘は削平されているため、切り通し状になっていたのか、それとも盛土で埋められていたのかは不明であるが、墓道埋土状況から3回の使用面が確認できる。

第21図セクション図は墓道部分の埋土状況である。一番下の17層はローム粒多量の層で自然堆積層と考えられるが、9、10、16層は人為的に埋めた層と考えられ、10層の上面が石室内の床面と一致する。この面が

最初の墓道の床面と考えられる。5・11層の黒色土の間の凝灰岩粒，粘土粒などを含む15層及び，4と5層の間の凝灰岩を多く含む層は，人為的なものと考えられ，この際に石室が開かれたものと考えられる。尚，3層以上は駐車場としての整地層であり，この3回の使用面以上のことは不明である。

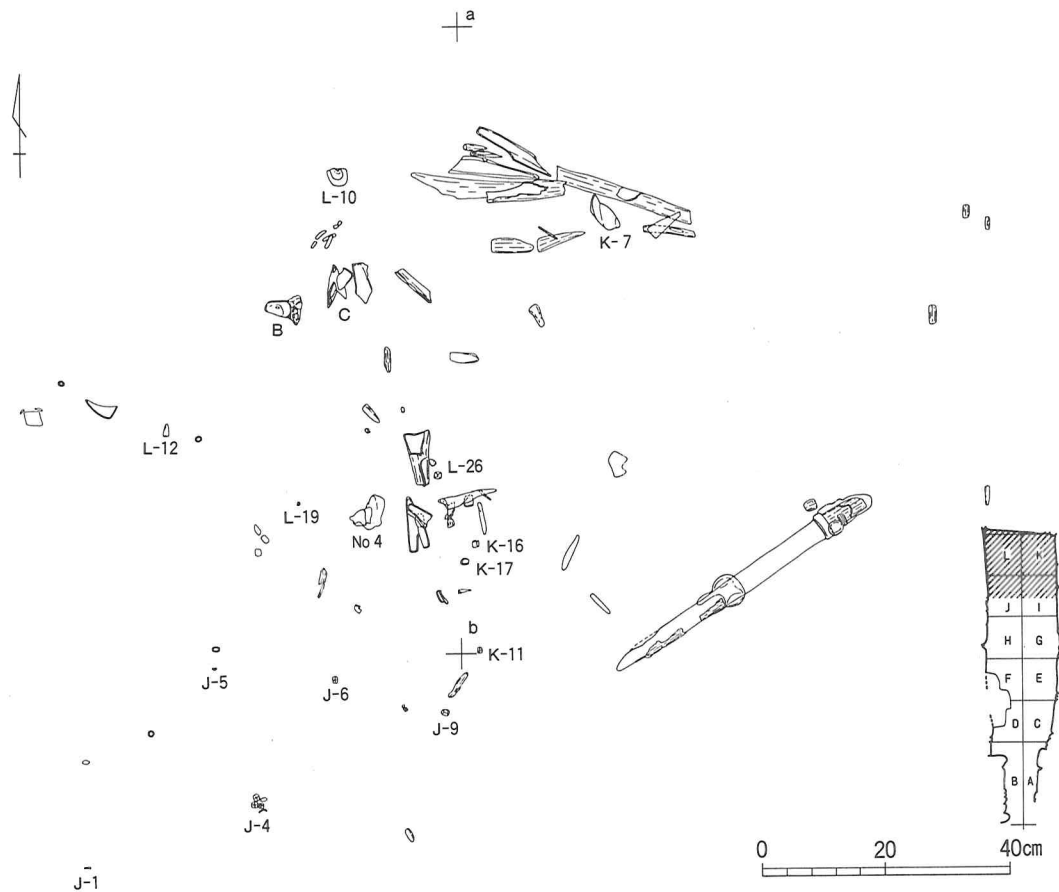
3 出土遺物

石室内からは人骨，直刀3口，鉄鏃1本，耳環3個，ガラス小玉145個，墳丘内土坑から土師器坏1点，周溝から須恵器提瓶片1点が出土した。

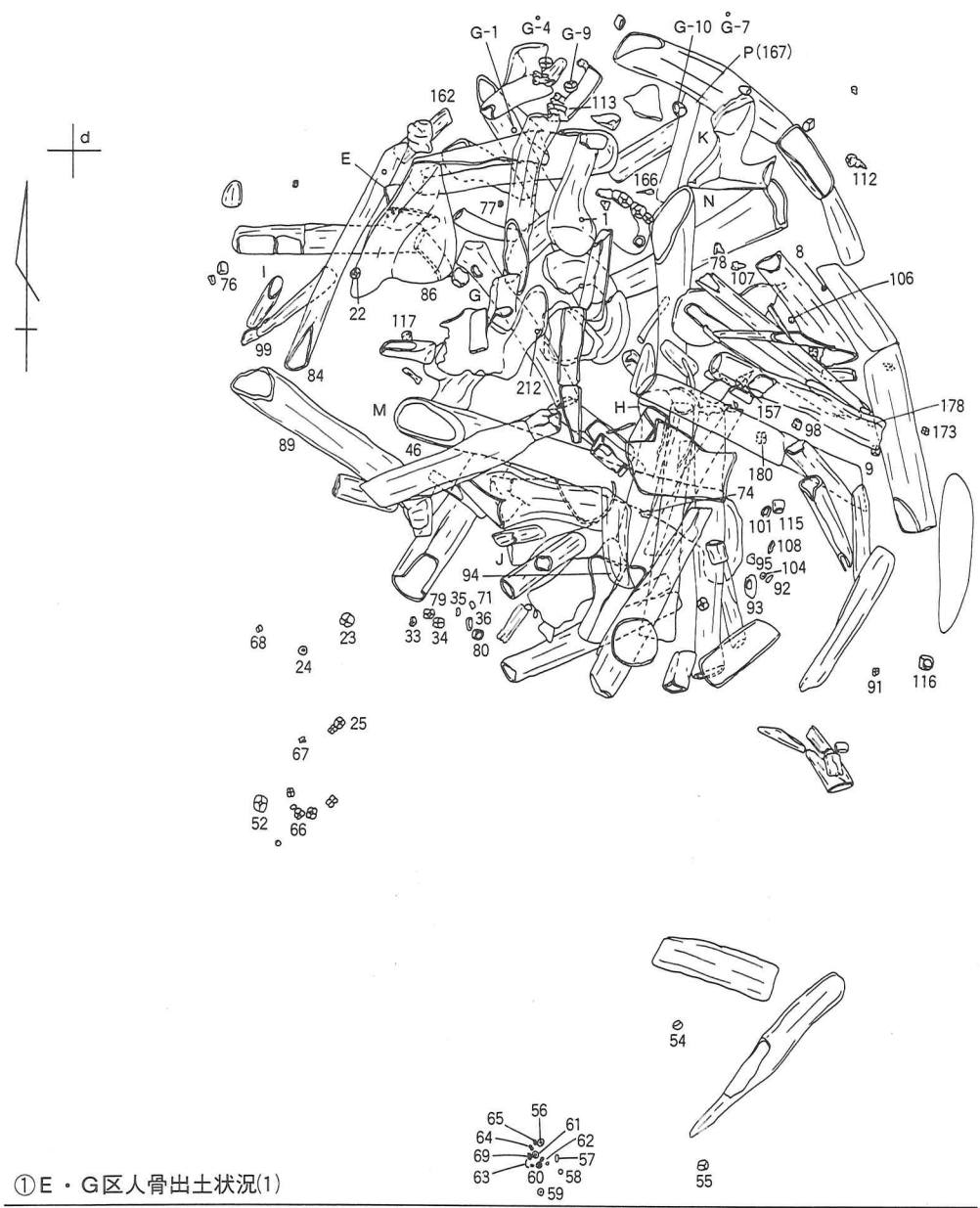
人骨（第23・24図）

奥壁側（J・K・L区）からは人骨67片（うち歯を24本含む）が出土した。第25図から歯の出土状況を見ると，奥壁西側（J・L区）に偏って出土している。この他，境石の南側（E・G区）から人骨219片（うち歯を69本含む）が出土した。人骨片の中には頭蓋骨の一部，顎骨，上腕骨等が確認できた。こちらは，石室の主軸よりも東側に人骨等が集中し，奥壁側と対照的である。人骨の出土量も境石の南側の方が多く，その出土状況から骨を片づけた様子が窺える。後述するガラス小玉，耳環も奥壁側からの出土が無いことからこの片づけられた人骨に伴う副葬品と考えられる。尚，第24図②は，①の骨を除去した後に出土した骨の状態である。

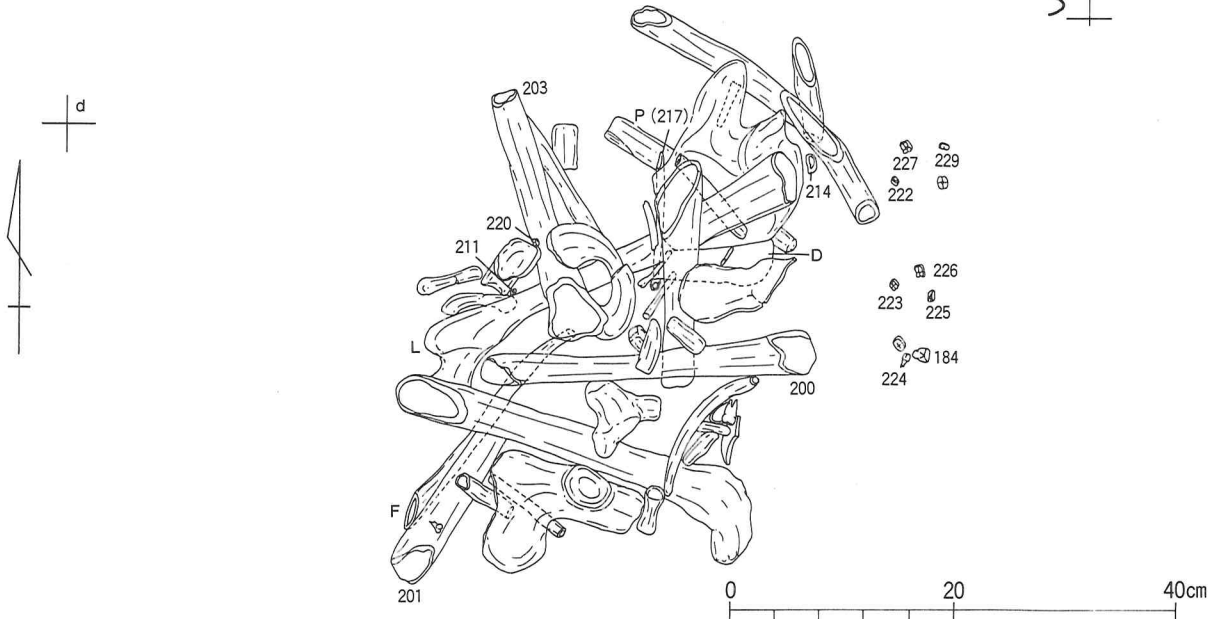
人骨の鑑定結果については，章を改めて記載する。



第23図 谷口山古墳 I～L区人骨出土状況図

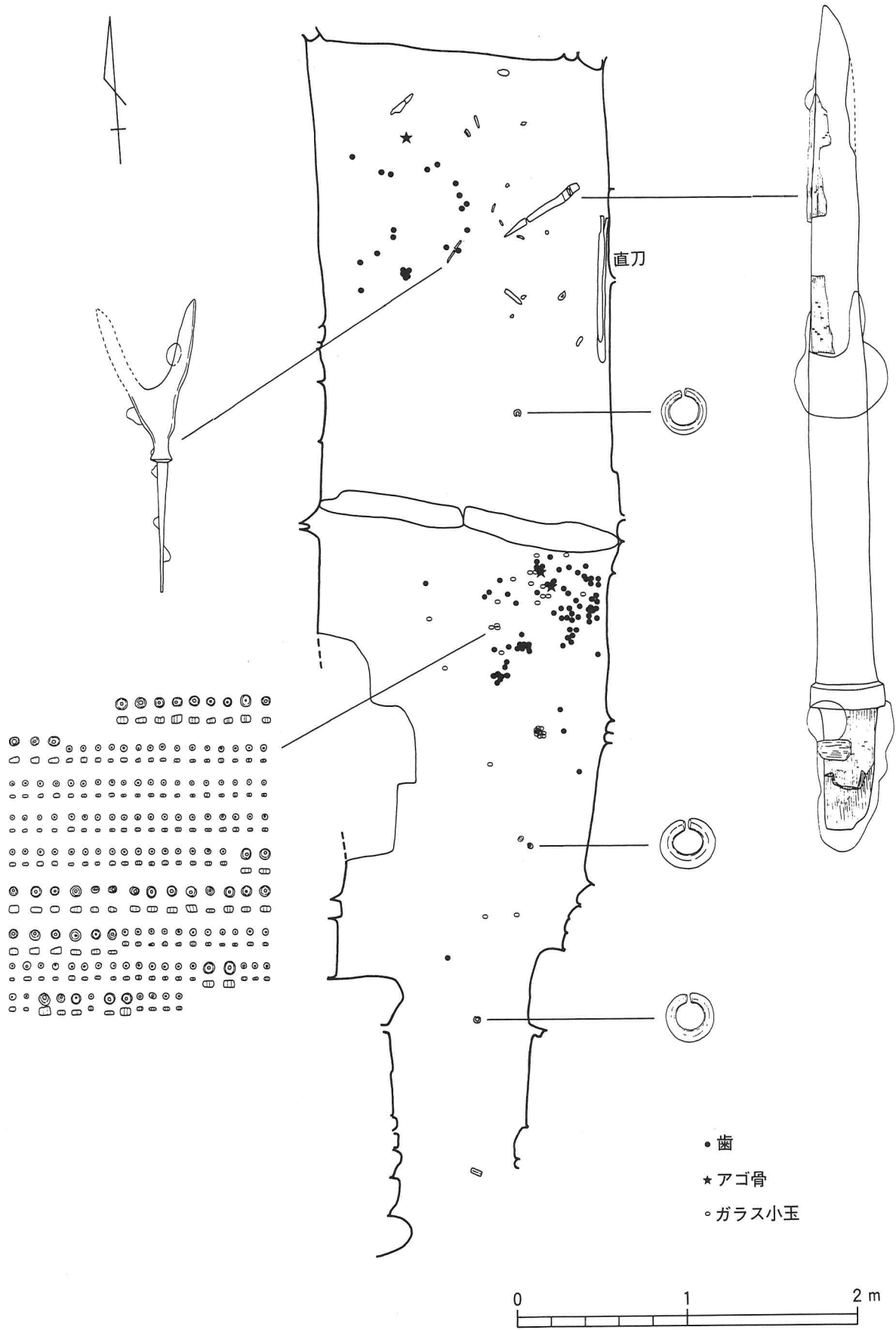


① E · G 区人骨出土状况(1)



② E · G 区人骨出土状况(2)

第24图 谷口山古墳 E · G 区人骨出土状况图



第25図 谷口山古墳遺物出土状況図

直刀（第26図1）

直刀3口のうち2口は、錆のため2口が重なり合い玄室床面にへばりつき、取り挙げが困難であった。石室自体の保存が決まっていたことから、取り挙げを断念し、現地で保存する事とした。

1は、上記2口とは別に、玄室中央部のやや浮いた状態で、切先を南西方向に向け、何かに立て掛けてあったのが倒れた様な状態で出土した。茎尻を若干欠くが、現存長49.8cmを測る。刀身は平棟平造りで、切先はふくらをなす。関及び目釘穴などは木質に履われ不明である。

鉄鎌（第26図2）

2は、雁股鎌で、全長17.2cm、刃長5.3cm、刃幅0.9cm、茎長7.7cmを測る。もう一方の刃部は欠損している。

出土土器（第26図3・4）

墳丘整地地面から掘りこまれた土坑内から土師器坏1片と、前庭部周溝埋土中から須恵器提瓶1片が出土した。

3は土師器坏で、口径15cm、器高4.6cmを測り、丸底で体部外面

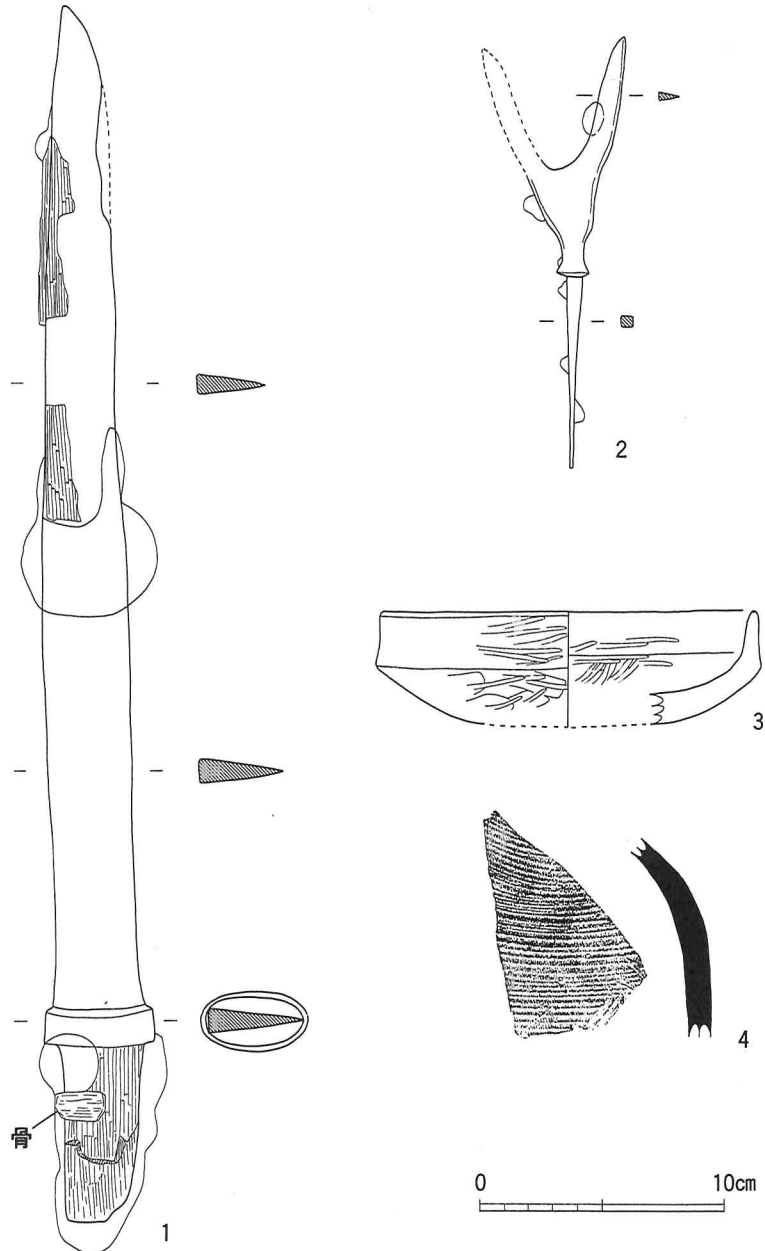
に稜を有し、口縁部が直立する。口縁部内外面はヨコナデ後横ヘラミガキ、体部内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリ後粗いヘラミガキ。胎土に石英・長石・輝石を含み、焼成は良好、色調は褐色を呈する。口縁部の一部に漆が付着している。

4は須恵器提瓶の胴部片で、外面にカキ目が見られる。胎土に白色砂粒、小石を含み、焼成は良好、色調は青灰色を呈す。

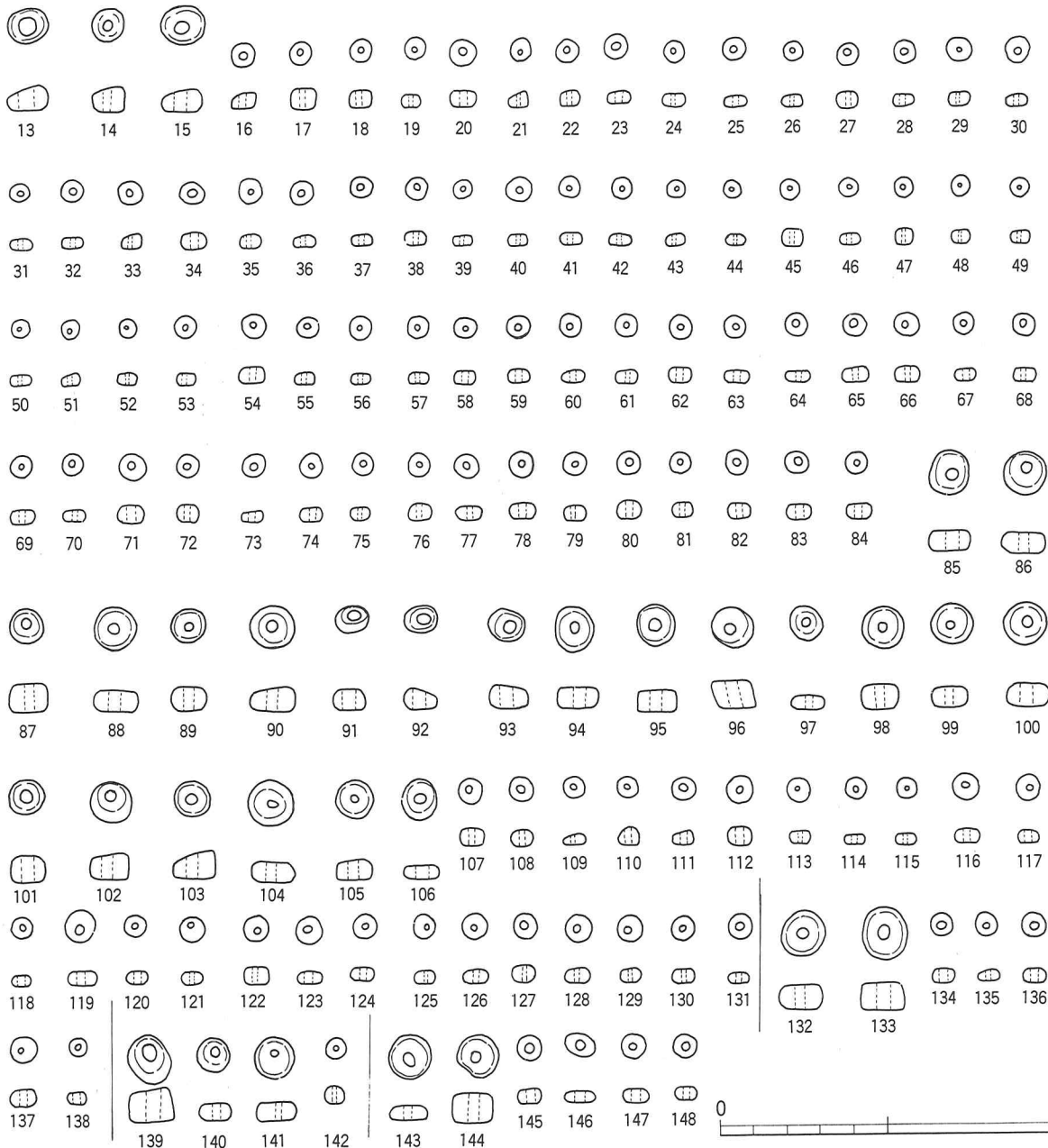
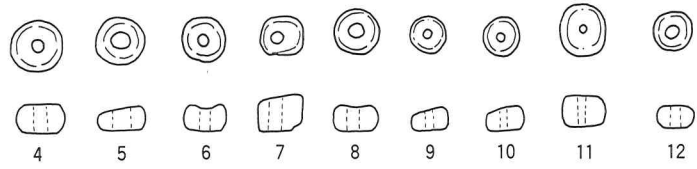
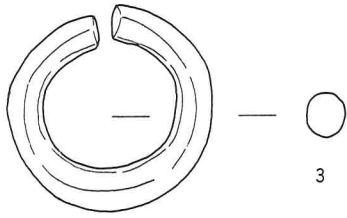
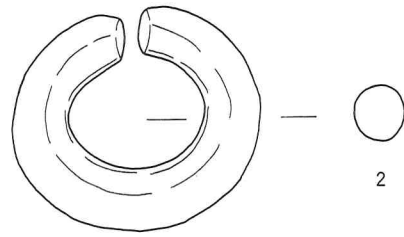
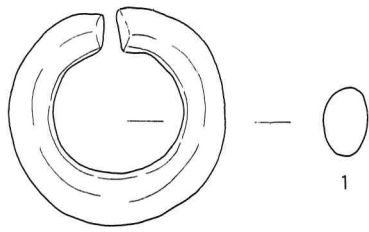
耳環（第27図1～3）

耳環2点（1・2）は、玄室内でも境石より羨道寄り出土し、3は境石より奥壁側から出土している。また、それぞれの位置が離れており、床面の玉石に食い込む様な状態で出土していることから、埋葬時の位置から動いている可能性が高い。

1は玄門の框石付近から出土した。銅心銀張製で、径が2.9cmのほぼ円形、断面長軸0.9cm×短軸0.6cmの



第26図 谷口山古墳出土遺物実測図



第27図 耳環・ガラス小玉実測図

楕円形で、突き合わせ部隙間は2mm、重さ25gである。

2は1より1m程奥壁側の人骨集積地点に隣接して出土した。青銅製で、長径が3.3cm、短径2.9cmの楕円形で、断面0.7cmの円形、突き合わせ部隙間は3mm、重さ30gである。

3は2より2.5m程奥壁側の境石より北側から出土した。青銅製で、径が2.8cmのほぼ円形で、断面0.6cmの円形、突き合わせ部隙間は2mm、重さ11gと他の2つに比べて華奢である。

ガラス小玉（第27図4～148・第3表）

調査中及び調査後に篩をかけた結果145個のガラス小玉を確認した。4～72まではC区の出土、73～131まではE区の出土、132～138まではF区の出土、139～148まではG区の出土である。すべてのガラス小玉が境石より玄門寄りの人骨集積地の周辺からの出土であることから、この人骨に伴うものと考えられる。

ガラス小玉の大きさは、最大径が5～7mmの大きいものと3～4mmの小さいものとの大小に分けられる。小さいものに関しては孔径、最大厚とも均一性が窺えるが、大きいものはその形、孔径などにばらつきが見られる。色調は紺を基調とするが、青、淡青のものもある。中には緑（89、132）と白（123）の色があり、白色のものは石製である。

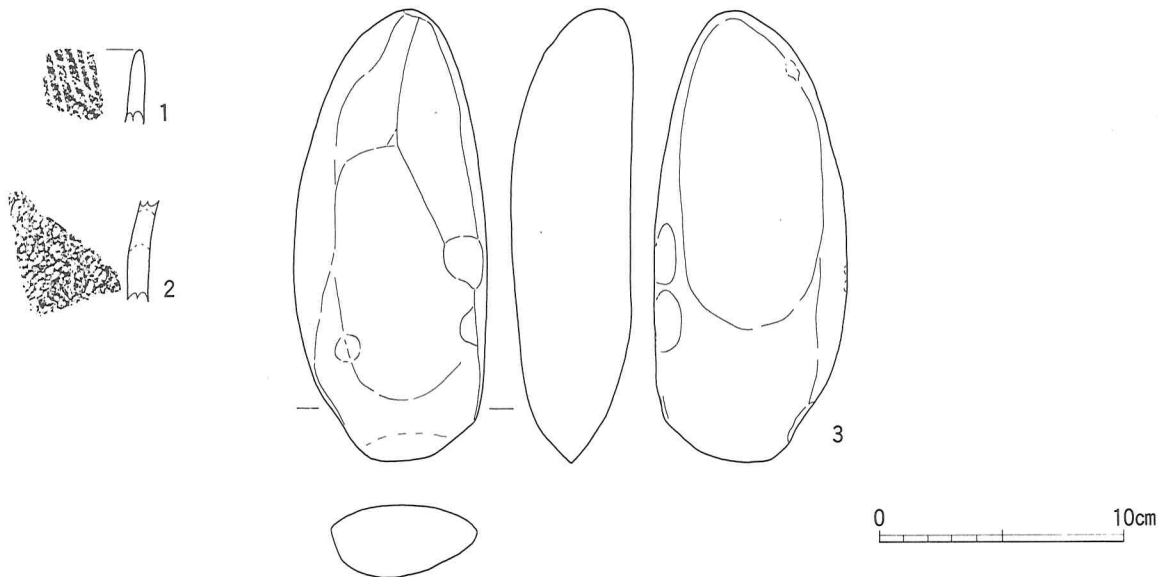
縄文時代の遺物（第28図）

この他に、縄文土器2片と磨製石斧1点が出土した。

1は口縁部破片で、地文に単節斜縄文を施し、その後斜め及び縦方向に条痕文を施す。胎土に輝石、砂粒を含み、焼成は普通、色調淡褐色を呈する。

2は胴部破片で、縄文を施す。胎土に砂粒及び繊維をやや多く含む。焼成は普通、色調は褐色を呈する。

3は磨製石斧で古墳盛土内から出土した。長さ18cm、幅7.6cm、厚さ5cm、重さ1.1kgを測る。刃部以外は自然面と磨いた面の両方が見られる。



第28図 縄文時代の遺物

(mm)											
番号	最大径	孔 径	最大厚	色 調	出土地点	番号	最大径	孔 径	最大厚	色 調	出土地点
4	7.0	1.8	3.5	青	C区	77	3.5	1.0	2.0	紺紺	C区
5	6.5	2.3	3.9	紺	〃	78	4.0	1.5	2.0	紺紺	〃
6	6.0	1.8	3.5	青	〃	79	3.5	1.0	2.0	紺紺	〃
7	6.0	2.0	5.0	紺	〃	80	3.5	1.0	2.5	紺紺	〃
8	6.2	2.1	3.0	青	〃	81	3.2	1.0	2.0	紺紺	〃
9	5.0	1.2	2.5	紺	〃	82	3.5	1.0	2.0	紺紺	〃
10	5.0	1.0	3.0	青	〃	83	3.5	1.0	2.0	紺紺	〃
11	6.3	1.0	3.0	紺	〃	84	3.5	1.0	2.0	紺紺	〃
12	5.0	1.2	3.0	紺	〃	85	6.0	2.0	3.0	紺紺	E区
13	6.0	2.5	3.5	紺	〃	86	6.5	1.5	3.0	紺紺	〃
14	5.0	1.2	3.5	青	〃	87	5.5	1.2	4.0	淡緑	〃
15	6.0	2.0	3.0	紺	〃	88	6.5	2.0	3.0	紺紺	〃
16	4.0	1.0	2.5	紺	〃	89	5.5	1.2	3.5	紺紺	〃
17	4.0	1.0	3.0	紺	〃	90	6.8	1.7	3.5	紺紺	〃
18	3.2	1.0	2.5	紺	〃	91	5.0	2.0	3.0	淡青	〃
19	3.0	1.0	2.0	紺	〃	92	5.0	2.0	3.0	淡青	〃
20	4.0	1.2	2.5	紺	〃	93	6.0	2.0	3.5	淡青	〃
21	3.2	1.0	2.2	紺	〃	94	6.0	1.7	3.0	紺紺	〃
22	3.2	1.0	2.0	紺	〃	95	6.0	1.7	3.0	紺紺	〃
23	3.2	1.0	1.5	紺	〃	96	6.0	1.7	4.0	紺紺	〃
24	3.2	1.0	2.0	紺	〃	97	5.0	1.5	2.0	紺紺	〃
25	3.2	1.0	1.5	紺	〃	98	6.0	1.5	3.5	紺紺	〃
26	3.0	0.8	2.0	紺	〃	99	6.0	1.5	2.5	紺紺	〃
27	3.5	1.0	2.5	紺	〃	100	6.2	2.0	3.0	淡青	〃
28	3.2	1.0	2.0	紺	〃	101	5.0	2.0	3.5	淡青	〃
29	3.2	0.8	2.0	紺	〃	102	6.0	1.5	4.0	淡青	〃
30	3.2	1.0	1.5	紺	〃	103	6.0	1.5	4.5	淡青	〃
31	3.0	1.0	1.8	紺	〃	104	6.5	1.5	3.0	紺紺	〃
32	3.2	1.0	1.5	紺	〃	105	5.5	1.5	3.0	紺紺	〃
33	3.2	1.0	2.0	紺	〃	106	5.5	2.0	2.5	淡青	〃
34	3.5	1.5	2.0	紺	〃	107	3.5	1.0	2.0	紺紺	〃
35	3.5	0.8	1.8	紺	〃	108	3.5	1.0	2.0	紺紺	〃
36	3.5	1.0	1.8	紺	〃	109	3.2	0.8	1.5	紺紺	〃
37	3.0	1.0	1.8	紺	〃	110	3.0	1.0	2.5	淡青	〃
38	3.2	1.0	2.0	紺	〃	111	3.5	1.0	2.0	紺紺	〃
39	3.0	1.0	2.0	紺	〃	112	3.5	1.0	2.5	紺紺	〃
40	3.0	1.0	1.8	淡青	〃	113	3.5	0.8	2.0	紺紺	〃
41	3.2	1.0	1.5	紺	〃	114	3.2	0.8	1.5	紺紺	〃
42	3.0	1.0	1.5	紺	〃	115	3.2	1.0	1.5	淡青	〃
43	3.0	0.8	2.0	紺	〃	116	4.0	1.0	2.0	淡青	〃
44	3.0	0.8	1.8	紺	〃	117	3.5	1.2	1.5	淡青	〃
45	3.0	0.8	2.5	紺	〃	118	3.0	1.0	1.5	淡青	〃
46	3.0	0.8	2.0	紺	〃	119	4.5	1.2	2.0	紺紺	〃
47	3.0	0.8	2.0	紺	〃	120	3.2	1.0	2.0	淡青	〃
48	3.0	0.8	2.0	紺	〃	121	3.5	0.8	2.0	紺紺	〃
49	3.0	0.8	2.0	紺	〃	122	3.5	0.8	2.5	淡青	〃
50	3.0	0.8	2.0	紺	〃	123	4.0	1.2	2.0	白紺	〃
51	3.0	0.8	1.8	紺	〃	124	3.5	1.0	2.0	紺紺	〃
52	3.0	0.5	2.0	紺	〃	125	3.5	0.8	2.0	紺紺	〃
53	3.2	1.0	1.8	紺	〃	126	4.0	1.0	2.0	紺紺	〃
54	3.5	1.0	2.0	紺	〃	127	3.5	1.0	2.5	紺紺	〃
55	3.0	1.0	1.8	紺	〃	128	4.0	1.5	2.0	紺紺	〃
56	3.2	1.0	1.8	紺	〃	129	3.5	1.0	2.0	紺紺	〃
57	3.2	0.5	2.0	紺	〃	130	3.5	1.0	2.5	紺紺	〃
58	3.2	1.0	2.0	紺	〃	131	3.5	1.0	1.5	淡青	〃
59	3.5	1.2	2.0	紺	〃	132	6.7	1.5	3.5	緑紺	F区
60	3.2	1.0	1.5	紺	〃	133	6.5	2.0	4.0	紺紺	〃
61	3.2	1.0	2.0	紺	〃	134	3.5	1.5	2.0	紺紺	〃
62	3.0	1.0	2.5	紺	〃	135	3.5	0.8	1.5	紺紺	〃
63	3.5	1.0	2.0	紺	〃	136	3.7	1.5	2.0	淡青	〃
64	3.5	1.0	1.5	紺	〃	137	4.0	1.0	2.5	紺紺	〃
65	3.5	1.0	2.0	紺	〃	138	3.0	1.0	1.5	紺紺	〃
66	3.5	1.0	2.0	紺	〃	139	6.0	2.0	5.0	紺紺	G区
67	3.5	1.0	2.0	紺	〃	140	5.0	1.2	2.5	紺紺	〃
68	3.5	1.0	2.0	紺	〃	141	6.0	1.0	3.0	淡青	〃
69	3.5	1.0	2.0	紺	〃	142	3.0	0.8	2.5	淡青	〃
70	3.5	1.0	1.5	紺	〃	143	6.0	2.0	3.0	紺紺	〃
71	4.0	1.5	2.5	紺	〃	144	6.0	1.5	4.0	紺紺	〃
72	3.5	1.0	2.5	紺	〃	145	3.7	1.7	2.0	紺紺	〃
73	3.2	1.0	1.5	紺	〃	146	4.7	1.5	1.5	淡青	〃
74	3.5	1.0	2.0	紺	〃	147	4.0	1.5	2.0	紺紺	〃
75	3.0	1.0	1.8	紺	〃	148	3.5	1.5	2.0	紺紺	〃
76	3.5	1.0	2.0	紺	〃						

第3表 谷口山古墳ガラス小玉計測表

IV ま と め

1 石室構造について

本墳は、推定直径29mの円墳である。その主体部は片袖型の横穴式石室で、石室の規模は、玄室長5.5m、最大幅1.7m、最大高1.57m、羨道長1.5m、最大幅0.8m、墓道長6.0m、底面最大幅0.5mである。石室の構造については次のとおりである。

①片袖型の横穴式石室である。②玄門は立柱石と楣石から成る組み合わせ式である。③玄室内に境石を持ち、複室的な構造である。またこれに伴い、床面の状況も異なり、板石のみの奥壁側と板石と河原石の組み合わせからなる玄門側とに分かれる。④玄門側の床面が2層に分かれ、第1次床面が板石と河原石により、第2次床面が河原石が敷かれていた。このことから最低2回の追葬が考えられる。⑤側壁は、割石が主であるが、一部切石状の石を使用し、積み方は大きめの石を最下段に据え（以下腰石と呼ぶ）、基本は乱石積であるが、通目積を意識している部分も見られる。

①に関しては、本墳の丘陵1つ隔てた北山古墳群内の宮下古墳に見られるが、県内においてその数は少な

く、大平町中山古墳や岩舟町小野巢根4号墳（常川 1988）のように横穴式石室導入期に多く見られる。

③の床面に関しては、丘陵西隣の瓦塚古墳群最大の円墳である瓦塚26号墳で、玄室内を分ける境石を持つ点共通するが、26号墳は床全面が河原石である。このような河原石床面と境石との組み合わせは馬頭町川崎古墳（大川 1989）などでも見られるが、板石との組み合わせは、今のところ県内においては例がない。そこで、県外に目を転じてみると、群馬県前橋市前二子古墳、千葉県横芝町殿塚古墳、成東町駄ノ塚古墳、茨城県六ツヶ塚2号墳などが挙げられる。この中で駄ノ塚古墳のように複室構造をもつ石室の床面に板石を使用するケースが多く見られる。上記の中で、床面に限定して本墳との類似性を見るならば、六ツヶ塚2号墳の床面状況が近似する。すなわち、境石を境に、後室には一面に凝灰岩質泥岩の切り石が敷かれているのに対し、前室は右側に凝灰岩質泥岩の切り石があるほかは凝灰岩砂岩・泥岩の自然石が敷かれており、使用している石材は異なるものの、玄室内床面の状況が非常に似ている。

⑤の積み方に関し、この地域の変遷を見てみると、6世紀中頃に宮下古墳や権現山古墳のようなほぼ同規模の石による乱積から始まり、7世紀前半には、大きめの腰石を最下段に据え、その上にやや小ぶりの石を通目あるいは互目積する（八幡山1号墳、山本山古墳）ようになる。いずれも割石であるが、後者のほうが加工の度合いが良くなる。このような流れのなかで、本墳は、その過渡的な様相を示す。

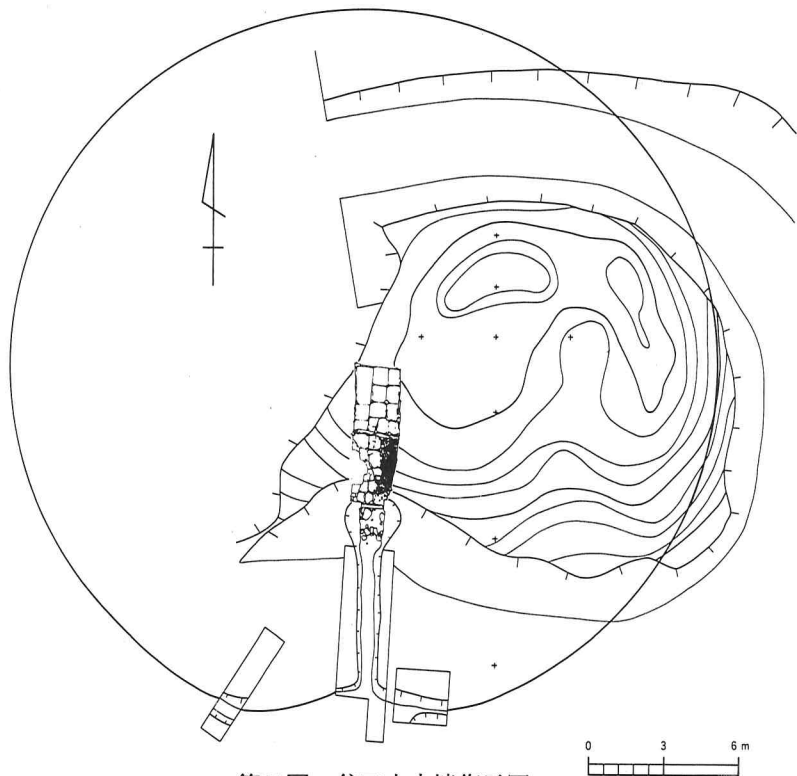
2 出土遺物について

横穴式石室の場合、追葬という行為があるため、なかなか築造時期を限定することが難しい。本墳においては、古墳築造に際し、掘られた土坑の埋土中から土師器坏片が出土し、これをもって上限とすることができよう。但し、1点のみの出土であることから時期を限定することは難しい。

この土器は、田熊・梁木分類のC類に属する（田熊・梁木 1989）。このC類は出土数が量的に少ないため詳しい検討がなされていないが、田熊・梁木編年のⅡ期以降に小型化することである。この土器を法量的にみると、聖山13号住例（Ⅱ期）

よりは小型であるが、権現山4号住例（Ⅲ期）ほどは小型化していない。よって田熊・梁木編年のⅡ～Ⅲ期の段階に位置付けられる。

これに対し、最終埋葬時に伴う可能性の考えられる遺物は雁股鍬である。出土位置は後室部のほぼ中央から出土している。県内では、現時点においてこの手の鍬の古墳からの出土例はない（小森 1984）。杉山氏の鉄鍬の分類・編年によれば、雁股鍬群は、すでに古墳時代中期には出現し、古墳時代後期は少数例で、奈良時代以降に盛行することである（杉山 1988）。よって、古墳時代後



第29図 谷口山古墳復元図

期の可能性も当然考えられるが、次に述べるように追葬もかなり行われていることから、この鏃群が盛行する奈良時代までも視野に入れて考える必要がある。なお、この鏃群の近県例として、杉山氏は千葉県生浜2号墳(TK209~TK46)例を挙げられている。この他に、静岡県富士市横沢古墳からも雁股鏃が出土している。この古墳はTK209段階に築造され、7世紀前半と8世紀前半に追葬されていることのことである(鈴木 1989)。

次に遺物のセット関係を見てみる。本墳は馬具は欠くものの武器、装飾品が副葬されていた。これは石野氏の言う刀階層にあたる(石野 1990)。これに対し、隣接する瓦塚古墳群中の瓦塚古墳や瓦塚26号墳は馬具階層にあたる。谷口山古墳群を瓦塚古墳群の一支群と捉えるならば、前者は後者の下位に位置づけられる。但し、谷口山古墳群は6基の円墳からなり、その一番高所に谷口山古墳が位置することから、谷口山古墳群中において本墳が中心的な位置を占めていたことには違いない。

3 横穴式石室と人骨との関係

人骨鑑定の結果、最低10人の遺体が埋葬されていたことが判明した。

人骨の出土状況は、境石を境に奥壁側と玄門側に分かれる。仮に、奥壁側を後室、玄門側を前室とした場合、後室には4人分(男1人、不明3人)、前室には6人分(男4人、不明2人)が埋葬されていたことになる。但し、ここで問題になるのは、骨の出土状況である。前室・後室いずれも埋葬時の現位置を保っていると考えられる人骨は確定できない。

特に前室の方は1か所に人骨を積み重ねた状態で出土しており、一端埋葬したものを片付けた状況が窺える。尚、ガラス小玉はすべてこの周辺からの出土であることから、この片付けられた人骨に伴う副葬品と考えられる。耳環に関しても現位置を保っているとは言えず、片付けの際に動いているものと考えられる。唯一副葬品の中で現位置を保っているものは、後室の東側壁側床面に密着していた直刀2本のみである。

後室側の人骨も、(No.1)の成人男性の右脛骨の出土状態が奥壁側に寄り過ぎ、しかも奥壁と平行に置かれており、埋葬当初の状況というよりは奥壁側に片づけられた感じが窺える。但し(L-7)(K-7)(L-8)(L-10)の頭骨関係の骨は、最終埋葬者の人骨と考えられる位置から出土している。尚、これらは成人のものである。

この状況に対応するように、玄室の床面を整地しなおしたり、墓道部分において、閉塞石を外した際の凝灰岩破片の散乱した状態等が窺える。これらのことから最低3回の追葬が行われたものと考えられる。

以上、出土遺物の検討も踏まえてまとめてみると、6世紀後葉に築造された後、少なくとも3回の追葬が行われ、その結果、最低10人の遺体が埋葬されたことがわかった。但し、最終の埋葬時期に関しては、十分な遺物の検討ができないため何とも言いがたいが、その埋葬人数及び追葬の回数から少なくとも7世紀代までは使用されていた可能性が高い。

- (参考文献) 石野博信著 1990 『古墳時代史』雄山閣出版
大川清ほか 1989 『川崎古墳石室調査報告』馬頭町教育委員会
小森哲也 1984 「栃木県内古墳出土遺物考(1)―鉄鏃の変遷―」『栃木県考古学会誌』第8号
杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鏃について」『樫原考古学研究所論集』第8号
鈴木敏則 1989 「静岡県における横穴式石室の受容」『第10回三県シンポジウム 東日本における横穴式石室の受容』第一分冊 千曲川水系古代文化研究所 北武蔵古代文化研究所 群馬県考古学研究所
田熊清彦・梁木誠 1989 「古代下野の土器様相(I)」『栃木県考古学会誌』第11号
常川秀夫 1988 『小野巣根古墳群4号墳発掘調査報告書』岩舟町教育委員会
日立市教育委員会 1982 『日立市六ツヶ塚遺跡発掘調査報告書』
前橋市教育委員会 1993 『前二子古墳』

V 谷口山古墳出土の人骨について

獨協医科大学第一解剖学教室

阿部修二・茂原信生・芹澤雅夫

1 はじめに

谷口山古墳山は宇都宮市の北西部にあり、宇都宮市教育委員会によって発掘された。遺構や、遺物などから、6世紀後半の古墳時代に属する遺跡と考えられている。人骨は攪乱されており、保存状態はよくない。数百点の破片と百数点の遊離歯が残っていた。各骨や各歯の個体識別が出来ないので、記載は部位別に行うこととした。

2 出土人骨の特徴

頭蓋

全体の保存された頭蓋はない。頭蓋骨片は3個体分が確認された。右側の側頭骨鱗部が2点 (No. B, No. 4), 岩様部が1点 (No. E-93) と、左側の側頭骨鱗部1点 (No. K-7), 岩様部2点 (No. E, L-10), そして後頭骨1点 (No. L-8) がそれぞれ確認された。骨片の厚さや縫合の状態からいずれも成人以上である。性別は不明である。

下顎骨

右半分1点 (No. D) のみが確認された。歯は第1大臼歯1点が残っている。咬耗度はモルナー (1971) の3度 (象牙質がわずかに露出)。歯槽は第3大臼歯まで認められる。したがって成人と考えられる。性別は不明である。

遊離歯

出土した百数点の遊離歯の歯種を鑑定した結果、右下顎第1大臼歯がいちばん多く10点あった (第4表) 乳歯は、右下顎第1乳臼歯1点 (No. E-80) が確認された。この乳歯の咬耗度はモルナーの3度であり、年齢は6歳から10歳までの少年・少女期の個体と考えられる。このことから遊離歯の年齢層は少年・少女期 (保志; 1988) から成人までとなる。個体数は10個体以上であると考えられる。

咬耗は全体的に非常に少なく、咬耗度はモルナーの2度 (象牙質が露出しない程度にエナメル質が磨耗している状態) がほとんどである。咬耗度がモルナーの3度の範囲に入るのは、右下顎第1乳臼歯と数個の大臼歯のみであった。エナメル質減形成は山本 (1988) の基準、すなわち「肉眼で境界明瞭に、周波条に沿って歯面の1/3以上にわたって認められるもの」に合致するものは認められなかった。カリエス (虫歯) は認められなかった。

体幹骨

成人の椎骨・肋骨とも少数しか保存されていない。ある程度まで形をとどめている椎骨は、軸椎 (No. E 214)・腰椎 (E-206) の各1点である。

上肢骨

上肢帯では成人の肩甲骨片が一对出土している (右・No. E, 左・No. E-86)。左右の大きさや形態的特徴から同一個体と考えられる。上腕骨は3個体分が確認された。右側が3点あり、そのうち、太く男性的なも

のが2点 (No.E-46, No.F) がある。No.E-84は成人であるが性別は不明である。左側は1点 (No.G) のみで性別は不明である。前腕骨では成人の右尺骨片 (No.E-94) と左橈骨片 (No.E-99) が各1点が残っている。

下肢骨

成人男性の寛骨片が一对出土している。(No.J, No.K, 左右の大きさや形態的特徴から同一個体と考えられる。大腿骨は4個体分が残っているが、すべて不完全である。No.Lの右大腿骨は遠位端が破損しているものの長さ約399mmあり、骨体は太くがっちりして男性的である。現代人や古墳時代人の大腿骨と比べて最大長を推測すると約430mmとなる。この最大長から藤井(1960)の推定式を用いて求めた身長は161cmである。古墳時代の男性の平均身長は163.06cm(平本;1972)であるが、この個体はそれよりやや低い。骨幹上部径は矢状径25.6mm, 横径31.9mmある。扁平示数は80.3となり扁平大腿骨である。骨幹中央径は矢状径29.7mm, 横径27mmあり、柱状示数は100で柱状大腿骨(ピラステル型)である。中央周は92mmと太い。No.E-201の右大腿骨は成人と考えられる。近遠位端が破損している。太くがっちりしており男性的である。骨幹上部径は矢状径25mm, 横径34mmあり、扁平示数は73.5となり扁平大腿骨である。殿筋隆起がやや発達している。骨幹中央径は矢状径28.6mm, 横径29mmあり、柱状示数は98.6でピラステル型である。中央周は93mmと太くがっちりしており、No.Lの個体より大柄な成人男性と考えられる。No.Mもまた近遠位端が破損している。成人の男性と考えられる。骨幹上部径は矢状径23.6mm, 横径29.2mmあり、扁平示数は80.8で扁平大腿骨である。骨幹中央径は矢状径28mm, 横径25mmあり、柱状示数は112でピラステル型である。中央周は86mmである。No.E-50の右大腿骨他的大腿骨よりきゃしゃであるが、粗線も発達しており成人の男性と考えられる。No.E-9, No.E-89の左大腿骨はいずれも太く頑丈でやはり成人の男性と考えられる。

脛骨は5個体分が残っている(右脛骨が5点)。太くがっちりタイプの成人男性のものと思われる個体が3点 (No.1, No.N, No.E-166) あった。No.Nの脛骨は後面の鉛直線が発達しており、骨体中央部の横断面はヘリチカのIV型である。No.E-125は近位骨端がまだ癒合していない。癒合面から判断し15歳前後の思春期の個体と考えられる。左脛骨は1点 (No.E-203) あり、成人の男性と考えられる。

腓骨は1点 (No.E-167・No.E-217は接合した=No.P) が残っている。やや槌状であり、成人男性と考えられる。足の骨は左側第1中足骨1点 (No.E-162) が残っていた。成人と思われるが性別は不明である。

3 ま と め

埋葬の個体数および年齢層

右下顎第1大臼歯の数をもとにして考えると、最小個体数は10となる。それぞれの骨の保存が不完全であるため、全体の年齢構成を正確に述べることはできない。しかし、各位の骨片や遊離歯から考えて、10個体分のなかには、少年・少女期や思春期そして成人以上までの幅広い年齢層の個体が含まれていると考えられる。

時代的特徴

歯の咬耗が少ない; 大腿骨の骨幹上部径が扁平傾向にある; などの共通性が認められる。一般的に古墳時代人の大きな特徴は顔面の平坦さにあるが、頭蓋骨はほとんどが破損しており不明であった。身長約161cmは、平本(1971)による古墳時代人男性平均身長(♂163.06cm)よりやや低かった。

参考文献

- 平本嘉助 (1972) : 縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化・人類学雑誌, 80(3) ; 221-236.
- 保志 宏 (1988) : ヒトの成長と老化. 人間科学全書 2, てらぺいあ ; PP. 262.
- Molnar, S. (1971) : Human tooth Wear, tooth Function and Cultural Variability. Amer. J. Phys. Anthropol., 34 : 175-190.
- 芹澤雅夫・茂原信生・阿部修二 (1990) : 的石山古墳出土の奈良時代人骨. 白河市埋蔵文化財調査報告書第 16集, 「的石山横穴墓群」, 53-91.
- 茂原信生・芹澤雅夫・江藤盛治 (1991) : 大室古墳群 (長野市) 出土の人骨. 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書13, 「大室古墳群」, 158-165, 図版71, 72.
- 茂原信生 (1993) : 北村遺跡出土の人骨の形質. 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14, 「北村遺跡」, 259-402.
- 山本美代子 (1988) : 日本古代人骨永久歯のエナメル質減形成. 人類学雑誌, 96 ; 417-433.

写真の説明

PL 6

A : 右側頭骨外面 (No. 4) B : 右側頭骨外面 (No. L-7) C : 後頭骨外面 (L-8) D : 右下顎骨内面 (No.216) E : 右肩甲骨背面 (E-87) F : 右上腕骨前面 (No.208) G : 左上腕骨前面 (No.132) H : 左上腕骨前面 (No. E-144) I : 右尺骨前面 (No. E-87)

PL 7

J : 右寛骨外側面 (No.139) K : 左寛骨外側面 (No.155) L : 右大腿骨前面 (No.209) M : 右大腿骨前面 (No.136) N : 右脛骨前面 (No.154) O : 右脛骨前面 (No.125) P : 左腓骨内側面 (No.167+No.217)

第 3 章

^み御 ^{くら}蔵 ^{やま}山 古 墳

I 調査の経過と方法

1 調査の経過

平成4年2月上旬に、二荒山神社権宮司助川氏より、宇都宮市埜田町に所在する雷神社の改築を行いたいとの連絡が文化課に入る。当教育委員会文化課と助川氏との協議の結果、雷神社改築により、改変を受ける前方部の調査を行うことを決定する。2月24日に発掘承諾書が提出される。3月4日、現地において助川氏立ち合いのもと、前方部側に5本のトレンチを入れることを確認する。以下、調査の経過については次の通りである。

(発掘日誌抄)

3月6日 調査開始。横堀、賀来、今平の3名で標高値を出すためのレベル移動を行う。

9～16日 下草刈り、基準杭設定、墳丘測量。

17日 墳丘測量、T-1、T-2設定、表土剥ぎを行う。墳丘第1段を確認。

23～25日 T-1、T-2周溝部分を掘り下げ、埴輪片が若干出土。

26・27日 T-3、T-4設定、表土剥ぎを行う。T-3の墳丘側に大きな攪乱穴が確認できた。

31日 T-5設定、表土剥ぎを行う。薄い整地層が1～2層入り、その直下で盛土を確認。

4月2・3日 各トレンチのセクション図・平面図を作成。

7・8日 T-1に断ち割りを入れた結果、旧表土上整地面から高坏が2点出土。

9・10日 T-1断ち割り部分の写真撮影、平面図、セクション図の作成。

13・14日 T-1～T-5の埋め戻しを行う。調査終了。

2 調査の方法

調査に当たっての墳丘測量は、等高線間隔を25cmとし、縮尺1/50で作成した。尚、測量に際しての基準坑は、見かけの主軸を基準に5m間隔で設定した。また、標高は水準点までの路離が遠いことから、『宇都宮の遺跡』中の蒲生神社内標高点(139.1m)を使用した。トレンチは、前方部主軸上を中心に5本(T-1～T-5)設定した。トレンチ幅は2mを原則とした。今回の雷神社改築においてはあまり墳丘を傷めないとのことであり、トレンチの設定に関しても必要最小限にとどめた。

基本層序は、I暗褐色土(腐植土)－II黒色土(約10cm)－III褐色土(約10cm)－IVローム層(約1m)－V鹿沼軽石層の順である。但し、痩せ尾根上に造られた古墳であるため、場所によっては、それぞれの土層の厚さに違いが見られる。

II 位置と環境

1 地理的環境

御蔵山古墳は宇都宮中心街にある県庁の北側の丘陵上に立地する。JR宇都宮駅からは西へ1.5kmに所在する。本古墳の周辺の地形を概観すると、宇都宮市街が載る宇都宮西部台地(宝木台地)に宇都宮丘陵が矢



第30図 古墳分布図

	古墳名	墳形	規模m	埴輪	埋葬施設	時期	備考
1	北山古墳群						前方後円墳3基, 円墳9基(現存5基)
	宮下古墳	前方後円墳	43.0	無	横穴式石室	6後	明治32年発掘, 直刀, 鎗, 轡, 三鈴杏葉
	雷電山古墳	前方後円墳	40.0	無	横穴式石室	6中	
	観現山古墳	前方後円墳	40.0	有	横穴式石室	6中	鉄鏃, ガラス小玉
2	谷口山古墳群						円墳5基
3	瓦塚古墳群						前方後円墳1基, 円墳41基
	瓦塚古墳	前方後円墳	50.0	有	横穴式石室	6後	直刀, 鉄鏃, 轡, 金環, 管玉, 切子玉
	瓦塚32号墳	円墳	14.0	無	横穴式石室	6後	直刀, 小刀, 鐔, 鏡
	瓦塚28号墳	円墳	40.0	無	横穴式石室	7前	直刀, 鉾, 鐔, 轡, 刀子
4	浮ノ森古墳	前方後円墳					
5	大ジノ古墳群				横穴式石室		円墳8基
6	戸祭大塚古墳	円墳	53.4	無	横穴式石室	6後	
7	山本山古墳群				横穴式石室		円墳2基
8	戸祭山兜塚古墳群				横穴式石室		円墳6基
9	祥雲寺境内古墳	前方後円墳	40.0				前方部南隅に石材が露出
10	八幡山古墳1号墳	円墳		無	横穴式石室		
11	御蔵山古墳	前方後円墳	65.0	有			
12	免の内台古墳	円墳	10.0				
13	三日月神社古墳	前方後円墳		無			前方部削平
14	三日月神社南古墳群						円墳5基
15	久部浅間山古墳	前方後円墳	50.0	無			
16	久部愛宕塚古墳群						前方後円墳1基, 円墳2基
	久部愛宕塚古墳	前方後円墳	46.0	有			
17	天王山古墳群						円墳3基
18	東原古墳群						前方後円墳2基, 円墳4基
19	さるやま古墳群						前方後円墳1基, 円墳13基
20	大塚神社古墳群						円墳2基
21	下栗大塚古墳	円墳	30.0	無			
22	本村上野遺跡						円墳2基
23	本村古墳	円墳					
24	台内手遺跡						円墳2基
25	大山祇神社古墳	円墳	30.0	無			
26	城南3丁目遺跡						円墳1基, 方墳1基
27	江曾島雷電山古墳	円墳?		無		5前	小形彷彿鏡, 石製模造品
28	塚山古墳群						前方後円墳3基, 円墳5基
	塚山古墳	前方後円墳	98.0	有	竪穴系	5後	
	塚山西古墳	前方後円墳	63.5	有	竪穴系	5後	
	塚山南古墳	前方後円墳	58.0	有	竪穴系	5後	

第5表 御蔵山古墳周辺古墳一覧表

のように突き刺さるような形で中心街にある二荒山神社付近まで延びている。この宇都宮丘陵の両脇には、東に田川、西に釜川が南流する。但し、この田川は横山付近で宇都宮丘陵を横断し、丘陵西側を流れる。これにより宇都宮丘陵が北部と南部に分けられ、宇都宮丘陵北部、宇都宮丘陵南部とそれぞれ呼ばれている。本古墳は、この宇都宮丘陵南部の南端部に位置する。さらに細かく見れば、この位置は、丘陵が一部西側に張り出す部分で、西に傾斜していく部分の西端部上である。標高約140mに立地し沖積地との比高は約20mである。なお、現在この丘陵には八幡山公園、競輪場などがあり、地形の改変がかなり行われている。

2 歴史的環境

御蔵山古墳は、明治17年の県庁舎建設の際に墳丘をかなり削平しており、第32図の墳丘測量図からもわかるように、墳丘裾部、特に南側が削り取られている。この際出土したものとして、『東京人類学会誌』第28号にその出土遺物等が紹介されているので、概要を掻い摘んで述べておく。

長さ182cm、幅75.8cm、高さ58cmの凝灰岩質の石棺が出土し、その中から刀子1、管玉10個、丸玉6個、小玉類10個、この他に土器などが出土した。但し、ここでは御蔵山古墳出土と紹介しているが、色々と検討した結果、この石棺は、御蔵山古墳よりもさらに南側にあった古墳、丁度県庁舎が建っている辺りから出土したもので、県庁建設の際に行き場がなく、御蔵山古墳の近くに再度埋め戻し、古棺記を建てたようである。尚、助川氏の話によれば、それは現在の古棺記の位置より、もっと県庁寄りのところに埋められていたものが、県庁敷地の拡張の際に、古棺記だけ今の位置に移されたとのことである。

次に周辺の遺跡について見てみる。第31図からもわかるように、宇都宮丘陵縁辺部には点々と古墳が存在する。宇都宮丘陵の最先端部はちょうど二荒山神社付近となるが、ここにも古墳があった可能性が指摘されている。また、八幡山公園となっている丘陵上にも多数の円墳群があったとの記録も残されている。その中で現在確認されているものは、八幡山古墳群1号墳(346)のみである。しかし、現状を見てみると、多少起伏の見られる地脹れ状の部分が斜面上に幾つか見られ、古墳の可能性が高い。これらと御蔵山古墳も含めて八幡山古墳群と呼べるかもしれない。

第30図に示すように、宇都宮丘陵南部には瓦塚古墳群、谷口山古墳群、大ジノ古墳群など多数の古墳群が形成され、これらは横穴式石室を持つ後期古墳であることから、この地域が古墳時代後期になってから開発が進んだことを物語る1つの資料と言える。

この後、奈良・平安時代になると、御蔵山古墳から南に500~600mのところ、現在の池上町の辺りに池辺郷が存在したと推定されている。また、この頃には既に二荒山神社は存在したものと考えられ、宇都宮市の中心街としての素地がこの頃から形成されたものと考えられる。

なお、御蔵山古墳の前方部上にある雷神社は、主祭神が大雷神、配神が大物主命で、寛永年間塙田村の農民が、嵐除、雷除の守護神として村を挙げて建立したものと伝えられている。

番号	遺 跡 名	種 別	時 期	備 考
68	山本山古墳群	古 墳	古 墳	S52年調査、円墳2基、横穴式石室
69	御蔵山古墳	〃	〃	前方後円墳(全長62m)
71	戸祭兔田遺跡	散 布 地	〃	
344	戸祭山兜塚古墳群	古 墳	古 墳	円墳6基、横穴式石室
345	祥雲寺境内古墳	〃	〃	前方後円墳(全長約40m)
346	八幡山古墳群1号墳	〃	〃	H6年調査、横穴式石室(直刀1、刀子1、耳環3等)

第6表 御蔵山古墳周辺遺跡一覧表



第31図 御蔵山古墳位置図

Ⅲ 調査結果

1 墳 丘

歴史的環境のところでも述べたとおり、県庁建設の際に西側～南側にかけて削平されており、また、墳頂部においても雷神社の境内ということで、社殿や石段を作る際に改変が行われているようである。地元の方などの話を聞くと、墳頂部は今のようには平らではなく、もっと墳丘は高かった（約1 m程）ようである。この他にも、墳丘測量図（第32図）を見てみると、前方部南西コーナーや北西コーナーにおいてコンターの乱れが見られるのがわかる。これは、後世の改変を受けた結果である。

墳丘の規模は、全長約62m、後円部径約35m、前方部幅約35m、前方部高さ5.4mである。それぞれの数値はすべて復元値である。復元してみると、裾部のほとんどが削平されていることがわかる。また、周溝は確認できなかった。

トレンチは、前方部側に全部で5本設定した。

(T-1)

古墳のみかけの主軸上に設定した。トレンチの長さは21.4mで、墳頂部から墳端部にかけての状況を把握するためのトレンチである。墳端部から30cm程の深さをもって緩やかに立ち上がり、一段目の平坦面（以下第1段と呼ぶ）に至る。第1段平坦面の幅は2.5mで、標高でみると138.10mに位置する。第2段の傾斜は34°とやや急である。第2段平坦面の幅は60cmと狭く、標高でみると141.10mに位置する。第3段目の傾斜は17°と第2段に比べると緩い傾斜角度になる。標高139.100mまでが地山であり、それ以下は削りだして造られ、それより上は盛土であり、4.2mの盛土がなされている。墳頂部は社殿建築の際に既に削られており、盛土が露出していた。また、墳頂端部には古い社殿のコンクリート基礎が掘り込まれていた。

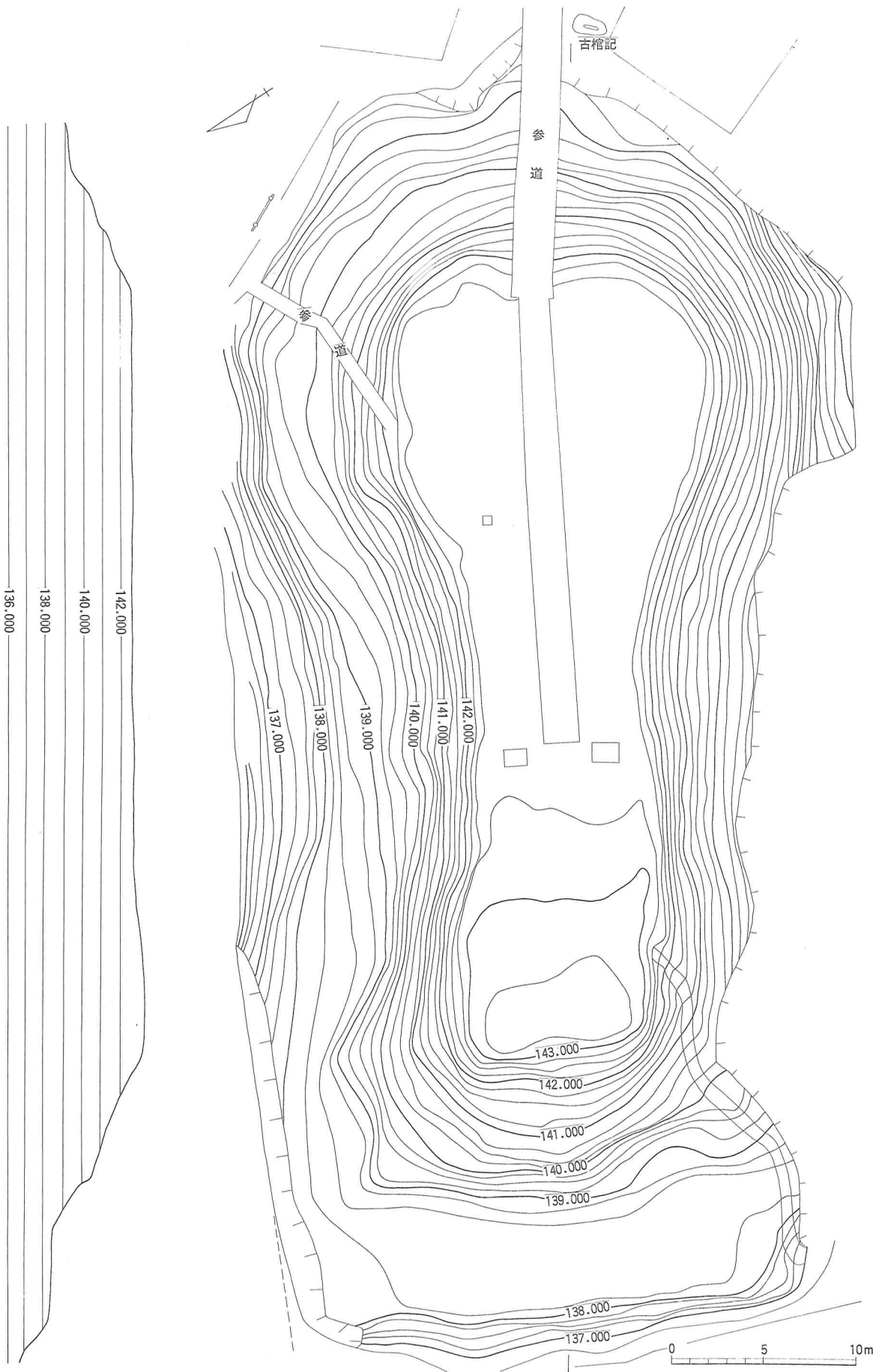
周溝は、セクション図を見てわかるように、古墳に隣接する御蔵山会館造成の際に削り取られてしまっており、周溝外側の立ち上がりが確認できない。よって、削り出したままで周溝を持たなかった可能性も考えられる。

遺物の出土状況は、墳端部分から埴輪が出土した。しかし、ほとんどが細かな破片である。尚、埴輪の樹立位置は確認できなかった。この他に、墳頂端から高坏の脚部が出土した。

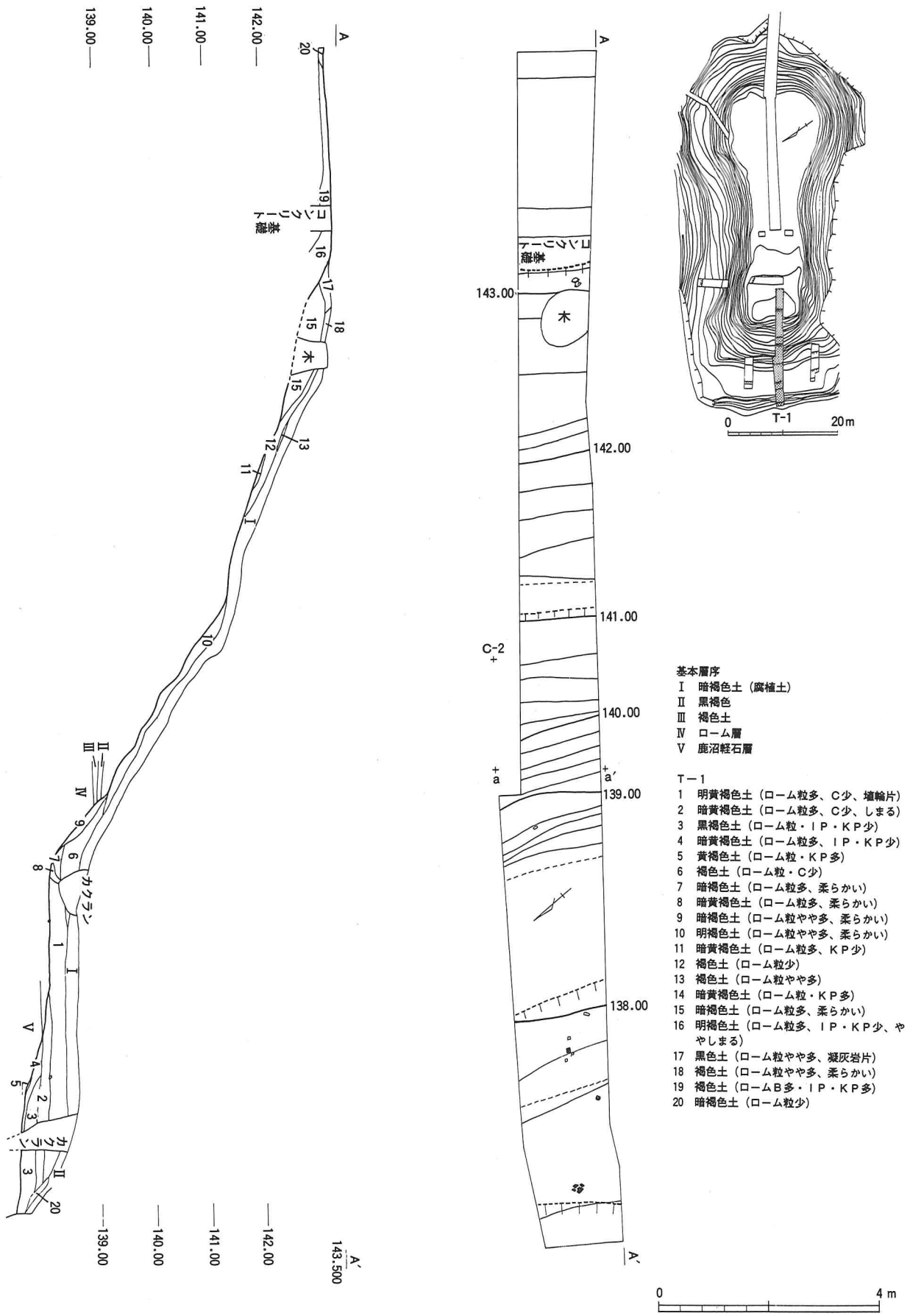
また、一部墳丘の断ち割りをした結果、整地面上から高坏が2個体並んで出土した（第35図参照、第35図中のa-a'は第33図a-a'と一致する）。高坏は2個体とも正立した状態で、主軸方向に並んで出土した。2つの高坏の間隔は16cmである。セクション図からわかるように、Ⅱの黒色地山層の上に10cm程の暗黄褐色土（4）を積み上げ、その上に高坏を裾え、高坏が倒れないようにでもしたかのように黒褐色土（3）で覆っている。その後、墳丘の盛り土がなされる。1と2はほぼ同様の層であるが、木の攪乱などの所為か2の層が柔らかかったため、一応分層しておいた。尚、部分的な断ち割りのため、この他にも土器が置かれている可能性が考えられる。

(T-2)

T-1の5m南に設定した。トレンチの長さは7mで、前方部の形状を把握するためのトレンチである。先にも触れたとおり、本来ならば前方部コーナー部分にトレンチを設定したいところであるが、かなりの削平を受けているためにこの位置に設定した。墳端部から30cm程の深さをもって急に立ち上がり、一端緩やかな傾斜をもって第1段平坦面に至る。第1段の幅は2.1mである。T-1との違いは、第1段平坦面が6、

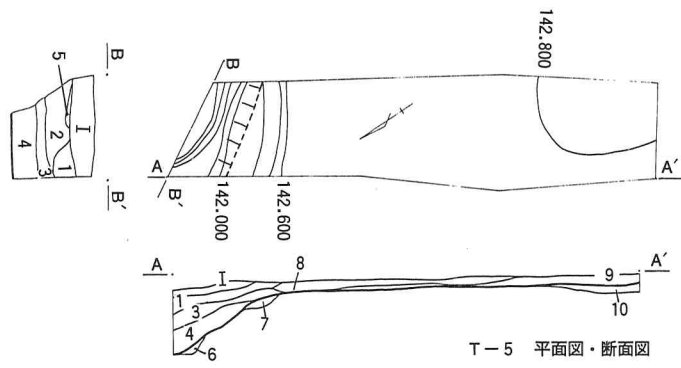


第32図 御蔵山古墳墳丘測量図

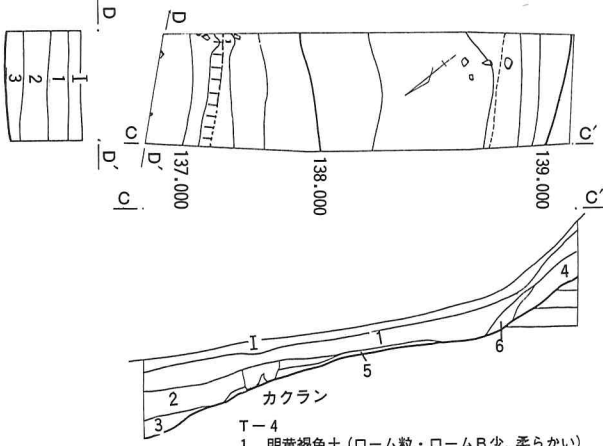


第33図 T-1平・断面図

- T-5
- 1 褐色土 (凝灰岩粒・C少)
 - 2 明褐色土 (ローム粒・凝灰岩粒・C少)
 - 4 暗褐色土 (C少)
 - 5 明褐色土 (ローム粒少)
 - 4 暗褐色土 (ローム粒・KP多)
 - 6 黒褐色土 (ローム粒、ロームB少)
 - 7 黄褐色土 (ローム粒・KP多)
 - 8 暗褐色土 (ローム粒、ロームB多)
 - 9 黄褐色土 (ロームB・KP多、凝灰岩粒)
 - 10 暗褐色土 (ローム粒、IP少)

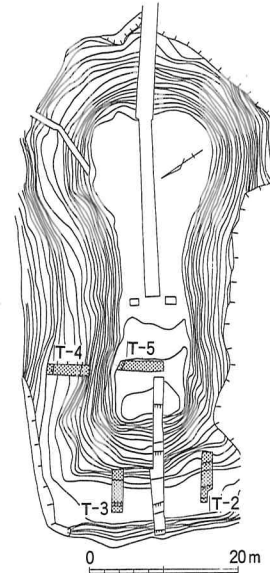


T-5 平面図・断面図



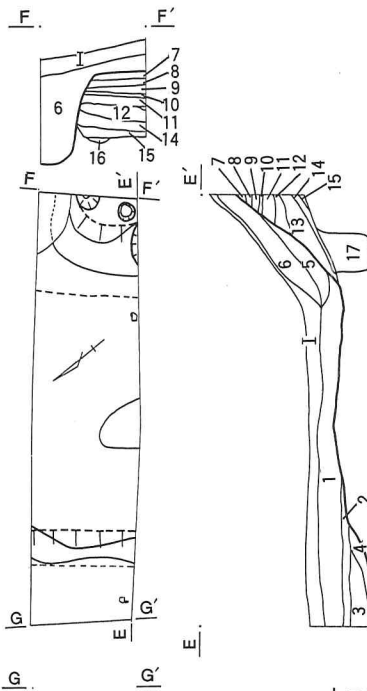
- T-4
- 1 明黄褐色土 (ローム粒・ロームB少、柔らかい)
 - 2 暗褐色土 (ローム粒・IP・C少)
 - 3 褐色土 (ローム粒やや多、IP少)
 - 4 黒褐色土 (ローム粒・IP・KP少、しまる)
 - 5 暗黄褐色土 (ローム粒・KP多)
 - 6 暗褐色土 (ローム粒少、柔らかい)

T-4 平面図・断面図



- T-2
- 1 暗黄褐色土 (ローム粒やや多、C・IP少)
 - 2 暗黄褐色土 (ローム粒やや多、埴輪片)
 - 3 黒褐色土 (ローム粒少、埴輪片)
 - 4 暗黄褐色土 (ローム粒多、IP・KP少)
 - 5 褐色土 (ローム粒やや多)
 - 6 暗黄褐色土 (ローム粒多)
 - 7 黄褐色土 (ローム粒多、柔らかい)
 - 8 暗黄褐色土 (ローム粒多、柔らかい)
 - 9 暗褐色土 (ローム粒やや多、柔らかい)
 - 10 黒褐色土 (ローム粒少)
 - 11 黄褐色土 (ローム粒・ロームB多)

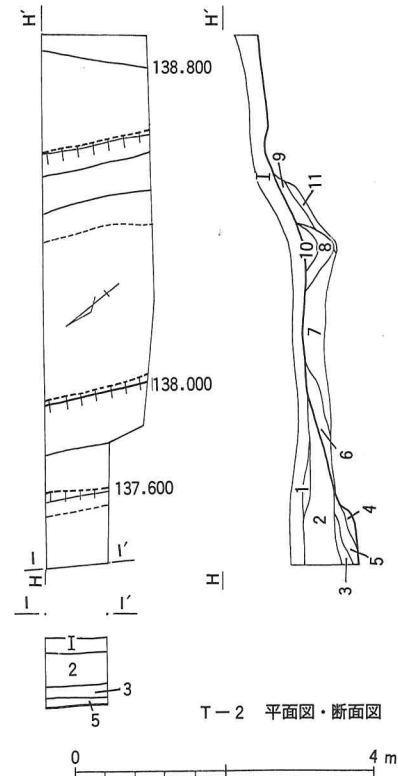
T-2 平面図・断面図



- T-3
- 1 明黄褐色土 (ローム粒多、C少、埴輪片)
 - 2 暗黄褐色土 (ローム粒多、C少、しまる)
 - 3 黒褐色土 (ローム粒・IP・KP少)
 - 4 褐色土 (KP少)
 - 5 暗褐色土 (ローム粒やや多、柔らかい)
 - 6 褐色土 (ローム粒・C少)
 - 7 黒褐色土 (柔らかい)
 - 8 褐色土 (小ロームB・IP少)
 - 9 明褐色土 (小ロームB微)
 - 10 暗黄褐色土 (ローム粒多)
 - 11 黒色土 (Cやや多)
 - 12 黒褐色土 (ローム粒少)
 - 13 黒褐色土 (ローム粒やや多)
 - 14 明黄褐色土 (ローム粒・小ロームB多)
 - 15 明黄褐色土 (SP主体)
 - 16 黄褐色土 (ローム粒多)
 - 17 黒褐色土 (ローム粒少、柔らかい)

- L = A・B = 143.100m
 C・E・F = 140.000m
 D = 138.200m
 G = 138.800m
 H = 139.300m
 I = 138.600m

T-3 平面図・断面図



T-2 平面図・断面図

第34図 各トレンチ平・断面図

7層のようなローム主体の盛土から形成されている点にある。尚、セクションからわかるように、8、10層を埋土に持つ溝状の遺構があり、第1段からの掘り込みであることから古墳に関連する溝の可能性が考えられる。しかし、埴輪の据えられたような状態は確認できなかった。

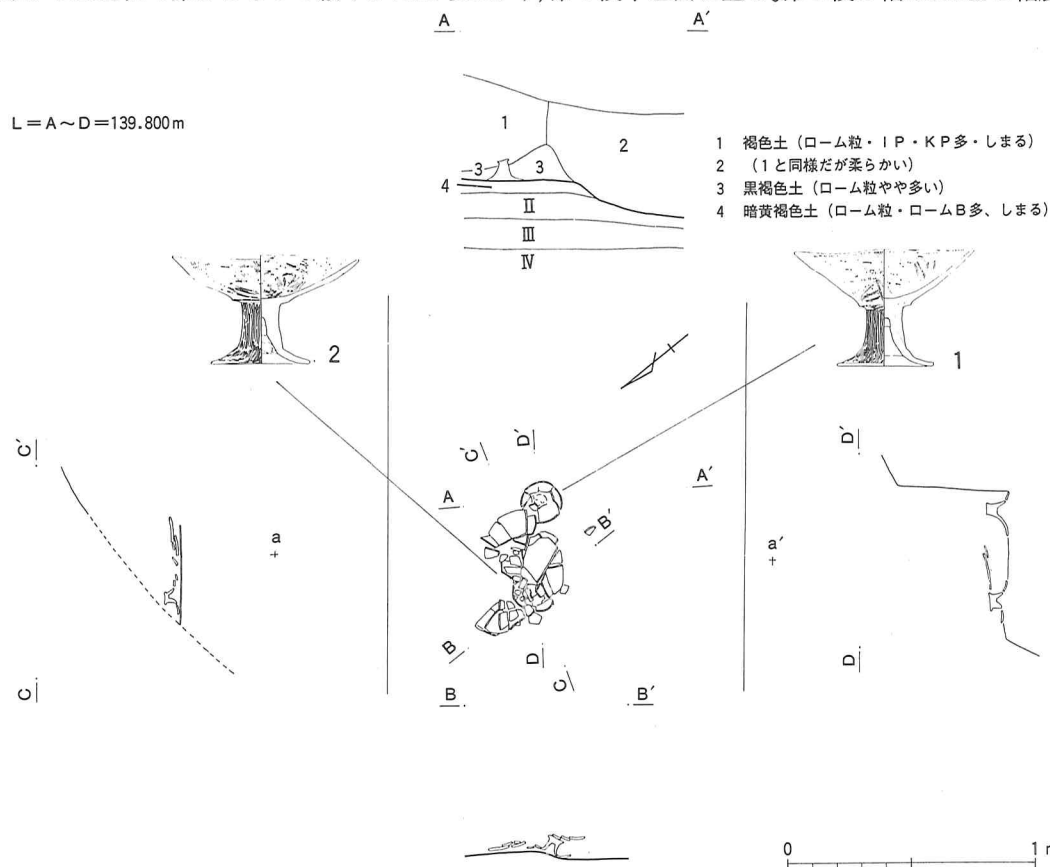
また、墳丘測量図からもわかるように、この部分でコンターが湾曲しており、墳丘が抉れている様子が窺える。トレンチ調査からも墳丘が削られている様子が観察できたことから、この部分は後世において改変を受けている部分と考えられる。

(T-3)

T-1の4m北に設定をした。トレンチの長さは5.7mで、前方部の形状を把握するためのトレンチである。ここも本来なら前方部コーナー部分にトレンチを設定したいところであったが、大きな木の切り株が邪魔をしていたためこの位置に設定した。墳端部から30cm程の深さをもって緩やかに立ち上がり、第1段平坦面に至る。第1段の幅は3mと先の2本のトレンチに比べるとやや幅がある。T-1同様ローム地山により形成される。第2段の傾斜は45°とかなり急傾斜である。墳丘北側には大きな穴がある(6層)。これは、埋土が非常に柔らかいことから後世の攪乱と考えられる。しかし、この他に、3つの穴が確認でき、これらは盛土下で見つかり、この部分についての盛土がセクション図からわかるように、かなり密に積まれていることから考えると、墳丘築造直前の構築物の跡の可能性が指摘できる。この部分は保存される部分なのでこれ以上の調査はしなかった。

(T-4)

T-5の3m北に設定をした。トレンチの長さは5.8mで、前方部の形状を把握するためのトレンチである。墳端部から30cm程の深さをもって緩やかに立ち上がり、第1段平坦面に至る。第1段の幅は3.9mと幅広いが、



第35図 T-1 断ち割り部分遺物出土状況図

先に見た3本のトレンチ程平坦ではなく、やや斜面側に傾斜している。T-1同様ローム地山により形成される。第2段の傾斜は32°とT-1とほぼ同様の傾斜である。標高138.900mまでが地山であり、その上から盛土となる。埴輪は第1段平坦面でやや大きめの破片が出土した。

(T-5)

T-1に直行させて設定した。トレンチの長さは6.25mで、墳頂部埋葬施設の有無の確認のために設定した。結論的には埋葬施設は確認できなかった。建て替え前の雷神社の整地層が9、10層である。35°程の傾斜で下に落ちる。

2 出土遺物

今回調査した5本のトレンチから、多数の埴輪片と若干の土師器、須恵器が出土した。また、先にも述べたように、T-1断ち割り部分からはほぼ完形の土師器高坏が2点出土した。

①土器

第36図1・2は墳丘断ち割り部分からの出土で、4は墳頂端で出土、それぞれのトレンチにおける覆土中の出土である。

1は、口径29.4cm、器高18.8cm、底径15.6cmの土師器高坏である。全体的に大形で、坏部は外面下端に明瞭な稜を有し、直線的に口縁部まで伸びる。脚部は中空柱状で、裾部において屈曲して大きく開く。坏部外面は、タテハケ後下半ヘラケズリ、さらに全体を横位のヘラミガキ、内面は、口唇部がヨコハケのみであるが、その外は入念な横位のヘラミガキを行っている。脚部外面は2段に縦位のヘラミガキを行っている。胎土は微砂粒を含むがかなり精緻で、焼成も良好、色調は赤褐色である。

2は、口径30.0cm、器高17.5cm、底径15.8cmの土師器高坏である。1とほぼ同形であるが、坏部は内湾しやや浅い。脚部は中空柱状で、裾部において屈曲して大きく開く、坏部外面は、タテハケ後全体を横位のヘラミガキ、内面はヨコハケ後入念なヘラミガキを行っている。脚部外面は2段に縦位のヘラミガキ後、裾部のみ横位のヘラミガキを行っている。胎土は砂粒、石英、赤色スコリアを含む。焼成は良好、色調は赤褐色である。

3は、須恵器器台片である。2条の沈線の上に長方形の透孔が穿たれる。全体的にカキ目痕がみられ、沈線下部に薄く波状文が施され、その後一部ナデ消されている。胎土に白色砂粒を含む。焼成は良好、色調は灰色である。T-1出土である。

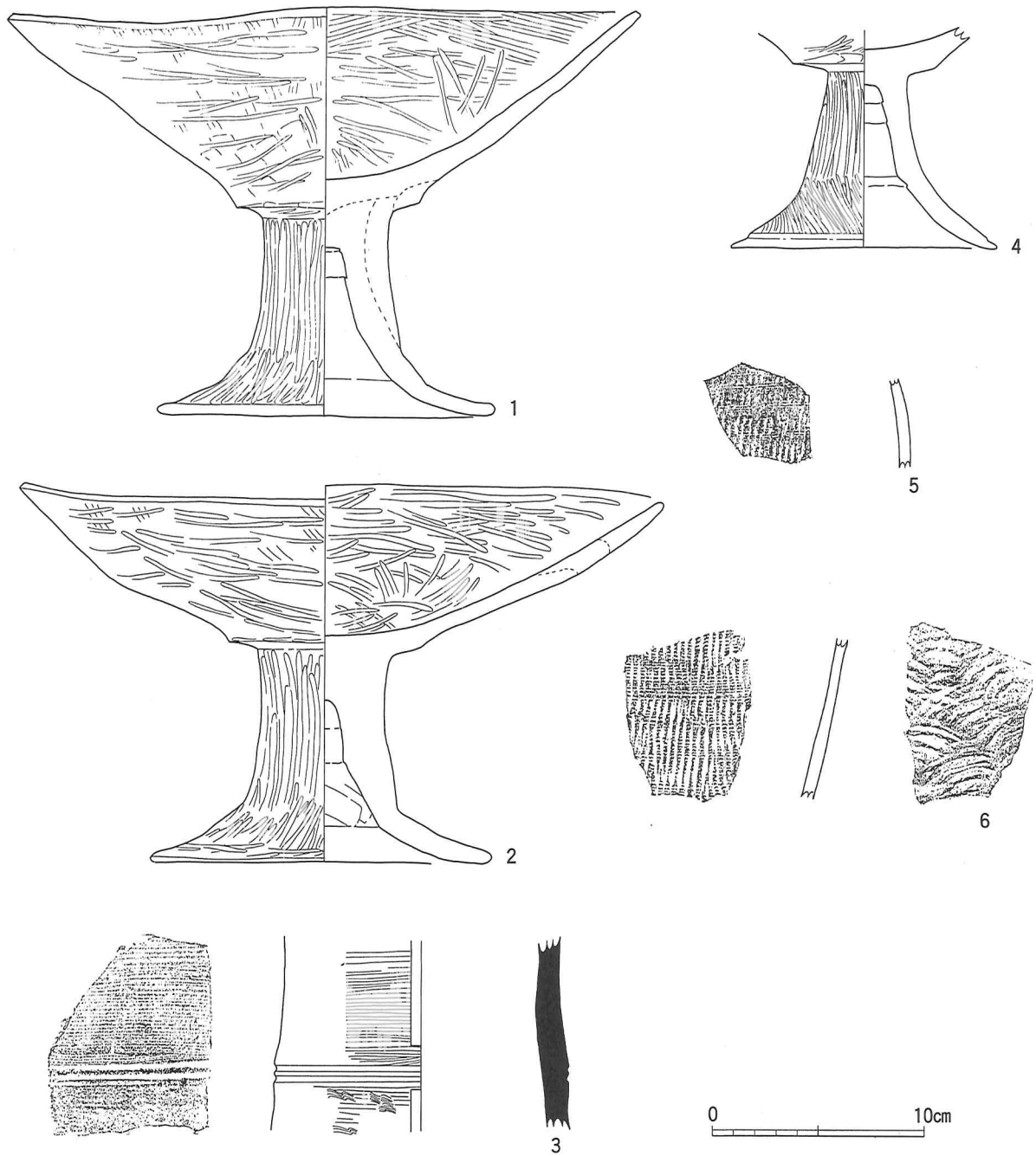
4は、底径12.5cmの土師器高坏である。1、2に比べると小形であるが、器形は酷似する。但し、脚裾部端が微妙に有段となる。坏部外面は、ヘラケズリ後入念な横位のヘラミガキ、内面は、基本的に入念なヘラミガキであるが、器面は荒れている。脚部外面は2段に縦位のヘラミガキを行い、裾部のみヨコナデ。胎土は石英、輝石を含む。焼成も良好、色調は褐色である。

5は、須恵器甕片である。薄手で、格子ふう叩目文後カキ目、内面同心円文後ナデ消している。胎土に白色砂粒を含む。焼成は良好、色調は灰色である。T-2出土である。

6は、須恵器甕片である。薄手で、格子ふう叩目文後カキ目、内面同心円文。胎土は精選され、焼成は良好、色調は灰色である。T-4出土である。

②埴輪

埴輪は、円筒埴輪がほとんどで、若干朝顔形埴輪の破片が見られる。今回の調査以前において『宇都宮市



第36図 御蔵山古墳出土土器実測図

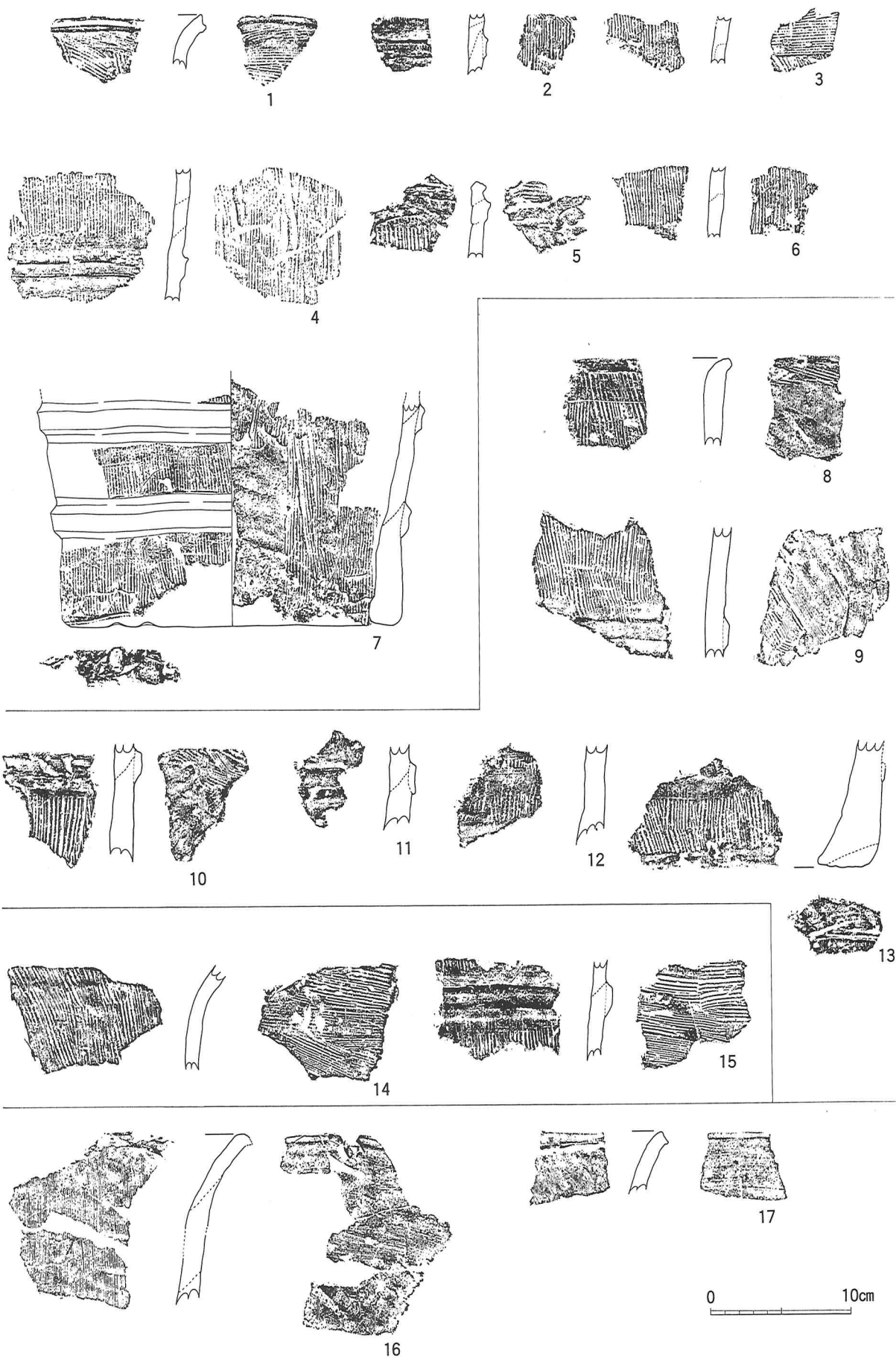
史』で、朝顔形埴輪の存在が紹介されており、突帯は6条、断面台形を呈し高く、透孔は円形であることがわかる。今回、ほとんどが破片であるため全体像のわかるものはないが、次のような点に注意して観察を行った。

(口縁部の形態)

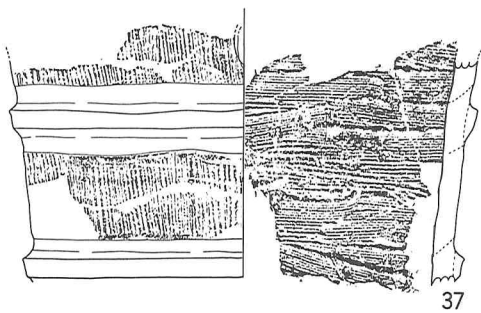
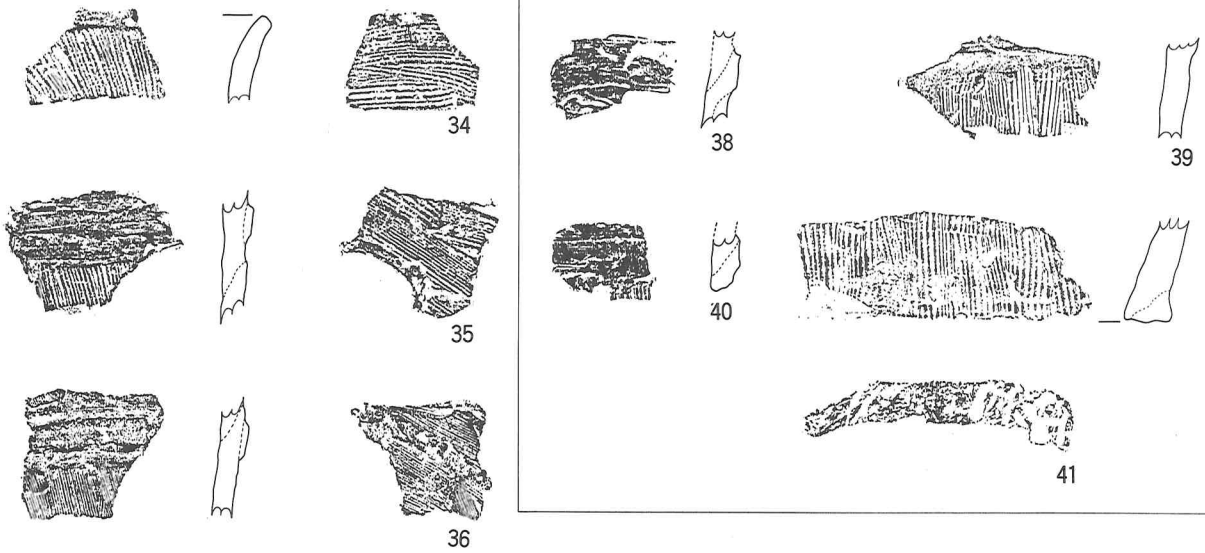
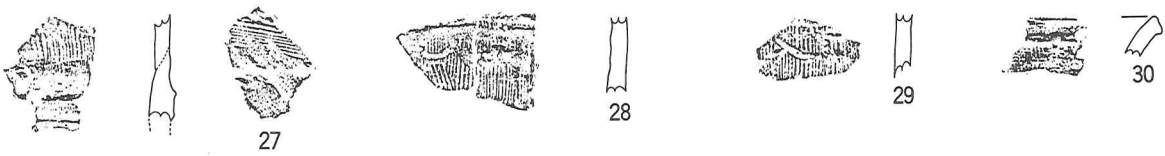
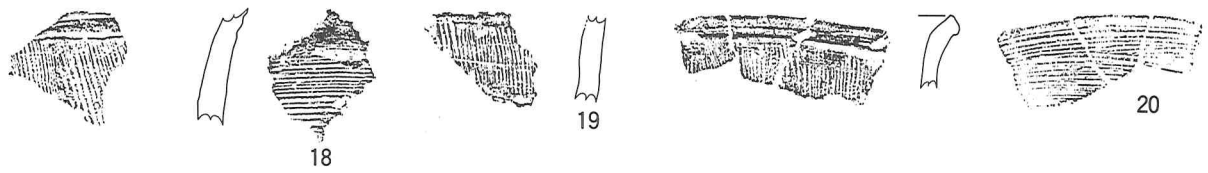
- I 口縁部が直立し、口唇部を外方に肥厚させるもの。
- II 口縁部が緩く外反し、口唇部を摘まみ出すもの。
- III 口縁部が緩く外反し、口唇部を摘まみ出さないもの。

(突帯の形態)

- A 断面台形のもの。
- B 正五角形を線対称軸で2等分したような断面のもの。

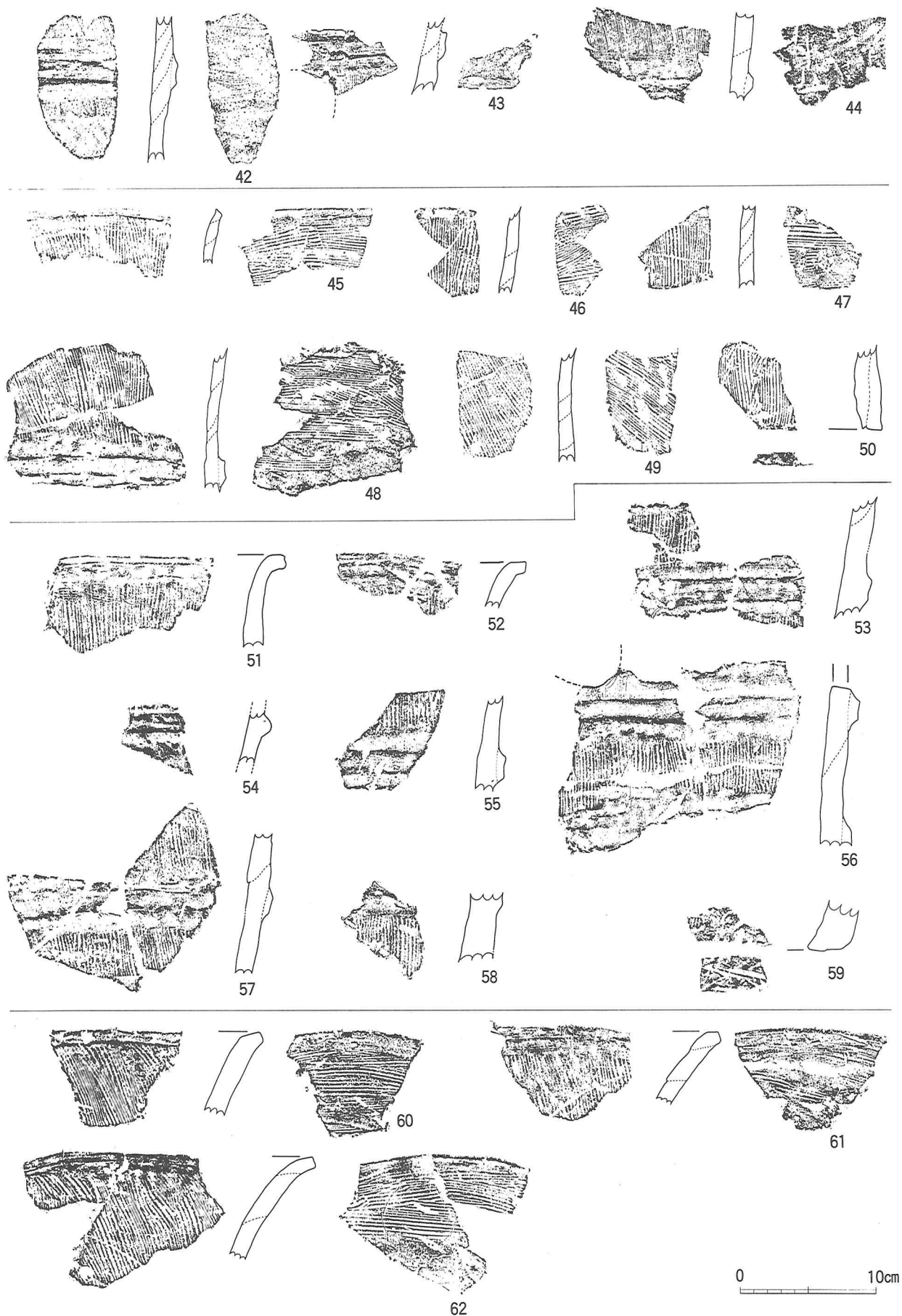


第37图 御藏山古墳埴輪実測図(1)

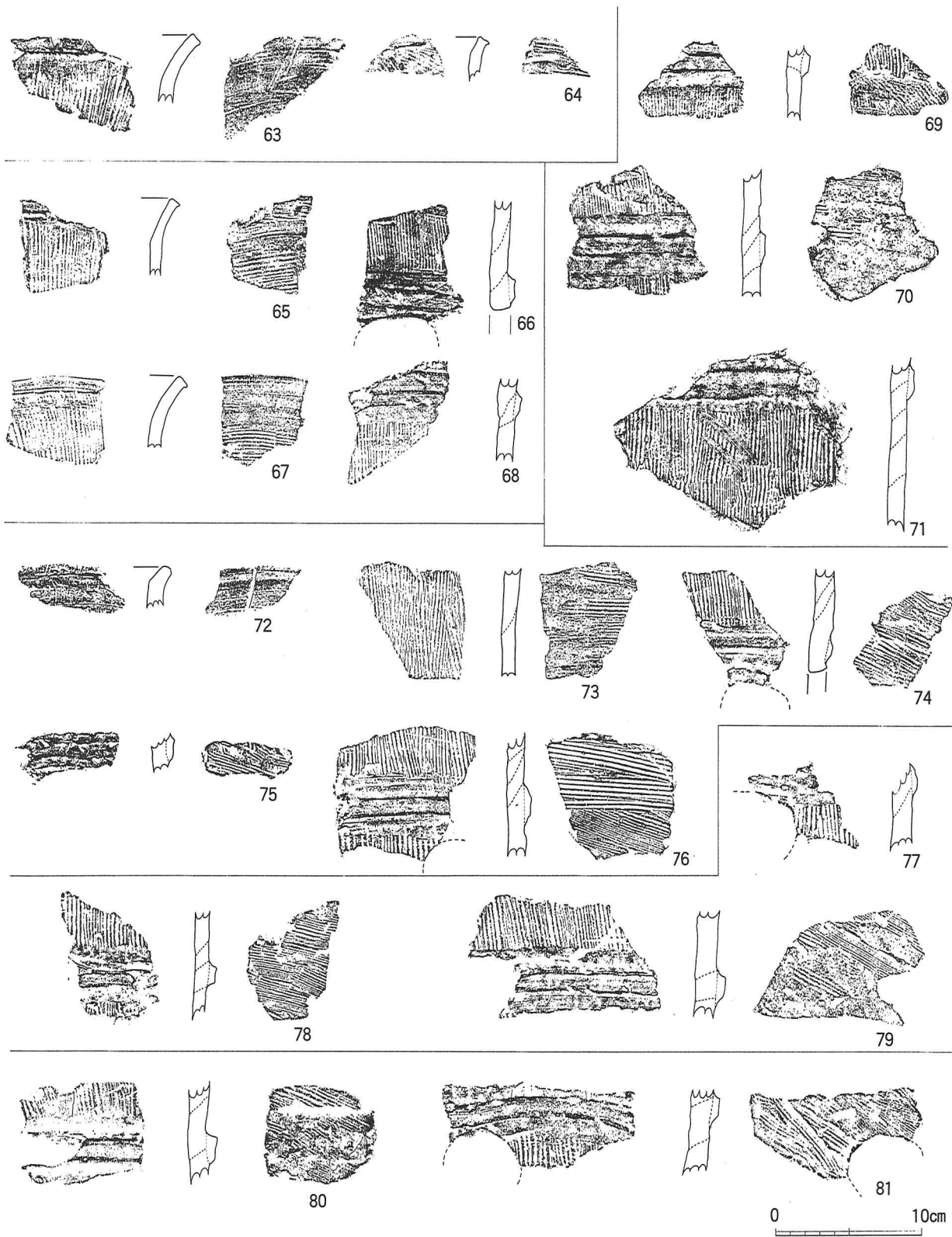


0 10cm

第38図 御蔵山古墳埴輪実測図(2)



第39图 御藏山古墳埴輪実測図(3)



第40図 御藏山古墳埴輪実測図(4)

C 断面三角形のもの。 D 断面半円形のもの。

(調整の特徴)

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| a 外面は粗い縦ハケ一次調整, 内面ナデ | d 外面はやや粗い縦ハケ一次調整, 内面ハケ後ナデ |
| b 外面はやや粗い縦ハケ一次調整, 内面ハケ | e 外面縦ハケ後縦ヘラケズリ, 内面ハケ |
| c 外面は細かい縦ハケ一次調整, 内面ハケ | f 外面ヘラナデ, 内面ヘラナデ |

(胎土)

いずれもほぼ同様な胎土で、微細な白色粒、黒色粒を含む。但し、個体によって黒色粒をやや多く含むものがみられ、やや多いもの①、少ないものを②とする。

以上の分類に従って、以下観察表にまとめてみた。尚、接合関係は見られないが、以上の分類及び胎土、焼成、色調の点で同一個体と考えられるものに関しては、図版上で、近接して割り付けを行った。例えば、1～7までは、突帯、調整等の共通性から同一個体と判断できる。尚、ヘラ記号のあるものは、第41図にまとめて掲載した。

③表採埴輪

第42図で紹介する資料は、吉羽和朗氏が御蔵山古墳で表採し、栃木県埋蔵文化財センター部長の大金宣亮氏が保管されていたものを両氏のご好意により紹介させて頂いたものである。また、埴輪の実測は同埋蔵文化財センターの大橋泰夫氏の作成によるものであることを付け加えさせて頂く。

④縄文土器

1～4は古墳の覆土中から出土した。

1は、外面上部に2段の刺突文、その下は横位の条痕文、内面は縦位の条痕文。胎土に白色小石を多く含む。焼成は普通で、色調は乳白色である。

2は、1と同一個体と考えられ外面は横位の条痕文、内面は縦位の条痕文。胎土に白色小石を多く含む。焼成は普通で、色調は乳白色である。

3は、外面2本の波状文が上下に施され、その間を櫛状工具による刺突文を施す。胎土に金雲母、砂粒を多く含む。焼成は普通で、色調は暗赤褐色である。

4は、外面半截竹管による押引文が施される。胎土に小石、砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は褐色である。

⑤その他の遺物

1～4は、墳丘測量に先立つ下草刈りの際に表採した後世の遺物である。

1は、土師器胞衣壺蓋である。口径13.7cm、器高2.9cmを測る。口縁部にかえりを持ち、天井つまみ部分に「寿」の字が刻印されている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好、色調は褐色である。

2は、土師器胞衣壺である。底径6.9cmを測る。ロクロ挽きで、底面は上げ底でナデ仕上げ。胎土に砂粒を含み、焼成は良好、色調は赤褐色である。

3は、土師器胞衣壺である。底径6.4cmを測る。ロクロ挽きで、底面回転糸切り後ヘラケズリ、胴部下端回転ヘラケズリ。胎土に砂粒を含み、焼成は良好、色調は褐色である。

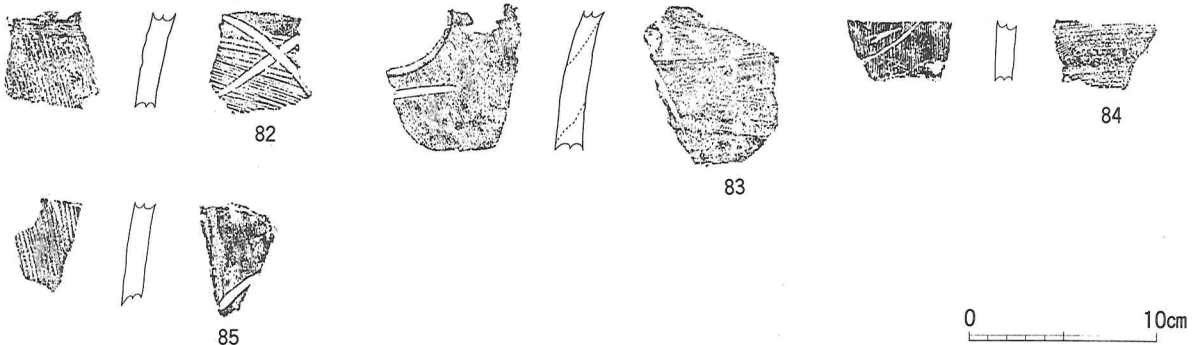
4は、土師器坏(カワラケ)である。口径6.6cm、器高1.3cm、底径4.0cmを測る。ロクロ挽きで、底面回転糸切り。胎土に砂粒を含み、焼成は不良、色調は褐色である。

No.	口縁部の形態	寸法 (cm)	突帯 (cm)		透孔	調整の特徴 (括弧内の数字は2cm当たりの本数)	色調	焼成	胎土	出土位置	備考
			形態	高さ							
1	II					b (10)	乳白色	良好	①	T-1	
2			A	0.4		b (10)	乳白色	良好	①	〃	
3						b (10)	乳白色	良好	①	〃	
4			B	0.4		b (10)	乳白色	良好	①	〃	
5			B	0.3	円形	b (9)	乳白色	良好	①	〃	
6						b (10)	乳白色	良好	①	〃	
7		底径 24	B	0.4		b (10) 底部端に2本の沈線が巡る。	乳白色	良好	①	〃	
8	I					d (8)	淡褐色	良好	①	T-2	
9			A	0.5		d (8~9)	淡褐色	良好	①	T-3	
10			A	0.5	円形	d (7~8)	淡褐色	良好	①	T-5	
11			A	0.4	円形	a	淡褐色	良好	①	T-1	
12						d (8)	淡褐色	良好	①	〃	
13						a (8~9) 底部端に2本の沈線が巡り、その後ナデ	淡褐色	良好	①	〃	
14						b (10)	淡褐色	良好	①	〃	
15			A	0.5		b (9~12)	淡褐色	良好	①	T-2	
16	II					c (17~21)	乳白色	良好	①	T-1	
17	II					c (17~23)	乳白色	良好	①	〃	
18						b (10~11)	褐色	良好	①	〃	
19						a (10)	褐色	良好	①	T-4	
20	III					b (10)	褐色	良好	①	T-1	
21						d (10~11)	褐色	良好	①	〃	
22						a (10)	褐色	良好	①	〃	
23						a (10)	褐色	良好	①	〃	
24						a (10)	褐色	良好	①	〃	
25						a (8~10)	褐色	良好	①	〃	
26						a (10~11)	褐色	良好	①	T-1	
27			A	0.4		d (9)	乳白色	良好	①	T-2	
28						b (11)	乳白色	良好	①	T-1	
29						a (11)	乳白色	良好	①	〃	
30	II					b	乳白色	良好	①	〃	
31			A	0.6		a (10)	乳白色	良好	①	〃	
32			A	0.4		a	乳白色	良好	①	T-2	
33						a (9)	乳白色	良好	①	〃	
34	III					b (8~9)	褐色	良好	①	T-1	
35			A	0.4		b (10~11)	褐色	良好	①	〃	
36			A	0.3		b (15)	褐色	良好	①	〃	
37			A	0.5	円形	b (10~12)	褐色	良好	①	〃	
38			A	0.3		a	暗褐色	良好	①	〃	
39			A	0.3		a (10)	暗褐色	良好	①	〃	
40						a (8~11)	褐色	良好	①	〃	
41		底径 30				a (8~10)	褐色	良好	①	T-2	
42			A	0.3		c (19~20)	淡褐色	良好	①	T-1	
43			A	0.3	円形	c (19~20)	淡褐色	良好	①	〃	
44			A	0.6		c (15~17)	淡褐色	良好	①	T-4	
45	III					b (8~10)	乳白色	良好	①	T-1	
46						b (10~12)	乳白色	良好	①	〃	
47						b (9~11)	乳白色	良好	①	〃	
48			A	0.3		b (10~12)	乳白色	良好	①	〃	
49						b (10)	乳白色	良好	①	〃	
50						a (10~11)	乳白色	良好	①	〃	
51	I					d (8)	乳白色	良好	①	〃	
52						d (8)	乳白色	良好	①	T-1 T-3	
53			A	0.4		a (9)	乳白色	良好	①	T-1	
54			D	0.6		a	乳白色	良好	①	〃	
55			A	0.5		a (10)	乳白色	良好	①	〃	
56			A	0.5		a (8~10)	乳白色	良好	①	T-1 T-3	
57			A	0.3		a (8~10)	乳白色	良好	①	T-1	
58			A	0.4		a (8)	乳白色	良好	①	T-5	

第7表 御蔵山古墳埴輪観察表(1)

No.	口縁部の形態	寸法(cm)	突帯(cm)		透孔	調整の特徴(括弧内の数字は2cm当たりの本数)	色調	焼成	胎土	出土位置	備考
			形態	高さ							
59						a	乳白色	良好	①	T-1	
60	Ⅲ					b(7~11)	褐色	良好	①	〃	
61	Ⅲ					b(8)	褐色	良好	①	表採	
62	Ⅲ					b(8)	褐色	良好	①	T-1	朝顔形
63	Ⅱ					b(9)	乳白色	良好	①	T-2	
64	Ⅱ					b	乳白色	良好	①	〃	
65	Ⅱ					b(9)	褐色	良好	①	T-4	
66			A	0.3	円形	a(10)	褐色	良好	①	〃	
67	Ⅱ					b(9)	褐色	良好	①	〃	
68			B	0.3		a(9~10)	褐色	良好	①	〃	
69			A	0.3		d(10)	灰褐色	良好	②	〃	須恵質
70			A	0.3		d(10)	灰褐色	良好	②	〃	須恵質
71			A	0.3		b(9~10)	灰褐色	良好	②	〃	
72	Ⅲ					b	褐色	良好	①	T-4	
73						b(9~10)	褐色	良好	①	〃	
74			B	0.3	円形	b(9~10)	褐色	良好	①	〃	
75			B	0.3		b	褐色	良好	①	T-2	
76			A	0.3	円形	b(9~11)	褐色	良好	①	T-4	
77			D	0.3	半円	a(7)	淡褐色	良好	①	〃	
78			A	0.5		b(8~13)	淡褐色	良好	①	T-1	
79			A	0.5		d(8~11)	淡褐色	良好	①	T-4	
80			B	0.8		b(7~11)	乳白色	良好	①	〃	
81			B	0.6	円形	b(7~11)	乳白色	良好	①	〃	

第8表 御蔵山古墳埴輪観察表(2)



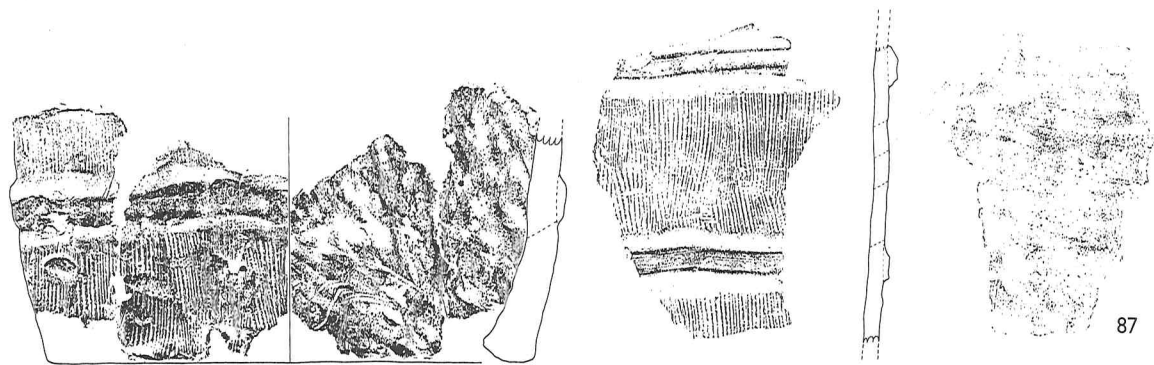
第41図 御蔵山古墳線刻埴輪実測図

No.	口縁部の形態	寸法(cm)	突帯(cm)		透孔	調整の特徴(括弧内の数字は2cm当たりの本数)	色調	焼成	胎土	出土位置	備考
			形態	高さ							
82						b(10) 外面にヘラ記号「×」あり	褐色	良好	②	T-1	
83					円形	c(18~20) 外面にヘラ記号「∟」あり	淡褐色	良好	②	〃	
84						c(21) 外面にヘラ記号「ノ」あり	淡褐色	良好	②	T-2	
85						a(10) 内面にヘラ記号「/」あり	淡褐色	良好	②	〃	

第9表 御蔵山古墳線刻埴輪観察表

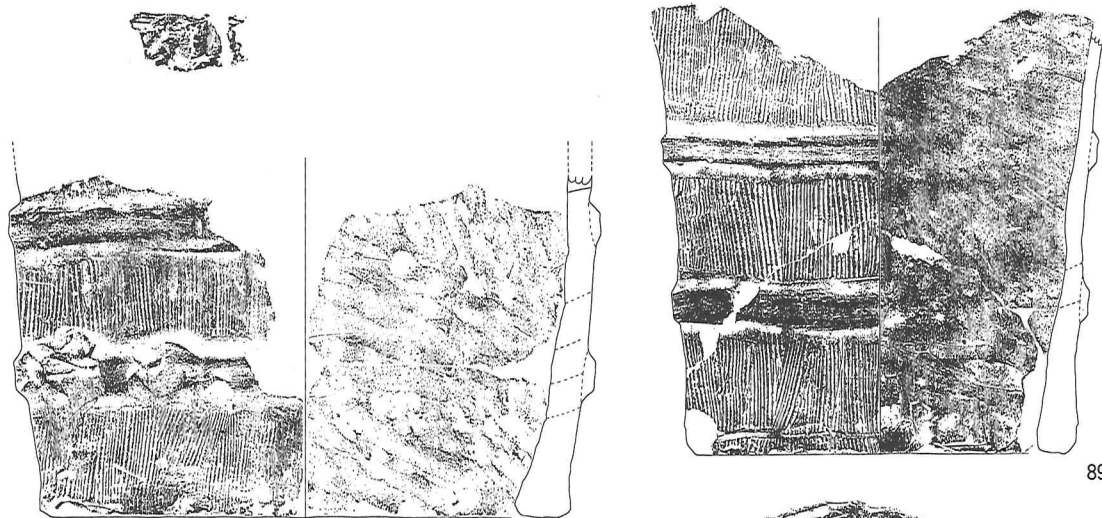
No.	口縁部の形態	寸法(cm)	突帯(cm)		透孔	調整の特徴(括弧内の数字は2cm当たりの本数)	色調	焼成	胎土	出土位置	備考
			形態	高さ							
86		底径29.6	A	0.3		a(9) 最下段突帯に指頭圧痕あり	乳白色	良好	①	表採	
87		底径32.0	A	0.6	円形	a(9) 最下段突帯に明瞭な指頭圧痕あり	乳白色	良好	①	表採	第2段に透孔あり
88			A	0.5		a(10~12)	暗赤褐色	良好	②	表採	
89		底径23.0	A	0.5		a(7~9)	褐色	良好	②	表採	

第10表 御蔵山古墳表採埴輪観察表



86

87

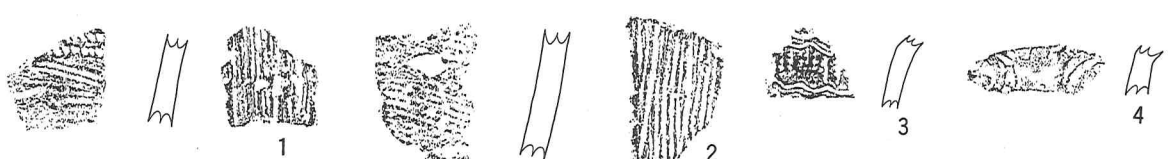


88

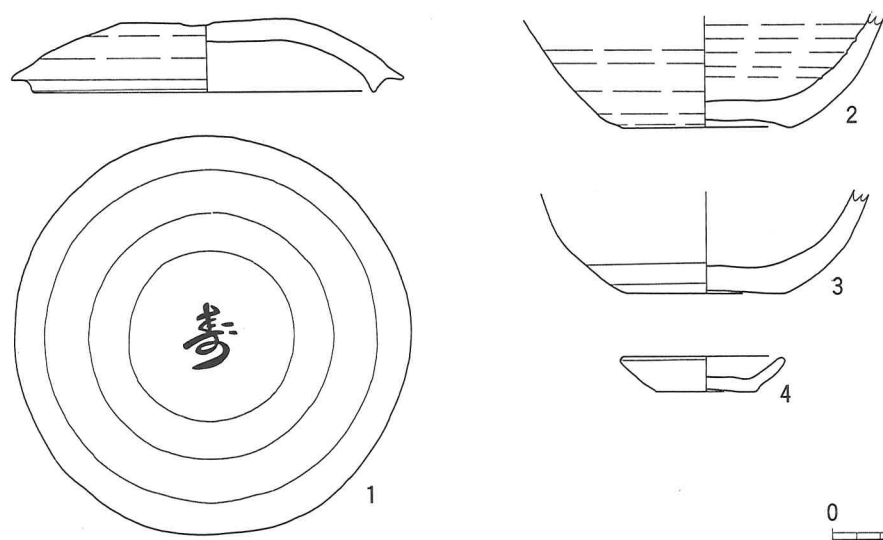
89



第42図 御蔵山古墳表採埴輪実測図



第43図 縄文土器実測図



第44図 その他の遺物実測図



IV まとめ

1 埴輪について

今回の調査は前方部側の社の建て直しに際しての調査ということで極めて限定された資料であることを、まずお断りしておく。

調査の結果、全体像のわかる埴輪は確認できなかったが、種類としては円筒と朝顔形埴輪で、形象埴輪は確認できなかった。その中でも数の多いのは円筒埴輪で、以下少ない資料の中からわかったことをまとめる。

調査結果のところでも述べたように、調整、色調、胎土等の点から、ほぼ同一個体と想定出来るものが20個体分確認できる。この他にも組み合わせの考えられない破片が多数あるので、実際に墳丘に立てられていた埴輪の数はかなり多いものと考えられる。尚、第7～9表からわかることは、次のとおりである。

- ①大型で、筒形あるいは基底部からわずかに開くタイプのプロポーション。
- ②突帯の形状はAが73%、Bが23%、Cが1%、Dが3%とほとんど台形を基調とするが、その高さは0.3～0.5cmと低い。突帯数は少なくとも3条以上。突帯間の幅が狭いことから多条の可能性が高い。
- ③透孔はほとんど円形で、第2突帯と第3突帯の間である第2段目に穿たれる。
- ④調整は外面が縦ハケ一次調整でやや粗いものが多く、口縁部内面はすべてにおいて横ハケが施され、それ以下はナデ、ハケ後ナデ、ハケの3タイプに分けられる。
- ⑤色調は、褐色、乳白色、淡褐色、暗褐色、灰褐色の5色に分けられる。中でも灰褐色のものは須恵質のものと考えられる。
- ⑥内面及び外面にヘラ記号の見られるものがある。

以上6点から、この埴輪の年代を考えてみる。本墳周辺の3条以上の突帯を持つ古墳は、笹塚古墳、塚山古墳、塚山西古墳、塚山南古墳、牛塚古墳、八龍塚古墳、権現山古墳等が挙げられる。これらと本墳出土の埴輪を比べてみると、基底部の高さが他の埴輪に比べて低いことがわかる。塚山古墳で17cm、塚山西古墳15cm、塚山南古墳16cm、牛塚古墳13.5cm、八龍塚古墳12cm、権現山古墳15cmと10cm以上であるのに対し、本墳の埴輪は長いもので9cmで、平均すると7.6cmと低い事が分かる。この点に着目して類似を集めてみると、佐野市中山8号墳（4条以上）が10cm、小山市琵琶塚古墳（4～5条）が8～9cm、群馬県前二子古墳（4条）が9～11cm、中二子古墳（5条）が6～9cm、後二子古墳（4条）が6～9cm、七興山古墳（7条）9～11cmと多条のものが多い。このことから本墳出土の埴輪も4条もしくはそれ以上の可能性が指摘できる。尚、これらのほとんどは6世紀代の古墳である。

以上の結果及び栃木県における埴輪の変遷に関しての石川、森田、小森氏による変遷試案（石川・森田・小森1985）からIV 5・6期の特徴と符合することなどから考えて、6世紀前半代の位置付けができる。

尚、今回の調査において埴輪の樹立位置を確認することは出来なかったが、各トレンチからの出土が見られ、多くは墳丘1段目から周溝にかけて出土した。墳頂までのトレンチは、T-1、T-5のみであり、後円部にトレンチを入れていないことから、墳頂部及び2段目に埴輪が樹立されていたかは不明であるが、1段目に埴輪が樹立されていた可能性は考えられる。

2 出土土器について

古墳に関係すると考えられる土器は、墳頂及び盛土内から土師器高坏、須恵器器台・甕が出土している。

まず、墳丘築造に際しての整地面に置かれたと考えられる高坏について考えてみる。2点ともほぼ同様の形態であり、その形態的特徴を挙げれば、①大形である、②坏部下端に稜を持つ有稜高坏である、③脚部が柱状中空であるという事である。①以外の②③だけを取ってみれば、宇都宮市雷電山S I-01(今平 1994)、鹿沼市稲荷塚第2号住(藤田 1987)などに類似する。津野氏によればこのタイプの高坏は5世紀末～6世紀前葉にかけて河内・都賀地区で見られるという(津野 1994)。問題なのはこれが大形という点である。器高だけをみれば、雷電山S I-01出土のもの1.4倍、稲荷塚第2号住のもの1.8倍になる。しかし、概して祭祀用の土器は日常什器との差を出すために小さかったり大きかったりするケースが多いことは衆知の通りである。本墳出土のものについても同様のことが言えるのではないだろうか。尚、事実記載のところでも述べたように、赤彩ではないが色調は赤褐色であり、このような色が出る粘土を選んで使ったものと考えられる。

因みに、このような墳丘下出土の土器に関して、小出氏は「古墳築造の場をあらゆる地霊から開放する重要な儀礼」に使用されたものと位置付けている(小出 1981)。

これに対し、坏部を欠くがほぼ同じタイプの高坏の脚部が墳頂部から出土している。ただし、大きさは通常の大きさである事は、注意すべき点である。脚部の作り方及び調整方法が似通っていることからほぼ同時期の所産と考えられる。問題はその出土位置で、この古墳の埋葬施設が竪穴系なのか横穴系なのか未だ不明であるが、仮に竪穴系の埋葬施設とした場合、供献用の土器の可能性を指摘できる。

須恵器器台は、破片であるためはっきりとしたことは言えないが、波状文が2段に施されるが雑であり、透孔間の沈線もシャープさが無いことからMT15～TK10併行期のものと考えられる。

以上、埴輪と出土土器の検討から、古墳の築造時期は6世紀前葉段階に位置付けられる。

3 墳形について

もう一度、今回の調査で判ったことをまとめてみると、全長約62m、後円部径約35m、前方部長約27m、後円部現存高約4.8m、前方部現存高約5.4mの前方後円墳である。また、地山を削りだして墳丘1段目を造り、2段目以上は盛土により築造されている。尚、断面図からわかるように標高141m地点で幅0.6mの平坦面が確認できることからこの古墳は三段築成と考えられる。三段築成の古墳はこの付近では宇都宮市塚山古墳(全長98m)、小山市琵琶塚古墳(全長123m)等と大形の古墳に採用される。本墳は大形ではないが、1段目を地山の削り出しにより作りだす築造技法は塚山古墳と近似する(石部 1990)。また、第45図は古墳の復元図であるが、石部氏・宮川氏らの築造企画における6区型にあたる^{注①}^{注②}。斎藤氏によれば、塚山古墳も6区型であるという。この点でも共通点が見い出せる。塚山古墳はその後塚山西古墳→塚山南古墳という流れがあるが、この2古墳は帆立貝式前方後円墳であり、時期的には塚山南古墳が築造された後に本墳が築造されたと考えられる。塚山古墳群の衰退の裏には、県南の小山市域の摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳という県内最大級の古墳の築造、所謂首長権の交替があったものと考えられるが、宇都宮という小地域における首長権の移動は明らかに塚山古墳群を中心とした市南部から現在の市の中心部及び北部に移って行った。このような流れの中でのキーポイントとなる古墳が本墳である。

本墳のもう1つの特徴は所謂「剣菱形」と呼ばれる前方部を持つことである。これは石部氏らにより提唱

された(石部他 1979)ものであるが、このような墳形をとるものとして畿内では、河内大塚山古墳、今城塚古墳が挙げられる。本県でも摩利支天塚古墳(岩崎 1983)がこの墳形との指摘があり、また、近年刊行された群馬県前二子塚古墳の復元図(前原 1993)を拝見すると同様の墳形に見てとれる。本墳を含めすべて6世紀前半代の古墳であることは示唆的で、今後類例の増加が見られればこの時期の前方後円墳の1つの表徴ととらえることができないだろうか。

(参考文献)

石部正志・田中英夫・宮川渉・堀田啓一 1979 「畿内大形前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89 古代学研究会

石部正志・阿部知己・斎藤恒夫他 1990 「塚山古墳第1次外形確認調査概報 付 測量調査報告」『峰考古』第8号 宇都宮大学考古学研究会

石川 均・森田久男・小森哲也 1985 「栃木県における埴輪の諸問題」『埴輪の変遷—普遍性と地域性—』群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究所

岩崎卓也他 1983 『摩利支天塚古墳』 小山市教育委員会

小出義治 1981 「祭祀と土器」『神道考古学講座』第三卷原始神道期二 雄山閣

今平利幸 1994 『雷電山遺跡』 宇都宮市教育委員会

津野 仁 1994 「栃木県における6・7世紀の土器様相」『東国における律令制成立までの土器様相とその歴史的動向』 東国土器研究会第4回研究集会

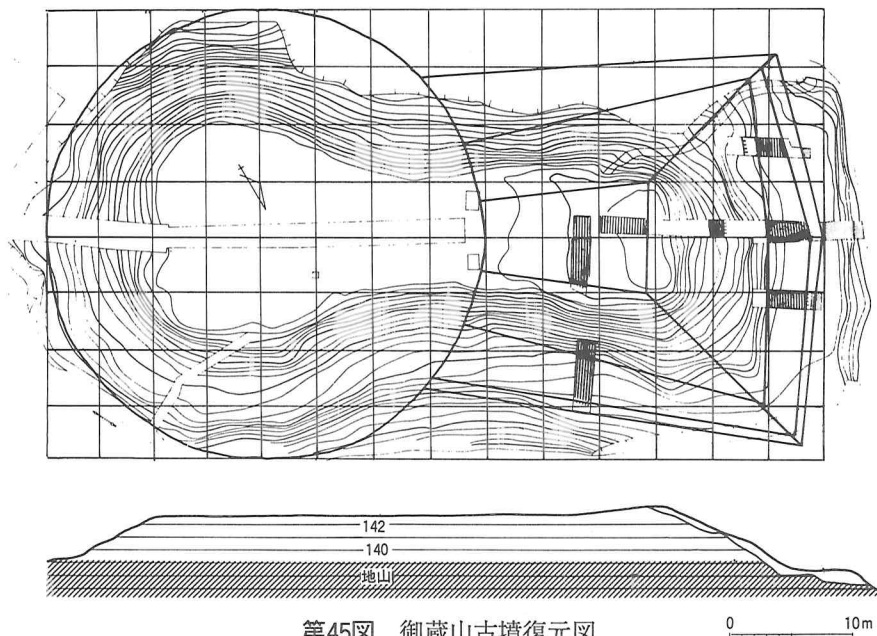
藤田典夫 1987 『稻荷塚・大野原』 (財)栃木県文化振興事業団

前原 豊 1993 『前二子古墳』 前橋市教育委員会

(注)

①この他に、前方後円墳の型式学的研究をなされている上田宏範氏の分類でみると、後円部直径：前方部後長：前方部前長=6：2：3のD型式となり、これは、河内大塚古墳や今城塚古墳と同型式となる。上田宏範『前方後円墳〈増補新版〉』1996(株)学生社

②斎藤恒夫氏よりご教示いただいた。



第45図 御蔵山古墳復元図

0 10m

V 御蔵山古墳と古棺記 — 栃木県考古学史の一断面 —

1 まえがき

県庁舎東側の御蔵山から八幡山に至る宇都宮丘陵の南端部は、宇都宮市街地の中心近くにありながら豊かな緑が残り、八幡山公園などの施設が市民生活に潤いを与えている。

宇都宮丘陵には多くの古墳があり、本県の古墳時代を研究する上で、重要なフィールドになっている。御蔵山古墳は、宇都宮丘陵の南端部にあり、都市化された市街地の一角に残る数少ない古墳であり、比較的規模の大きな前方後円墳である。御蔵山古墳は、早い時期から栃木県の考古学研究史に登場し、多くの著作物で紹介されてきたが、今回の確認調査に至るまで、実態は正確に把握されていなかった。特に、現在、雷神社参道の脇に建てられている「古棺記」と御蔵山古墳の関係は、御蔵山古墳とそれを中心に分布していた古墳群を考えるうえで、重要な手掛かりであるにもかかわらず、誤認された事柄が事実として定着しつつある。このことは考古学研究史ばかりでなく、御蔵山古墳群を検討する上でも大きな問題である。

本稿では、石棺・古棺記・御蔵山古墳の三者についての事実関係を明らかにして誤りを訂正し、御蔵山古墳を中心に広がっていた古墳群を検討するための基礎資料としたい。

2 広がった誤認

宇都宮市が、市制80周年を記念して昭和50年度から編纂を開始した『宇都宮市史』は、昭和54年（1979）に原始・古代編が刊行された。古墳時代を担当した私は、「第2章 考古学上からみた宇都宮」の「第4節 宇都宮の古墳時代」で御蔵山古墳をとりあげ、神風仙人（白井光太郎）が発表した「下野宇都宮にて掘り出せし石棺及び古器物」（註1）と、その中で引用されている「石棺考」をもとに、御蔵山古墳は「明治17年の県庁舎建設に際して墳丘をかなり削除しており、保存度はきわめて悪い。この際墳頂下約1mの地点より石棺1・刀子1・管玉10・丸玉6・小玉10が出土している」と述べるとともに、「下野宇都宮にて掘り出せし石棺及び古器物」に掲載されている石棺や出土遺物のスケッチを転載した。

その後昭和58年に刊行された『宇都宮市埋蔵文化財等遺跡詳細分布確認調査報告書 宇都宮の遺跡』も「御蔵山古墳」の項に、「下野宇都宮にて掘り出せし石棺及び古器物」に引用された「石棺考」のスケッチを、御蔵山古墳の出土遺物として紹介した（註2）。これは『宇都宮市史』原始・古代編の「第2章第4節 宇都宮の古墳時代」を参考にしたものと思われる。『宇都宮市史』と『宇都宮市埋蔵文化財等遺跡詳細分布確認調査報告書 宇都宮の遺跡』の二書によって、石棺は御蔵山古墳から出土したものであるという認識が事実として定着しつつあり、『日本歴史地名大系9. 栃木県の地名』も「御蔵山古墳」の項に、上記を参考にしたと思われる誤記をしている。しかし、これはその後の追跡調査によって事実誤認であることが判明した。

3 石棺の発見と古棺記

明治15年4月（1882）頃から起った宇都宮への県庁引致運動は、明治16年10月（1883）に県令が藤川為親から三島通庸に代わると活発になり、明治16年11月29日、栃木町から宇都宮町への県庁移転が決定された（註

3)。それにともなって明治17年（1884）4月からは、宇都宮市街地北側の二里山一帯で、栃木県庁新築用地の地均し工事が始まった。工事途中の5月5日、二里山の一遇から石棺とともに直刀・管玉・丸玉などが出土した。当時の下野新聞は「二里山のうち今まで県官等の休息所とせられたる所を昨日取り崩さんとせし一つの石棺を掘だせり（中略）係官は県令帰県の上にて兎も角も取り計らはんと直ちに命じて竹矢来を周囲に結しめたり（後略）」（註4）と報道している。

これに対して、出土地点の東側にある宇都宮二荒山神社では、明治16年～明治19年まで祢宜を勤めていた戸田香園（註5）が、明治17年5月10日付けで、石棺と出土遺物の詳細な見取り図や寸法を記録した（註6）。また明治6年～明治8年まで宇都宮二荒山神社祠宮を務め、明治17年当時河内郡関堀村（現宇都宮市関堀町）で私塾を開いていた梅園春男（註7）は、明治17年5月10日付けで「石棺考」を書いて、『日本書紀』に基づいた被葬者の推定を行った（註8）。

明治18年8月2日に宇都宮を訪れた神風仙人（白井光太郎）は、宇都宮神社（二荒山神社）に立ち寄り、梅園春男が書いた「石棺考」および戸田香園が書いた石棺と出土遺物の見取り図を書き写すとともに、県庁敷地内に放置されていた石棺を調査し、明治21年6月に「下野宇都宮にて掘り出せし石棺及び古器物」と題する報告を『東京人類学会雑誌』に発表した（註9）。この報告は、神風仙人が石棺を調査するに至るまでの経過、石棺考、石棺と出土遺物の見取り図、神風仙人の調査結果の4部で構成されているが、石棺と出土遺物の見取り図は、戸田香園の書いたものを転載し、参考として梅園春男の「石棺考」を、ほぼそのまま載せている。白井が梅園と戸田の業績を高く評価したものと思われる。

石棺は、その後もしばらくは県庁内に放置されていた（註10）。明治19年4月、このころ宇都宮二荒山神社主典の職にあった中里俊文は、石棺や出土遺物をもとに埋め戻すべきことを、県に上申（註11）し、俊文の父中里武太郎は、さらに埋め戻した場所に建碑すべきことを上申（註12）した。

その後県当局は、明治21年1月8日に県庁舎が火災で焼失したにもかかわらず、同年12月28日に県知事樺山資雄出席のもとで石棺の埋葬式を行い、同時に県嘱井上重實の撰文、戸田香園の揮毫による石碑「古棺記」を建てた（註13）。

4 御蔵山古墳の発見と古棺記

石棺が発見された明治17年頃は、日本の近代考古学にとって画期的な時期で、東京大学理学部に在籍していた坪井正五郎・白井光太郎（神風仙人）らが中心となって、人類学会の活動を開始した年であり、翌18年には、彼らによって正式に東京人類学会が創設された。彼らは、考古学を人類学の一部として位置付け、積極的な活動を展開した。明治10年に政府の招きで来日したアメリカ人動物学者エドワード＝モースが、大森貝塚の調査を行ってから7年後のことである。

明治17年5月の石棺の発見が契機となって、その後この周辺で多くの古墳が発見された。戸田香園（明治34年当時は宇都宮二荒山神社宮司）・高橋鑛吉・野寺茂平・岡田順平らは、明治34年9月付けの『古墳発見ニ付上申書』（註14）で、御蔵山の雷神社が載っている場所が前方後円墳であり、周囲に埴輪片が散乱していることを数枚の図を添付して報告した。この古墳が今回調査された御蔵山古墳である。石棺が発見された明治17年5月5日から「古棺記」が建てられた明治21年12月28日までの段階では、御蔵山古墳はまだ未発見であるから、石棺が出土した古墳と御蔵山古墳は別であることがわかる。さらに周囲には「大小四十余の古墳畧々として現存」し、それらのなかには石槨（横穴式石室であろう）が露出しているものがあることも、

第二号図に示して指摘しているから、横穴式石室の開口している古墳が数多くあったものと思われ、群集墳を形成していたことが判る。『古墳発見ニ付上申書』には、これらの内容を示した数枚の図が添付されていたが、『同上申書』を所蔵している栃木県立図書館に図は所蔵されていない。

一方、二荒山神社には、御蔵山古墳関係と思われる見取り図四枚が所蔵されている。「第壱号 平面」は御蔵山古墳の平面図である。図には全長および前方部と後円部の幅が記され、後円部の円周に沿って18個の小さな丸印が記入されており、埴輪の出土地点を示したものと思われる。また図の下部には県庁舎と石棺出土地点を書き込まれている。「第貳号 近傍平面図」は、御蔵山古墳から北に延びる丘陵上の古墳の分布状況を示している。石槨（横穴式石室であろう）が露出したものには印が付けられており、横穴式石室を持つ円墳が多数あったことがわかる。「第参号側面 南方ヨリ望ミシ図」は、御蔵山古墳を南側から見た側面図で、全体が三段に描かれている。「第四号側面 東方ヨリ望ミシ図」は、御蔵山古墳が載っている丘陵全体を後円部側から見て描いたもので、「第三号側面 南方ヨリ望ミシ図」と同様に、全体は三段に描かれている。また、前方部の墳丘頂上に祀られた雷神社にいたる石段が、墳丘の下から続いている様子が描かれており、図の左端には、墳丘の南裾に設けられた柵が僅かに描かれている。

これら四枚の図が1セットであることは、図の通し番号が一致することや描かれている内容から見て明らかであるが、特に、「第壱号 平面」と「第貳号 近傍平面図」の内容は、戸田香園たちが明治34年9月付けで提出した『古墳発見ニ付上申書』の「第一号平面」・「第二号図」の説明文の内容にほぼ合致している。これらのことから見て、二荒山神社に所蔵されている四枚の図が、栃木県立図書館が所蔵している『古墳発見ニ付上申書』に添付されていたものであることは明らかである。

5 移動した古棺記

平成9年1月18日現在、古棺記は、御蔵山古墳後円部の東斜面にある雷神社参道の南脇に建てられている。宇都宮市塙田5丁目1番19号に居住していた中沢万一郎氏は、現在地から約15mほど南側にあった古棺記を、昭和51年（1976）に同所に住宅を建設する際に現在地へ移動した（註15）ことを証言している。中沢氏が述べている「現在地から約15mほど南側」（註16）の位置は、ほぼ旧中沢氏住宅の南角ないしは、旧警友会館下野荘の用地付近である。現在地であれ中沢氏による移転以前の場所であれ、『古墳発見ニ付上申書』に添付したと思われる「第参号側面 南方ヨリ望ミシ図」および「第四号側面 東方ヨリ望ミシ図」にあてはめると、三段に描かれた御蔵山の最上段の裾にあたる。『古墳発見ニ付上申書』が書かれた明治34年9月から中沢氏による移転以前の場所にあったとすれば、明らかに「第四号側面 東方ヨリ望ミシ図」に描き込まれなければならないにもかかわらず、該当する場所には書かれていない。一方、「第参号側面 南方ヨリ望ミシ図」の、三段に描かれた御蔵山の最下段の裾には、「古棺之碑」の注釈と共に、石碑の絵が柵の内側つまり県庁舎に近い方に描かれている。『古墳発見ニ付上申書』が「東北隅の柵内・・・小高き所に埋め其上に古棺の碑一基を建て発掘の原由を記載し在り」と述べている文章とも完全に一致しているから、古棺記を示したものであることは明らかである。つまり中沢氏が証言する位置と「第参号側面 南方ヨリ望ミシ図」および「第四号側面 東方ヨリ望ミシ図」の中の位置は、著しく離れている。中沢氏が証言している位置と第参・四号図の位置の違いに整合性を持たせて考えると、古棺記が建っていた場所は、明治34年9月当時の場所、中沢氏による移転以前の場所、現在の場所の3箇所があったと考えるのが妥当なのではなかろうか。

しかし「第参号側面 南方ヨリ望ミシ図」に描き込まれた場所が、建碑当初の場所であろうか。古棺記は、

石棺を埋めた場所について「御蔵山之下」としているだけで、建碑場所についてはやや曖昧である。一方、明治21年12月28日付下野新聞は「御蔵山の半腹なる高爽の地に埋葬しその傍らに左の如き石碑を建てられた」としており、古棺記に記載された場所と下野新聞に書かれた場所は、微妙に異なっている。しかし両者の内容は、真上に建てたかあるいは脇に建てたかの違いと考えられる。また「第参号側面 南方ヨリ望ミシ図」中に、「古棺埋納地」の文字とともに石碑が描かれていることからすると、建碑した明治21年12月28日から『古墳発見ニ付上申書』が書かれた明治34年9月までの間に、碑の意図的な移転があったとは考えられない。つまり古棺記は、明治21年12月28日の建碑場所（明治34年9月時点も同じ）→中沢氏移転以前の場所→現在地とその位置を変えてきたものと考えられ、移転は2回行われたものと思われる。

では当初に建碑した位置は、現在のどのあたりであろうか。『古墳発見ニ付上申書』では「東北隅の柵内・・・小高き所に埋め其上に古棺の碑一基を建て」としているから、県庁敷地を画した柵内の東北隅の小高い所である。また「第壹号 平面」には、墳丘の南側にほぼ墳丘に沿って柵が描かれており、柵の内側で後円部南東の墳丘裾からやや離れた位置に「古棺埋納地」の文字とともに石碑が描かれている。現在、県庁舎北側の御蔵山は、下をトンネルが貫通したため、トンネル上部にあたる警友会館下野荘や中沢万一郎氏宅は移転して無くなっているが、御蔵山を南側から望むと県庁舎第二別館の裏側で高く立ち上がり、二段に造成された畑（この面と同一面に、現在、自治研修所が建てられている）を経て、御蔵山古墳裾部に至っている。

今回の調査結果から、御蔵山古墳が三段築成であった可能性が指摘されているが、『古墳発見ニ付上申書』が書かれた明治34年当時の御蔵山古墳は、「元ト三段ニ築キ麓の方ニ溝渠を掘りめぐらし」た状態であり、同書に添付したと思われる二荒山神社所蔵の「三号側面 南ヨリ望ミシ図」および「第四号側面 東方ヨリ望ミン図」も、御蔵山古墳を三段に描いている。このことから御蔵山古墳が、三段築成であったことは間違いなく、明治34年当時からすでに認識されていた。一方、「三号側面 南ヨリ望ミシ図」に描き込まれた「古棺記」は、三段に描かれた御蔵山古墳の第一段墳丘（墳丘の最下段）から、さらに下方の斜面と思われる位置に描き込まれている。現在、御蔵山古墳の第一段墳丘の南麓は削り落とされ、フェンスを隔てて畑や自治研修所敷地になっている。こうした状況をもとに、絵図に描き込まれた「古棺記」の位置を、現地に当てはめると、県のフェンスの側であり、現在は畑として利用されている場所にあたるものと思われる。この場所こそ明治21年12月に建碑した場所と考えられる。（註17）

6 栃木県考古学の開拓者

明治34年9月に提出された『古墳発見ニ付上申書』には、戸田香園とともに高橋鑛吉・野寺茂平・岡田順平らが連署している。高橋・野寺・岡田らは、栃木県の古墳時代研究史を語る上で重要な人物である。

高橋鑛吉は当時、宇都宮市上河原町48番地に居住した在野の研究者で、田熊清彦・信之氏によれば「洋服店を営み、写真をよくした」（註18）人物でもある。日本考古学の草創期に活躍した八木熒三郎の「下野国下都賀郡羽生田ノ古墳」（註19）には「昨年ノ八月播州千壺ノ調査ヲ終ヘテ帰りシ後会員高橋鑛吉氏ノ談・・・ヲ聞き直ニ之カ探求ノ念ヲ生ゼシニ」とあり、八木熒三郎を栃木県に誘ったのが、高橋であったことがわかる。高橋は、明治28年にはすでに東京人類学会の会員になっており、考古学的な活動を開始していたものと思われる。また『古墳発見ニ付上申書』を提出する2年前の明治32年、高橋は「下野国河内郡豊郷村宮下ノ古墳」（註20）を発表している。文章はきわめて簡潔であるが、「古墳所在地近傍ノ地勢」・「古墳外部構造及ビ石槨」・「石槨内部副葬及ビ其位置」に分けて記述し、それぞれに具体的詳細な図をそえて解説してお

り、科学的・客観的な報告方法である。これは明らかに坪井正五郎の報告（註21）の記述体裁を踏襲したもので、その学問的レベルは、現在でも本県の後期古墳を研究する際の基準資料として、重要な役割を果たしていることからわかる。栃木県人による近代考古学研究の嚆矢であろう。明治34年に梅園香園とともに『古墳発見ニ付上申書』（前掲）で御蔵山古墳（前方後円墳）の発見を報告したのは、こうした活動の一環としてのものであった。

野寺茂平は、河内郡上三川町下蒲生で農業を営んでいた人物で、『下野国古墳図誌』（註22）によれば、開口していた吾妻古墳（前方後円墳、生壬町）の石室を、明治23年10月に調査したり、上三川町三味場の古墳の発掘に関わって発掘記録を残している。また明治35年には帝国古蹟取調会にも入会している（註23）。帝国古蹟取調会は明治33年に発足したものであると思われるが、会長に公爵九条道孝を据え、国史学の分野からは、帝国大学文科大学史料編纂部長星野恒・同史料編纂委員田中義成・帝国大学教授三上参治・東宮侍講本居豊頼を、人類学・考古学の分野からは、帝国大学理科大学教授であり東京人類学会会長の坪井正五郎、帝国博物館学芸委員であり明治34年には考古学会会長となった三宅米吉らを、学事顧問として迎えた組織である。内務省からの下賜金を受けていることなどから考えると、明治政府の強い影響下にあったものと思われる。こうした組織に入会し、古墳の研究に重点を置いて活動した野寺は、田熊清彦・信之が指摘したように「先学諸氏の伝述した如き盗掘者とは甚だ異なった」（註24）人物であり、学史の中でも正統な評価が与えられる人物であろう。

岡田順平は、『古墳発見ニ付上申書』に連署した明治34年当時は、宇都宮市三条町5番地に居住していた。明治28年に創設された考古学の全国組織である考古学会に入会しており、すでに機関誌に「栃木県下各郡村古塚発掘物概覧表」（註25）を発表して、古墳を研究の対象として活動していたことがうかがえる。

このように黎明期の日本考古学の中で、地方を舞台に積極的学究的に活動した人々が、栃木県にも少なからずいたことは、特筆すべきことであろう。

7 おわりに

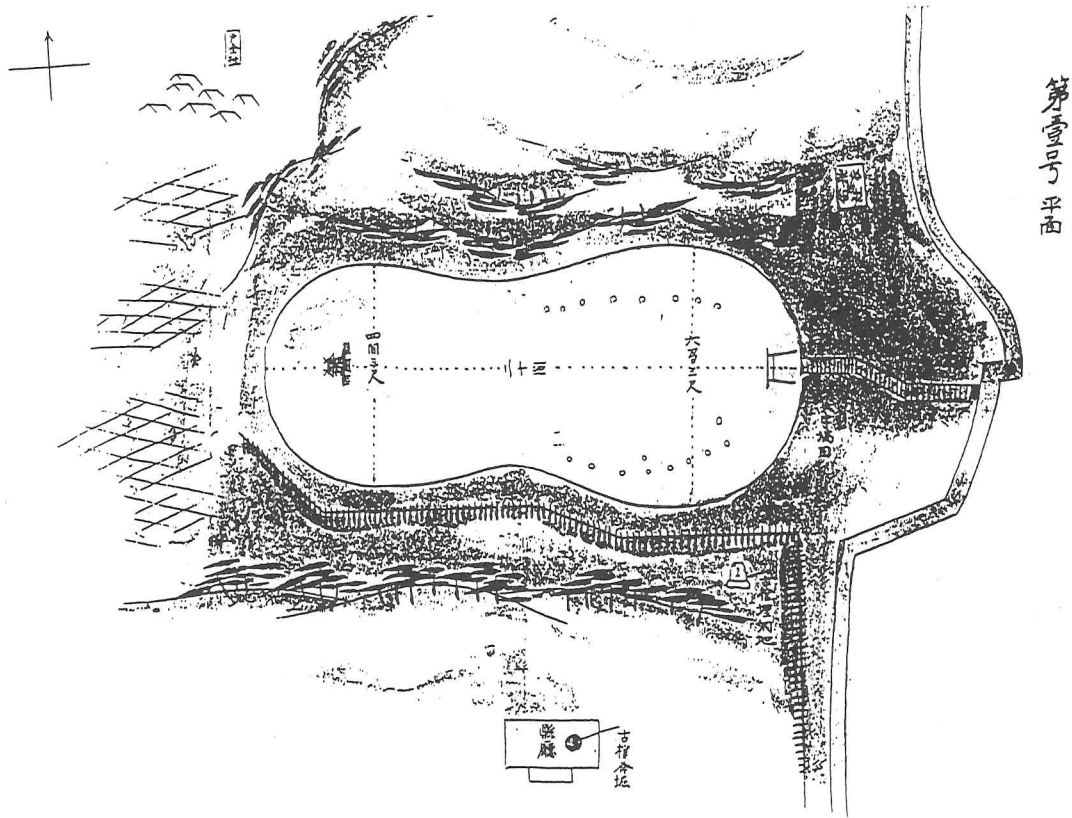
以上みてきたように、古棺記の建碑と御蔵山古墳の発見は、こうした時代の中で行われた。多くの考古学研究者が言うように、徳川光圀の上下侍塚古墳の発掘を別にすれば、栃木県における科学的考古学の出発点は、坪井正五郎による足利古墳の発掘調査である。おそらく面識はなかったであろうが、坪井正五郎の影響を受け、足利古墳の発掘に遅れること十数年で、旺盛な探求心と高いレベルの研究姿勢をもった考古学研究者が、栃木県で生まれていったことは、栃木県を研究フィールドにする私たちにとって、誇るべきことであろう。

現在、考古学は、大規模な発掘に伴う多量なデータの集積をもとに、格段の進歩を遂げている。しかし、この進歩の背景には、幾多の先学の業績があることを忘れてはなるまい。私たちが先学の業績を振り返るとき、現在の研究レベルで過去を批判することはたやすい。しかしその批判は、決して当を得たものではあるまい。先人の業績は、それを生み出した時代の研究レベルの中に、正しく位置付けてこそ正当な評価が下るのである。私たちが、恣意的な解釈や先入観を捨てて謙虚に研究史を振り返り、自分の意見を研究史のなかに位置付けながら考えるとき、これらの業績やデータは、初めて私たちに真実を語りかけてくれるものと思う。

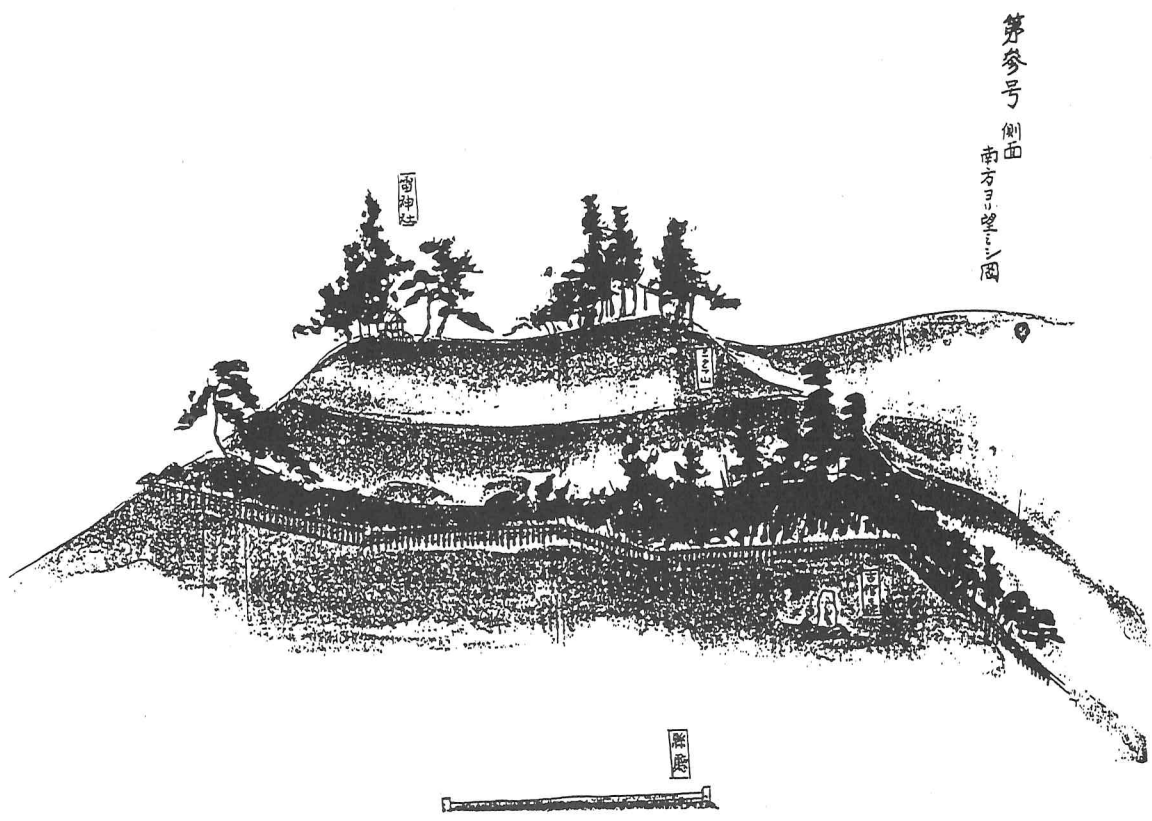
（作新学院高等部 山ノ井清人）

(註)

- 註1, 神風仙人「下野宇都宮にて掘り出せし石棺及び古器物」『東京人類学会雑誌』第28号 東京人類学会明治21年6月
- 註2, 『宇都宮市埋蔵文化財等遺跡詳細分布確認調査報告書 宇都宮の遺跡』 宇都宮市教育委員会 昭和58年
- 註4, 「石棺」 『下野新聞』雑報 明治17年5月6日
- 註5, 本名は戸田誠
- 註6, 栃木県立図書館蔵
- 註7, 「梅園春男翁」『宇都宮の碑』 宇都宮市教育委員会 昭和57年3月25日
- 註8, 梅園春男「石棺考」は縦罫紙に手書きした記録。栃木県立図書館蔵
- 註9, 註1に同じ
- 註10, 「石棺埋葬式」 『下野新聞』雑報 明治21年12月29日
- 註11, 栃木県立図書館蔵
- 註12, 栃木県立図書館蔵
- 註13, 1, 「石棺埋葬式」 『下野新聞』雑報 明治21年12月29日
2, 『宇都宮の碑』は、古棺記の撰文者を鳥居龍造、建碑年月日は明治26年3月としているが、撰文者・建碑年月ともに誤りである。
3, 小林友雄『栃木県総史』第1巻は「(明治21年1月8日の火災後)新庁舎建築の際に、先に埋めた石棺がまた掘り出され」たとしているが、県庁舎の火災から約1年後に埋葬・建碑が行われており、埋葬・建碑が行われた明治21年12月28日には新庁舎の建築工事は、すでに開始されていた。したがって新庁舎の建築工事で石棺を再び掘り出したとは考えられない。
- 註14, 戸田香園ほか『古墳発見ニ付上申書』明治34年9月 栃木県立図書館蔵
- 註15, 栃木県総務部管財課『古棺記資料』平成元年1月27日
同文書は、下野荘管理人平山氏の談話として「下野荘ができた後に(45. 4. 10), 中沢氏が住宅を建てた。その時に雷神社参道に移設した」としているが、中沢氏が同所に住宅を建てたのは、ゼンリン住宅地図によれば昭和51年(1976)頃と思われる。
- 註16, 栃木県総務部管財課『古棺記資料』平成元年1月27日
同文書は、「(2)当初建立位置 現在地の約15m南側で、県のフェンスの外側に相当する場所にあった」としている。
- 註17, 栃木県総務部管財課『古棺記資料』平成元年1月27日
同文書は、「県のフェンスの外側に相当する場所にあった」としているが、私の推定では明らかに県のフェンスの内側になる。
- 註18, 田熊清彦・田熊信之『下野国河内郡内出土の古瓦』 中国・日本史学文学研究会 昭和55年3月
- 註19, 八木契三郎「下野国下都賀郡羽生田ノ古墳」『東京人類学会雑誌』第11巻116号 明治28年11月
- 註20, 高橋鑑吉「下野国河内郡豊郷村宮下ノ古墳」『東京人類学会雑誌』第14巻158号 明治32年5月
- 註21, 坪井正五郎「足利近傍の古墳」 『東京人類学会報告』8号 明治19年10月,
坪井正五郎「足利古墳発掘報告」 『理学協会雑誌』第5巻40号 明治20年,
坪井正五郎「足利古墳発掘報告」 『東京人類学会雑誌』第3巻3号 明治21年8月
- 註22, 著者不明『下野国古墳図誌』発行年月日不明 直筆和綴本 栃木県立図書館蔵
- 註23, 田熊清彦・田熊信之『下野国河内郡内出土の古瓦』 中国・日本史学文学研究会 昭和55年3月
同書中に、帝国古蹟取調会が野寺に出した会費納入督促状が紹介されている。
- 註24, 註23に同じ
- 註25, 岡田順平「栃木県下各郡村古塚発掘物概覧表」『考古学会雑誌』2-7



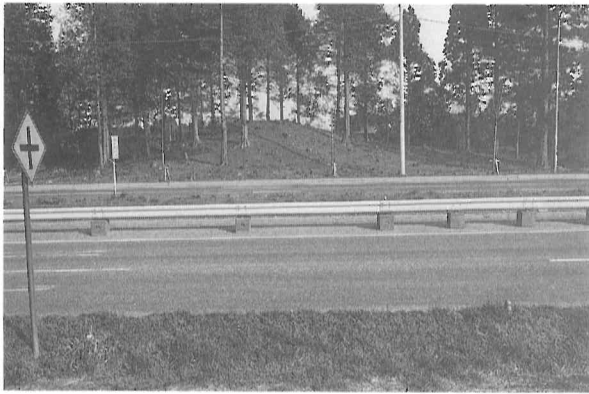
第一号 平面



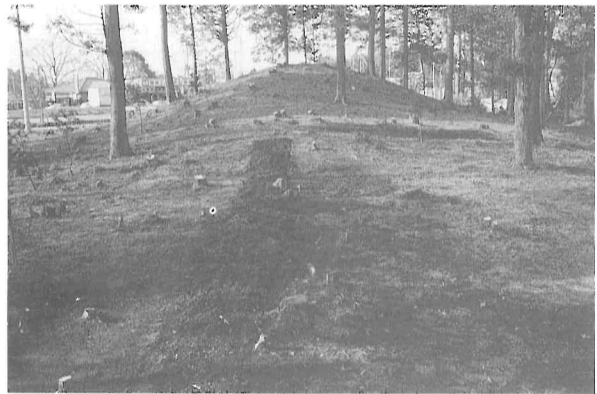
第三号 側面
南方ヨリ望ミシテ

第46図 御藏山古墳見取図 (二荒山神社所蔵)

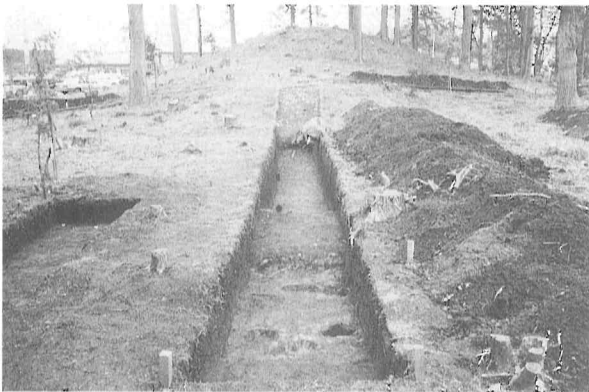
圖 版



(1) 久部愛宕塚古墳遠景



(2) 全景 (南より)



(3) T-1 (周溝側より)



(4) T-1 礫群出土状況 (墳丘側より)



(5) T-1 遺物出土状況



(6) T-2 (南東より)



(7) T-4 前方部南東隅 (南より)



(8) T-6, T-7 (墳丘側より)



(1) T-9, T-10 (墳丘側より)



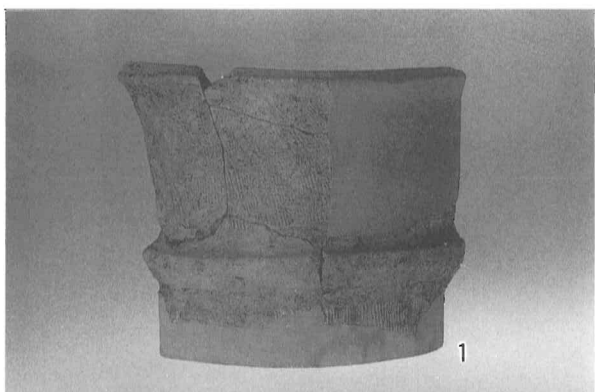
(2) T-11, T-12 (周溝側より)



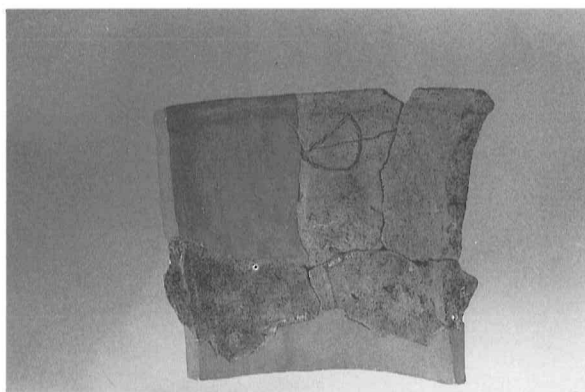
(3) T-15 (東より)



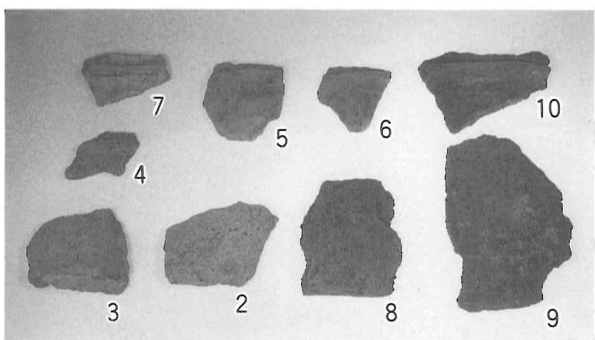
(4) 東くびれ部 (東より)



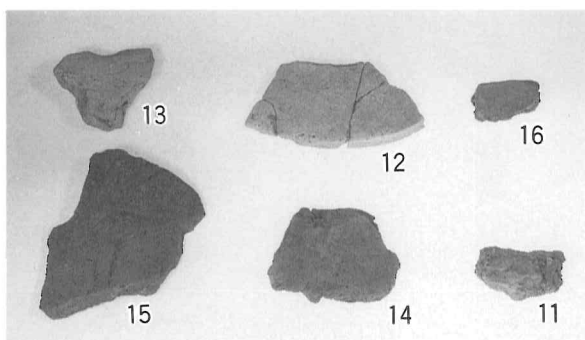
(5) 線刻埴輪 (外面)



(6) 線刻埴輪 (内面)



(7) 円筒埴輪片



(8) 形象埴輪片



(1) 谷口山古墳全景 (南より)



(2) 玄室入口 (南より)



(3) 玄門 (北より)



(4) 墓道確認状況 (南より)

PL 4 谷口山古墳



(1) 羨道部床面 (南西より)



(2) 羨道埋土状況 (南東より)



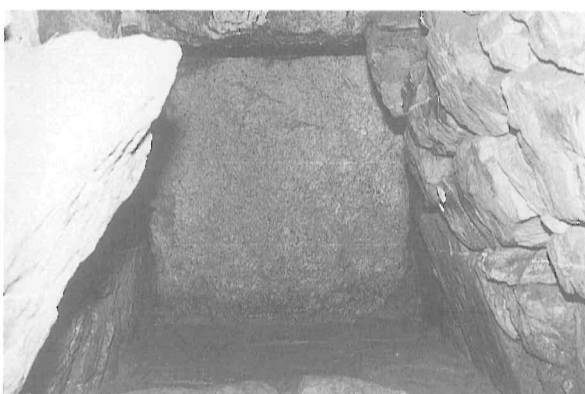
(3) 框石 ((南より)



(4) 境石 (南より)



(5) 板石敷床面 (南より)



(6) 奥壁 (南より)



(7) 側壁 (西側)



(8) 側壁 (東側)



(1) 墓道確認状況 (北より)



(2) 墓道埋土状況 (南より)



(3) T-3周溝部 (南より)



(4) T-1周溝断面 (北より)



(5) E・G区人骨出土状況①



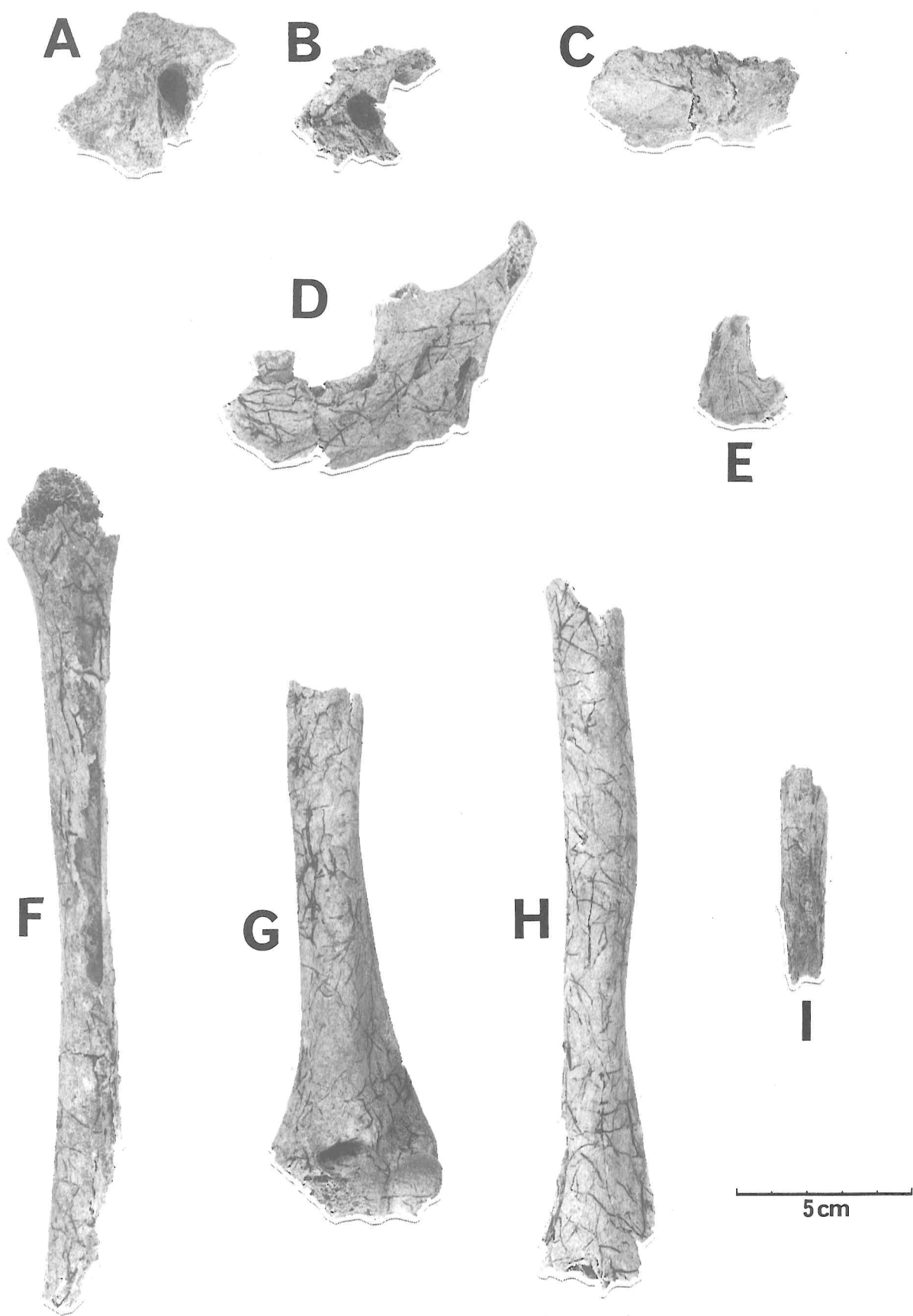
(6) E・G区人骨出土状況②



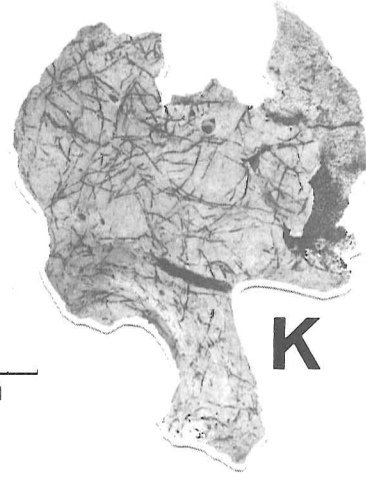
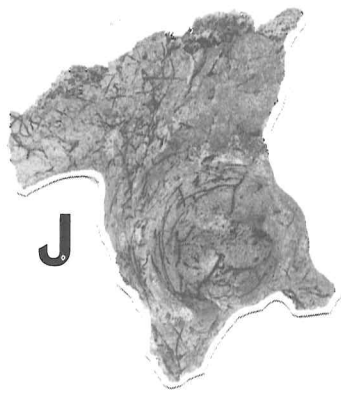
(7) E・G区人骨出土状況③



(8) E・G区完掘 (第1次埋葬面)



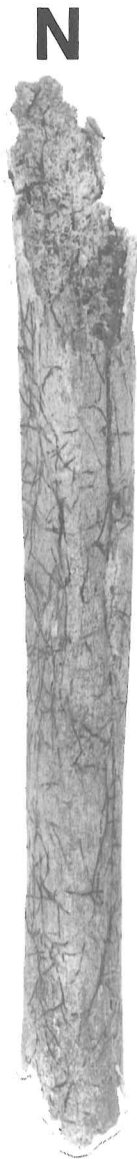
人骨写真1



5cm



5cm



5cm



人骨写真 2



(1) I・L区遺物出土状況①



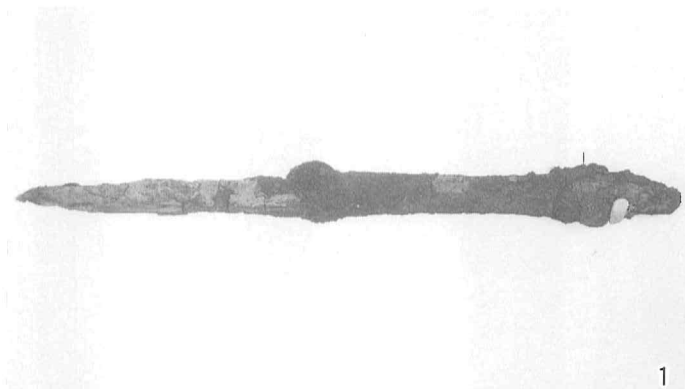
(2) I・L区遺物出土状況②



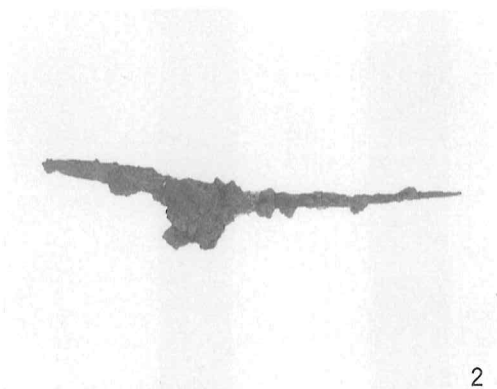
(3) 直刀 (第27図-1) 出土状況 (南東より)



(4) 直刀出土状況 (西より)



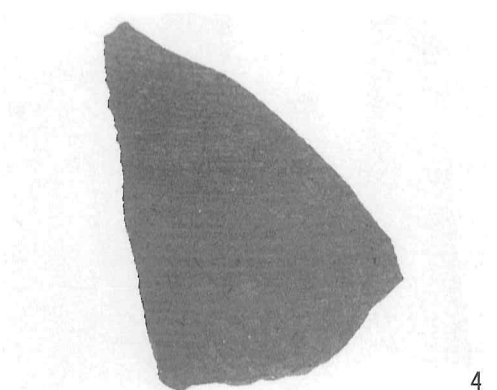
1



2

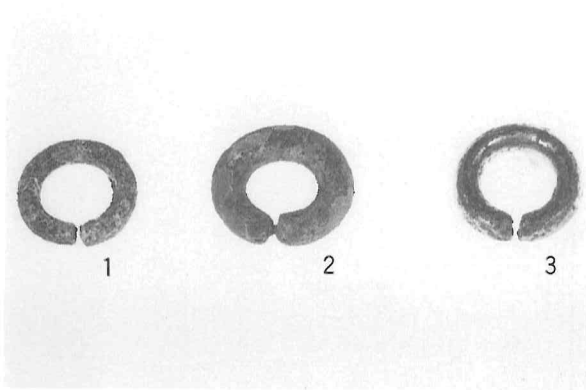


3

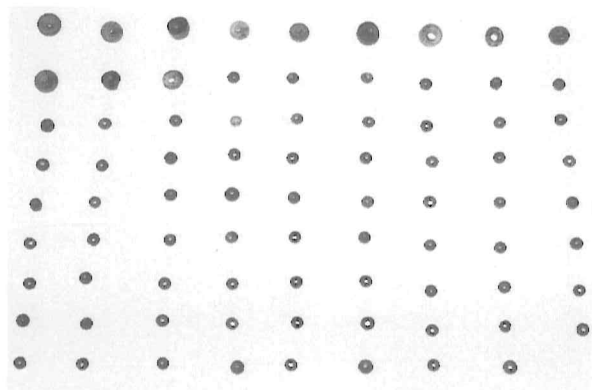


4

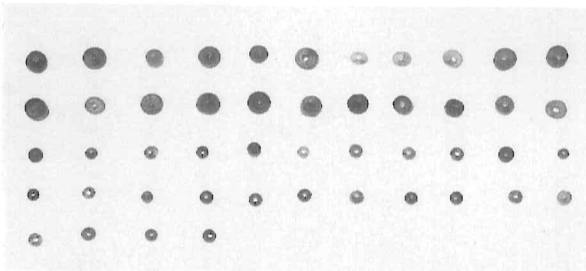
(5) 古墳出土遺物



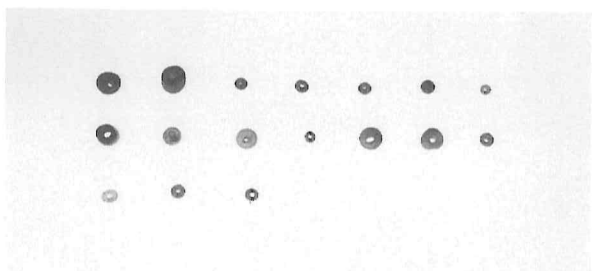
(1) 耳輪



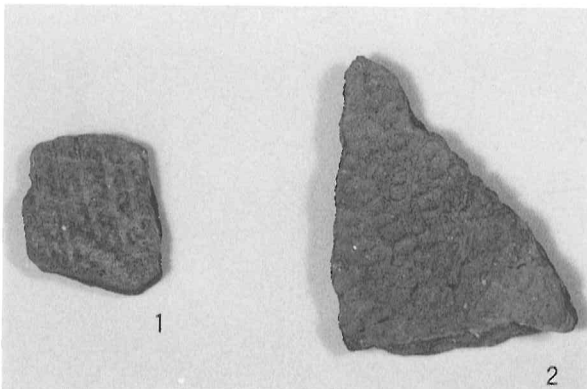
(2) ガラス小玉 (4~72)



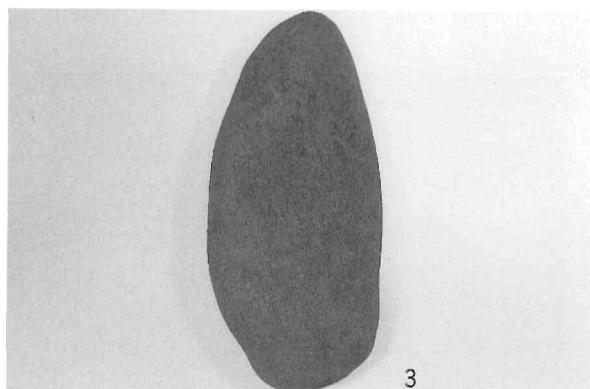
(3) ガラス小玉 (73~131)



(4) ガラス小玉 (132~148)



(5) 縄文時代遺物



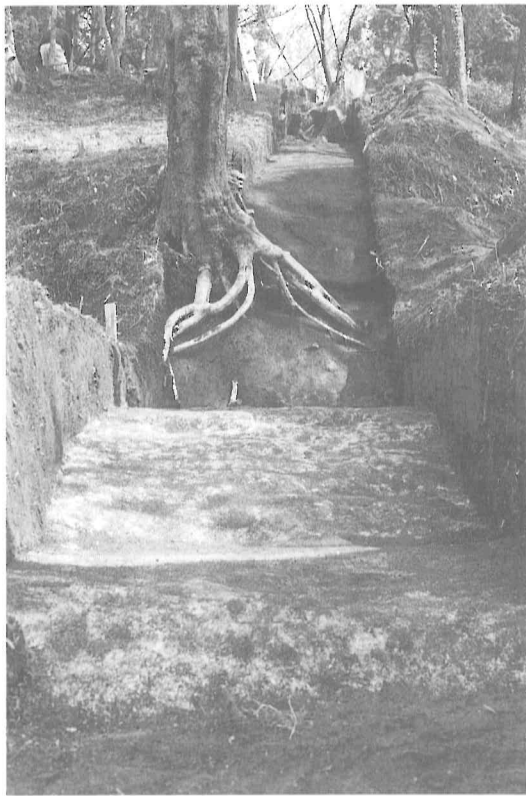
(6) 調査風景



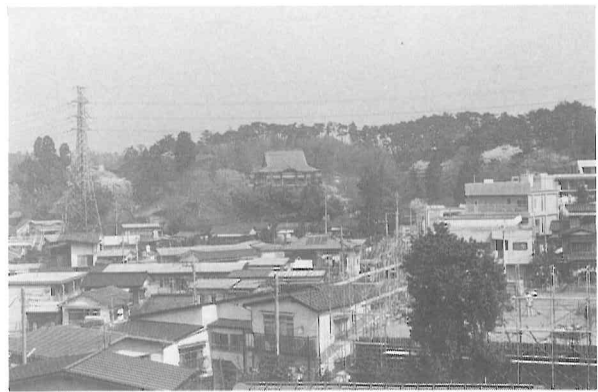
(7) 発掘調査関係者



(1) 御蔵山古墳全景 (北より)



(3) T-1 (西より)



(2) 祥雲寺境内古墳遠景



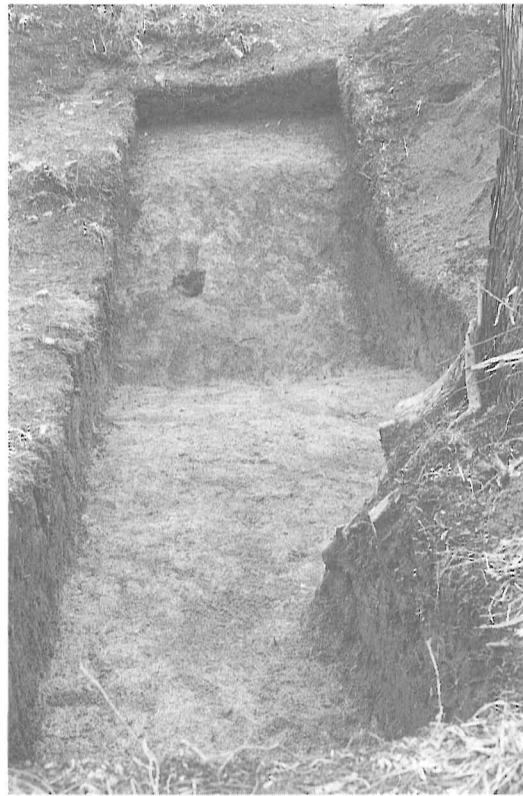
(4) T-1 セクション (北西より)



(1) T-1 断ち割り内遺物出土状況①



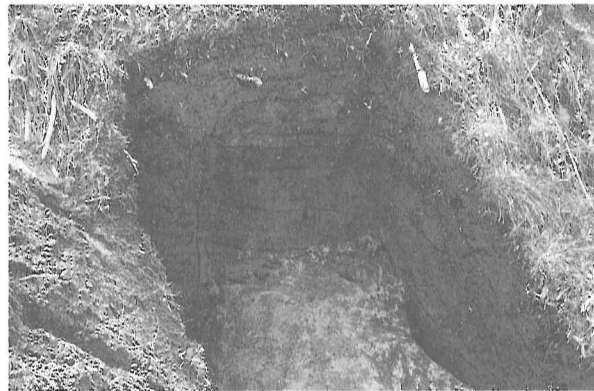
(2) T-1 断ち割り内遺物出土状況(北より)②



(3) T-2 (西より)



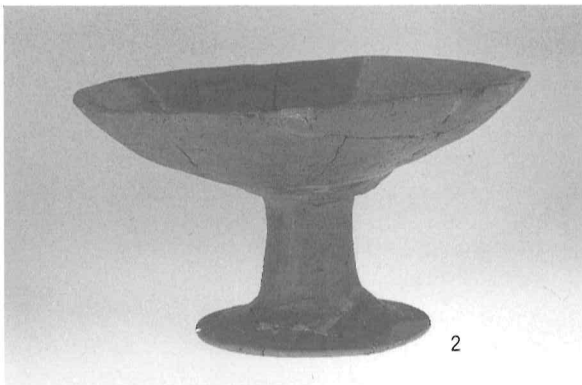
(5) T-4 (北より)



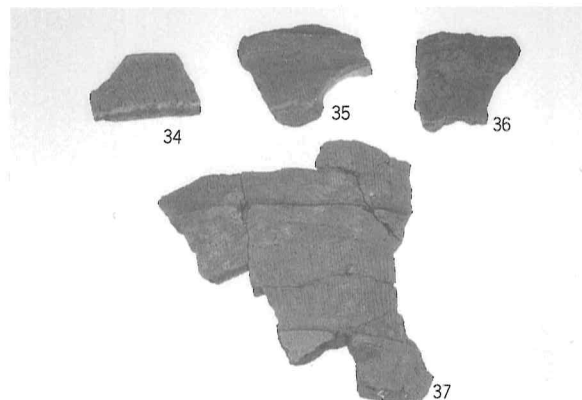
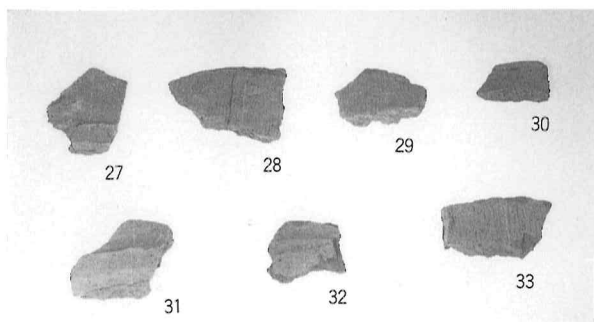
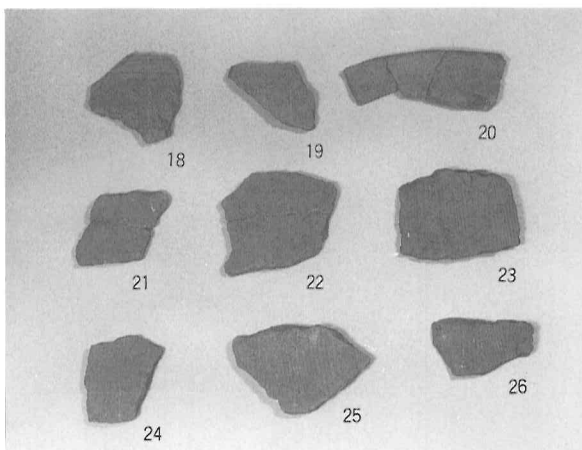
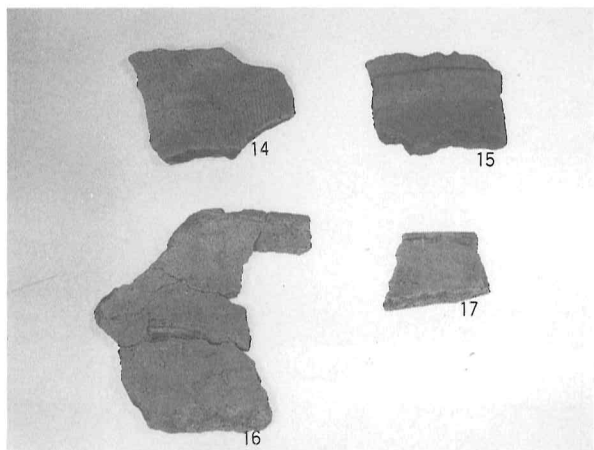
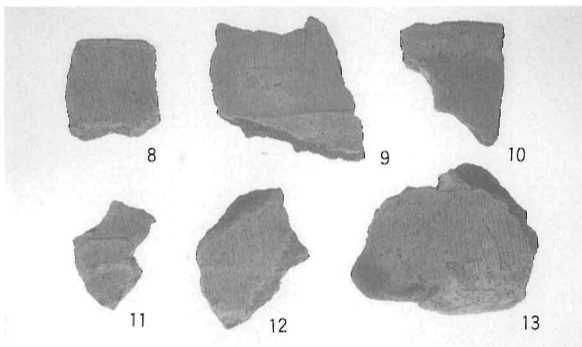
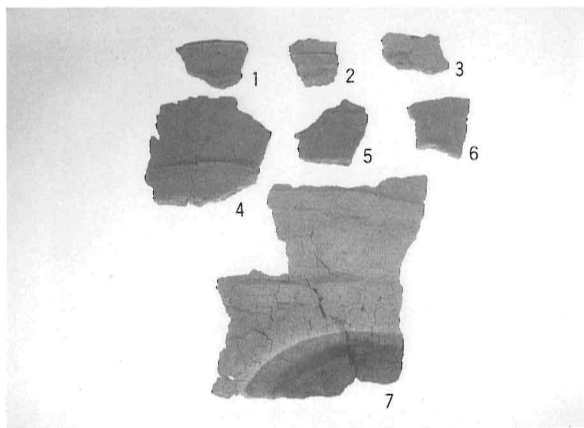
(4) T-3 盛土状況 (西より)



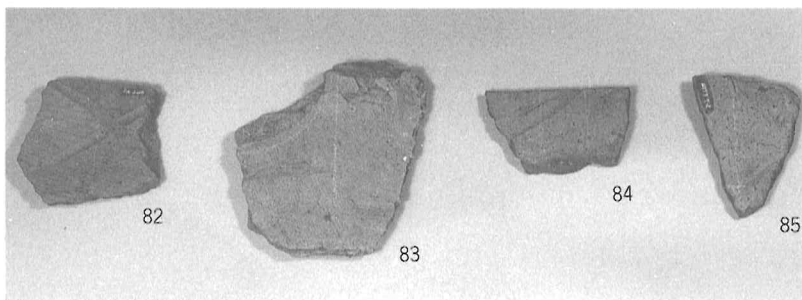
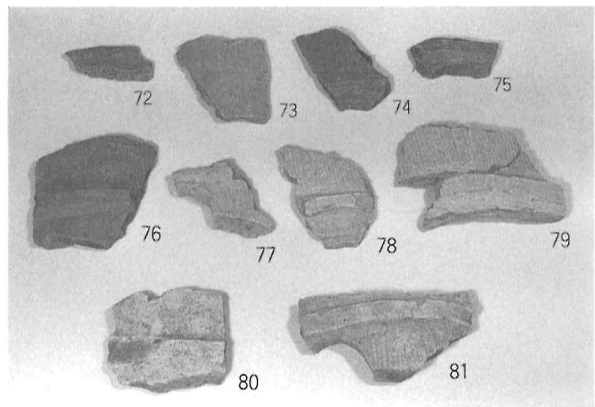
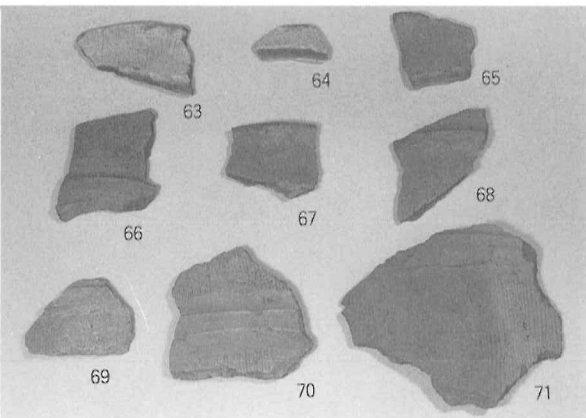
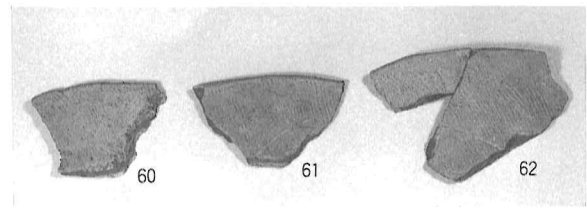
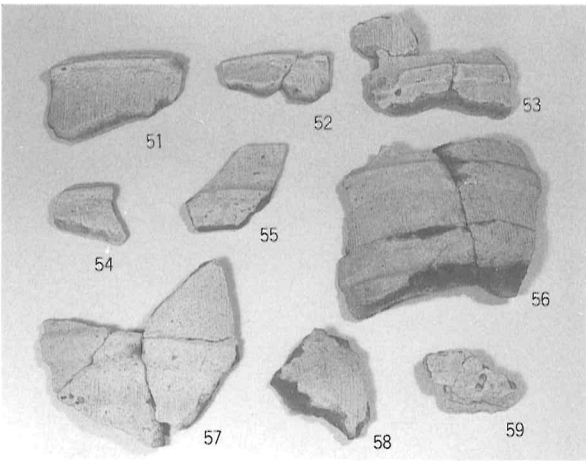
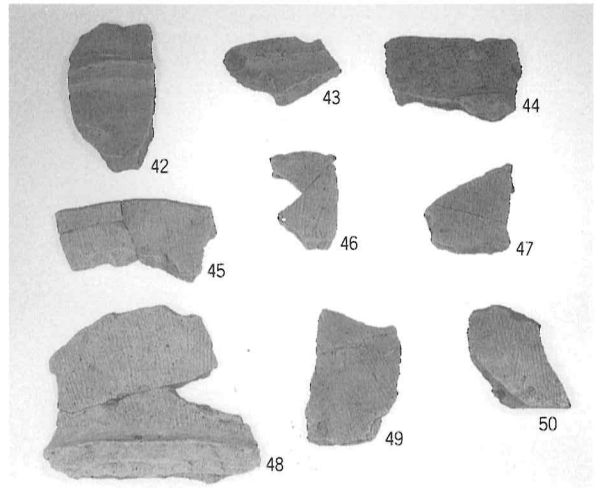
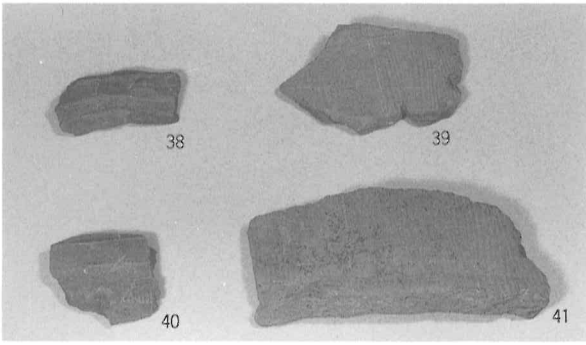
(6) T-5 (南より)



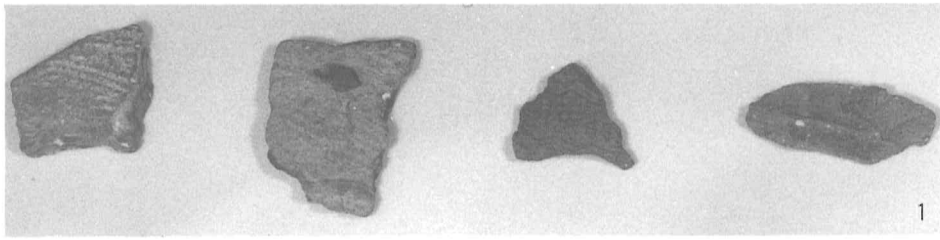
(1) 出土土器



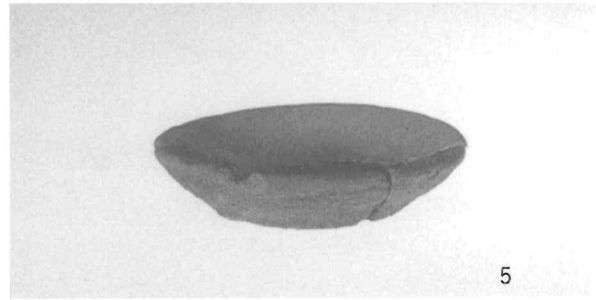
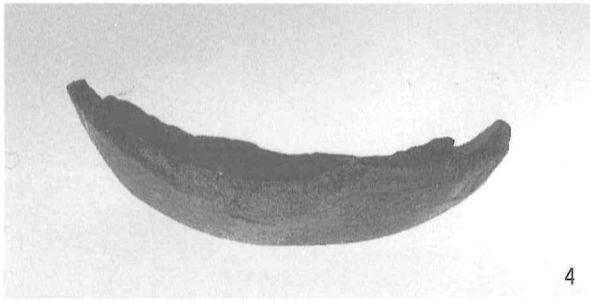
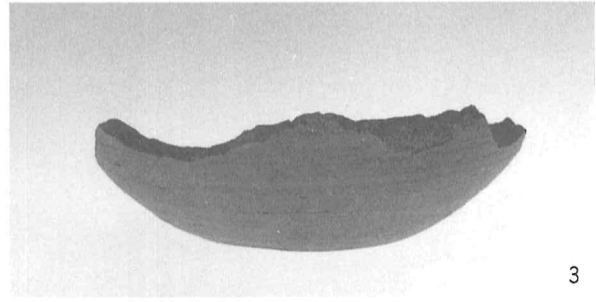
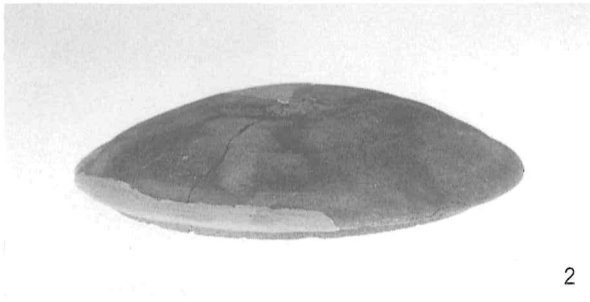
(2) 出土埴輪①



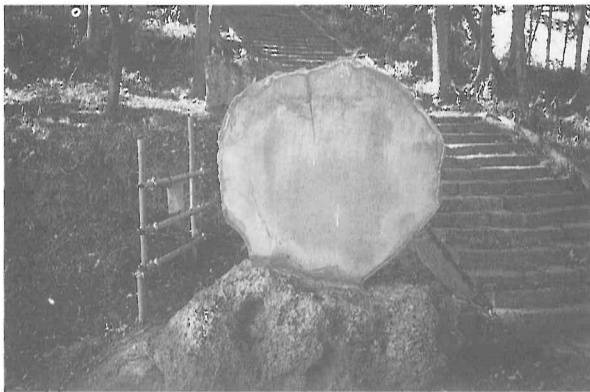
(1) 出土埴輪②



(1) 縄文土器



(2) その他の遺物



(3) 古棺記



(4) 発掘調査関係者

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第37集

久部愛宕塚古墳
谷口山古墳
御蔵山古墳

平成7年3日発行

発行 宇都宮市教育委員会文化課

(宇都宮市旭1-1-5)

TEL (028) 632-2764

印刷 伴印刷株式会社

(宇都宮市栄町6番10号)

TEL (028) 622-8901
